
希薄な恐怖心

国府神紫音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

希薄な恐怖心

【Nコード】

N9295F

【作者名】

国府神紫音

【あらすじ】

“異常”に対する警戒心と“死”に対する恐怖心が欠落していると言われる俺は、ある雨の夜に毛布に包まって倒れている少年を見つける。何の考えも無く、俺はその少年を拾うが……

プロローグ：俺と少年の出会い

俺がその少年を拾ったのは、外界が雨にけぶる梅雨のある夜だった。大学を卒業後、本屋で社員とアルバイトの間に位置する準社員というものになつてから、凡そ一年が経とうとしている頃だ。

「今日もご苦労様。最近変質者が多いみたいだから気をつけて帰れよ？お前ちよつと女つばい顔してるからな」

そう言つて仲の良い男性社員に見送られた帰り道。最初の頃は女顔とからかわれる度に噛み付いていたが、思えばそんなことは小さい頃からあつたので、何を熱くなっていたんだと思うようにはなつていた。

「あ？」

俺は昔からある一点が欠落していると言われていた。それは、“異常”に対する警戒心、もとい“死”に対する恐怖感。だがそれは俺だけに限ったことではないだろうと思う。この広い世界では、俺みたいな人間は掃いて捨てるほどいるはずだ。

「あれは、人間・・・？」

俺が仕事を終えて家路につくのは、大抵十二時を過ぎている。仕事に入るのが午後二時半からで、終業が十一時半。それから少し後処理やらなにやらを済ませるから、日付が変わる前に店を出ることは殆どと言つて良いほど無い。

「・・・・・・・・・・」

いつも近道と称して通る道は、公園というのがおこがましいくらいに小ぢんまりとした児童公園と公民館の間にある大した幅の無い土の地面で出来ている。雨でぐつしよりにぬかるんだその道に、恐らくまだ中学生くらいの少年がぐつたりと倒れこんでいたのだ。

俺はそつと近付き、

「寝てんのか？」

とまずありえそくに無い言葉を少年に掛ける。少年は一切反応しな

い。真逆死んでるのか？そうは思ったが、それを恐いとは思わなかった。

ふうん、死んだのか。それはそれは大変だな。そうとしか思えない。

「……………ん？」

そこで俺はあり得ないことに気付く。

「裸……………」

少年はどうやら裸身のようにだった。ボロボロの毛布を纏わりつかせてはいるが、下は素肌が覗いている。しかも目に見える範囲だけで、ナイフか何かの刃物で付けられたような切り傷が幾つもあった。

「眼帯、」

少年は右眼に眼帯をしているが、雨に濡れそぼったそれは全く眼帯として機能しているようには見えなかった。何故かその眼帯が気になって、俺はそつと指を伸ばした。早くこの少年を介抱してやらねば、とか、関わったら危険だ早く逃げようとかいった危機感とかも、一切起こらなかった。ただこの少年に並々ならぬ興味があった。

「……………へえ」

何の感嘆の声かは分からないが、俺の口はそう呟いていた。

少年の、眼帯の下。そこには本来あるはずの眼球といったものはなく、真っ赤な眼窩が覗いているだけだった。気持ち悪いといった思いは一切浮かばないまま、俺は眼帯を元に戻した。

俺は少年をどうしようか、と考える。どうやら生きてはいるらしいことは、ほんのりと温かい少年の体が証明している。だがこのまま雨に打たれた状態のまま放置したら、翌朝には生きていないかもしれない。梅雨で蒸し暑いとはいえ、最近雨の降った翌朝は底冷えすることが多い。少年に体力如何によって生存率は変わってくるだろうが、

「……………なんか楽しそうだな、」

別に今の生活に不満を持っているとか、自分から異常に足を突っ込んでスリルを味わいとか、そういう気持ちで沸き起こったわけでもない。ただ単に、少年に興味があっただけだ。しかも明日は連勤明

けの二連休の初日。することがあるわけでもなし、どうやって暇を潰そうか決めあぐねているところだったのだ。

「取って食ったりしないから、安心しろな」

俺は細い少年の体を、自分の服が汚れるのも構わずに背負った。余りの軽さに、面白くて俺は一人笑った。

これが、俺と少年――来栖朔くろすはくの出会いの顛末である。この俺の気まぐれがこの後どういう展開を見せるのか、もしこのとき知っていたら俺は朔を放っておいただろうか。

いや、と思う。それでも俺は朔を拾ったに違いない。

どうやら俺には、“異常”に対する警戒心や“死”に対する恐怖心が欠落しているらしいから。

1、介抱

少年を拾った翌朝、俺が目覚めても少年はまだ目覚めていなかった。俺のダブダブのシャツを着て、一切身動きをした様子もなくあお向けの状態のままで眠っている。

「腹減った・・・」

眠気はまだ燻っていたが、食い気には勝てなかった。食パンは昨日切らしたなあとぼやきながら俺は冷凍庫を開ける。朝っぱらから冷凍炒飯を食べようという魂胆である。深皿に炒飯を入れ、レンジで温める。その間に洗顔と歯磨きを済ませ、髪に適当に手櫛を入れる。相変わらずボサボサだ、と寝ぐせのつきまぐった頭を見て一人で苦笑する。この癖ツ毛は昔からで、どうも直らない。

「つと、」

炒飯の温めが終わったので、立ったままで機械的にそれを口に運ぶ。目は少年から離れない。布団は一つしかないから、少年に布団で寝てもらい、俺は適当に雑魚寝をした。おかげで体のあちこちがぎしぎしいつている。

「・・・ねむ、」

昨晚、俺は少年を背負って自宅である借りマンションに戻って来た。近くに二十四時間のスーパーあり、馴染みのドラッグストアあり、バス停も近くにあるし、なにより静かな環境が俺のお気に入りだ。そんな場所に立つマンションの最上階の七階に俺の家はある。一人暮らしは大学二年の頃からだから、すでに新鮮味は一切ない。

エレベーターでは誰にも会うことなく、少年を家に連れて行くのに目をつける人間は一切いなかった。鍵を開けて部屋に上がる。すぐ右手に台所、左手に浴室とトイレ。真っ直ぐにフローリングの居間

兼寝室。まずは少年の雨で濡れた体をどうにかしないことには部屋に入ることは出来ない。だから毛布ごと少年を浴室に運び、毛布を剥ぎ取った。

「おわ、」

俺は恐怖心は抱かなかったものの、吃驚はした。毛布から覗いていた素肌には何本もの切り傷があったのは分かっていたが、毛布を剥ぐと更に凄い数の切り傷が目に入った。腹も腕も胸の辺りも太ももにも。

「・・・のわりには顔は綺麗なもんだ、」

確かに泥や雨で汚れてはいるが、綺麗なタオルで拭くと整った寝顔が見えた。ただ、眼帯の下がどうなっているのかは既に外で見ているので、あえて見ようとは思わなかった。だが、眼帯は濡れたままというのはどうだろうと思った。眼窩にばい菌が入って化膿、ということはないのだろうか。

「ま、いいや。眼帯のことは後で」

俺は一人ぶつぶつと呟きながら手を進めていく。

タオルを濡らして汚れた体の場所を拭いてやるが、相手は少年とはいえ裸の相手を見つづけるのは抵抗があった。俺は泥で汚れた手を洗い流し、部屋に入っていく。筆筭を適当に開けて大きな目力タターシャツを取り出し、浴室に取って返す。少年は眼を閉じたままだ。あまり苦しい顔はしていないし、切り傷も真新しいものではない。そうだ。なら何故あんな狭いところで倒れていたのか。もしや腹減りか？と俺は色々考えながらも、少年に上着を着せてやる。

「よいせ、っと。服はこれで良いな」

水気を拭い、シャツも着せた俺はまた少年を浴室に寝かせると、部屋に取って返した。布団を引き、開け放しだったカーテンを閉じる。そして寝られる準備を調べ、浴室から少年を抱えてまた部屋に戻る。

「こんだけ動かして身動き一つしないってすげえな・・・」

出来るだけ丁寧に運んだり拭いたりしたつもりではあるが、少しくらいは反応しても良いと思うのだが。

「まあ、いいや」

息は普通にしてるし、放っておけばそのうち目を覚ますだろう。少なくとも変な輩に襲われて殺されるといったことはない。

「さ、て俺も飯食って寝るか」

俺はでかい欠伸をして、風呂を沸かしにまた浴室へ行っただった。

そして、翌朝。昨日の雨が嘘だったかのように、外は晴天だった。

「まだ起きねえな……」

だが幾らかは顔色も良くなっているし、徐々に頬に赤みが戻りつつある。もう少ししたら起きるかもしれない。あ、そう言えばこいつが起きてても食わしてやるものがねえや。多分起き抜けは消化のいいものがいいはずだ。仕方ない、俺も炒飯だけじゃ足りないし、スーパーに買いに行こう。まだ少年は起きないだろう。急いで行って来るとしよう。俺は財布を引っ掴むと、部屋を出た。

2、少年とのファーストコンタクト＋日常

その男は、昨日“捨て”た場所に少年がいないことに眉を寄せた。彼の計算では、少年の物言わぬ体が転がっているはずなのに。

「どういうことだ？」

この声にこもるは不審と、微かな喜び。

「そうだ、ただ死なれるだけでは詰まらない。最期まで足掻いて足掻いて足掻きまくれ。そしてその顔を絶望に歪め、然るのち・・・・死ね」

深くかぶった帽子で目鼻は見えないが、見えている真っ赤な唇がにいつと不気味に微笑んだ。

「よう、鳴海」

「あ、先輩おはようございます」

大学時代の一個下の後輩―鳴海和晃は今日も朝一なのだろう、レジに入っていた。時間が時間だけにまだ忙しそうではないが、これから忙しくなる。

「いい加減その先輩つての止めるよ、学校じゃねえんだから。斗賀^{とが}の野^のか笙汰^{しやうた}で良いって言ってるだろ？」

「先輩はいつまで経っても先輩なんだから良いじゃないですか」

鳴海はでしょ？と人懐っこい笑みを浮かべた。小柄で笑顔が愛らしい鳴海は他人に好かれやすい。ただお人よしなところが、誰彼構わず信用し易い。それで悲しい想いを何度も味わった筈が、本人は忘れているのか押し込めているのかその性格は変わらない。ま、そこが鳴海の良い所かな。

「先輩どうしたんですか？考えごと？」

「ん、別に。じゃ、お前のレジ行くからよろしく」

「はいはい」

につこり笑顔の鳴海の頭をわしゃわしゃとかき混ぜ、俺は売り場へ向かった。その俺の背中を、鳴海が悲しげに見送っていることに俺は気付かなかった。

買い物物を済ませて帰って来るも、やはり少年は目覚めていなかった。身動き一つしていないらしく、布団の乱れすらない。まさか呼吸音は俺の勘違いというオチか？だとしたら俺は死体を介抱したってことになるのか。折角の休日にな？俺は自分の考えに苦笑する。少年に背を向け、買ってきた食材を冷蔵庫に詰めるために台所へ向かって一歩足を踏み出した瞬間、

「動くな」

聞いたことの無い高い声が耳に入った瞬間、俺は腕を捻り上げられて床に突っ伏していた。

「………痛いんだが」

俺の口から出た言葉は無感動なそんな言葉だった。だって痛いんだから仕方ないじゃないか。

「寝たフリか？少年」

「誰だ、貴様」

捻り上げられた腕を掴む少年の手はひやりと冷たい。

少年はどうやら目覚めていたらしいが、俺が帰ってきたので寝たふりを決め込み、俺が背を向けた瞬間に牙を剥いたわけだ。なんとまあ素早い動きだろう。全く動いた気配も物音も感じなかった。やつ

ぱり普通の少年ではないみたいだな、とやはり無感動に思う。俺は意味もなく可笑しくなってきた、口元に笑みを浮かべた。

「……何がおかしい、」

少年は声変わりがまだなのか、高い声だった。その声が非難の色を帯びる。

「いや、君が元気そうだから嬉しくてな」

心にもないことを言って、自分で寒くなった。他人を思いやる心がまだ俺にはあるのか。

「は？」

だが少年には効果覿面だったのか、そんな変な声を上げて俺を拘束している手から力を抜いた。

馬鹿め。

「まだまだ修行が足りんな、少年」

「え、」

少年がまだ状況判断を出来ぬうちに、俺は逆に少年を押さえ込むという体勢に変えた。すぐには理解出来なかったらしいが、やがて喚き出した。

「は、放せよっ！！」

「口の聞き方を知らないガキだな」

怒りの気持ちはなかったが、俺はそんなことを口走っていた。少年はぎゃあぎゃあ騒ぎながら俺の腕を払おうとする。弟がいたらこんな感じなのだろうか、と俺は場違いなことを考えていたが、いきなり少年が

「……っつ、」

と痛みに呻き声を上げたのでさすがに慌てた。そんなにきつく締めたつもりはないのだが。俺が拘束の腕を解くと、少年は床に四つん這いになってうつうつ、と呻く。

「どっか痛いのか？」

「さわ…るなっ、」

だが俺は少年に触れ、少年はもがこうとした。その拍子に、見えた。

眼帯から赤い液体が垂れているのが。雨を吸ってぐしょ濡れになった眼帯は、ただ目を隠しているだけで本来の役目を果たしてはいなかった。眼窩に細菌か何かが侵入し、出血したのだろうか。

「……………」

少年は痛みに呻き、眼帯を押さえながらもよろよろと立ち上がった。俺はその様子を眺めるだけだが、少年の足が玄関に向かうのを見て、「お前、そんな状態で外に出るつもりか？不審者扱いされて通報されるぞ」

少年がビクツと震えて一瞬立ち止まるが、すぐに歩き出す。

「おい」

「僕のことは、放っておいてよ。あんただって僕が不審者扱いされたら嬉しいだろ」

あんただって、という言葉に俺は眉を寄せた。少年はついに玄関のドアの前に到達し、ノブに手を掛けた。俺がどうすべきか迷ったままその細い背中を見送っていると、いきなり少年の体が床に沈んだ。「っ、うああっ……………！」

今までで一番痛そうな呻き声を上げ、体を丸める。酷い激痛が少年を襲っているらしかった。俺は溜息をつく、もう一度寝さそうと肩を掴む。

「ろくに歩けないじゃねえか。もう少しやす、」

「僕に触るなっ……………！！！」

いきなり苛立たしげに怒鳴ると、少年は俺の手を振り払った。なんだこいつ、一体何をそんなにツンケンしてんだよと俺は不思議に思う。気にしてやっているのに手を払いやがって、という腹立たしい気持ちは一切無い。ただ、不思議で仕方ないのだ。何が少年がこんなにもびりびりさせているのか。

「……………触るなって言っても、満足に歩けてないだろ。大人しく従え」

「うる……………さいっ、僕に指示するなっ……………！！！」

俺はまた深い溜息をつく、少年の首根っこを断りもなく掴んでや

った。

「なにす、」

「言う事聞かないからだ。怪我人は大人しく言う事を聞け」

「止める、放せっ！」

喚く少年の声を無視して、俺は少年をずるずると引き摺って布団に寝かせた。すぐに起き上がろうとする少年の片方の手首を掴み、

「・・・・・・良いからもう少し休め、頼むから」

言い聞かせるように、言った。自分でも不気味と思えるほどに優しい声に内心で驚いていた。俺は、まだ人に優しく出来るのか。

「・・・・・・」

俺の様子が変化したことに気付いたのか、少年の顔から鬼気が消えた。眼帯は押さえたままに、体から力を抜く。何にも覆われていない左目が、不思議そうに俺を見上げる。

「あんた、変な人だな、」

痛みは退いたのか、少年は呻かなくなった。

「あんたじゃない。・・・・・・俺は斗賀野笙汰つつんだ」

別に少年の名前を知りたくて、名乗ったわけではなかった。だが少年はそれが礼儀であるかのように自分の名を名乗った。

「・・・・・・僕、は、来栖朔、」

瞼が徐々に下がってくる。

「なあ、」

「・・・・・・」

「いや、あとで良い。今は体を休めてろ」

少年―来栖朔は戸惑ったような顔で俺を見上げていたが、迫り来る眠気には勝てなかったのだろう、すぐに寝息を立て始めた。眼帯を押さえる手からも力が抜け、くたたと落ちる。

「これは・・・・・・」

朔の眼帯は真っ赤に染まり、思い切り絞ればたと赤い液体が垂れて来そうに思えた。ドラッグストアに行つて新しい眼帯を買いに行つたほうがいいのかも知れない。勝手に交換したら怒るだろう

か。まあとりあえず買っただけ買っておこう。

「そう言えば、食料」

スーパーの買い物袋を持った状態で朔に襲われたため、中身がどうなっているか不安になった。

「のわっ！！ぐっちゃんになっってんじゃん！」

「え、っと包帯包帯、っと」

馴染みのドラッグストアで眼帯をどれにしようか選んでいると、後ろから闊達な声を掛けられた。

「おっす、笙汰。今日は休みか？」

「・・・なんだ宝生か」

悪友であり目下フリーター人生謳歌中の宝生雅^{ほうしやみやび}だった。名前こそ雅だが、その雅さは欠片も無い。下品で適当で下らないことが大好き。中学からの腐れ縁でもあった。

「何だとはご挨拶だな・・・お前、眼でも怪我してんの？」

「・・・ちよつとな」

まさかよりによって宝生に少年を拾ったなどとは口が裂けても言えない。そんなことをしようものなら、今日の夜にはご町内全体に広まっているに違いない。

俺の返答に、ワックスでつんつんに立てた茶髪を弄りながら唇を尖らせる。気持ち悪いから口を尖らすな、と思う。

「冷たい返事だなあ。なあなあ、何か面白いことねえ？」

「知らん。家で寝てる」

「さっき起きたばかりだからまだ良いや」

「・・・」

宝生と喋りながらも俺は眼帯を選んでいて、ようやく決めた。同じタイプの眼帯が3個セットのものにする。眼帯のほかに買うものあ

るか？一応消毒液も買っておくか。俺が場所を移動しようとする、話足りないのか宝生が付いてきた。

「何だ、まだ何か用か？」

「いや、暇だから話相手が欲しいだけ」

「じゃあ何を当たれ。俺じゃあお前を満足させられる話題がない」

「満足とか気にしないよ。ぐだぐだ喋るだけで十分だから」

「じゃあはつきり言う。鬱陶しいから消えろ」

だが宝生は逆に嬉しげにニカツと笑うと、

「じゃあ消えてやら無い」

と俺にとっては訳の分からない理屈を捏ねやがった。こうなったらとことん無視するか。俺はそう決めたが、宝生が次に放った言葉にひかれた。

「そついや最近町内で不審者が出没してるらしいな」

宝生にとつては大した興味が無いらしく、どうでもよさげな口調だった。しかし俺にとつてはそうはいかない。不審者が恐いとか襲われたらどうしようとか思ったわけでもない。ただ、もしその不審者が朔のことだとしたら……。

「何か黒いシルクハットみたいなのをかぶって、目と鼻が完全に隠れてる黒服の男が何度か目撃されてるらしいぜ」

それを聞いて不審者が朔ではないかという考えは一気にぶっ飛んだ。それなら朔ではない。何故なら朔は素肌の上にボロボロの毛布をかぶっただけの状態だったのだ。

いや、ただ黒服を剥ぎ取られただけ、という可能性もあるのか。

「ん。笙汰、お前何か思い当たる節あるの？」

馬鹿なくせに勘だけは鋭い、と俺は内心で舌打ちをする。

「別に。お前、そろそろ職探さないのか？俺が働いてる本屋人手不足なんだけど」

「本？止める止める、俺が活字を見て倒れない日があったか？」

倒れない云々は無視して、

「別に本屋だからって活字を読んでもわけじゃないぞ。ちゃんと力

仕事だつてあるし、忙しい日には字すら恋しくなるほどあっちこっちに行かないといけねえし」

「とーにーかーく、俺はまだ働く気、ないから」

消毒液はこつちで良いな。そう言えばさつきスーパーに行ったときは粥を買わなかったな。とりあえず粥も買つて、朔が喰えそうなら喰つてもらおう。俺はレトルトコーナーに足を運ぶ。やっぱり宝生は性懲りも無くついてくる。

「いい加減ウザいんだが」

「お前、不審者つてのに検討ついてるんじゃないやねえの？」

口調は適当だが、チラ見した宝生の目は意外と真剣だった。やはり刑事の息子は違うのか。

「……ついてないな、残念ながら」

こいつ、何だかんだいって刑事に向いてるんじゃないかと思うがそれを言ったら宝生が怒るのは分かっているので、言わない。怒った宝生が恐いわけではなく、こんな店中で騒がれたら堪ったものではない。

「ふうん」

「よし、買うもの決めたし俺は帰る」

だからもうついてくるな、と言外に匂わしたつもりだったのだがあろうことは奴は、

「今からお前のマンションに行つても良いか？」

などと言い出した。何でそうなるんだ？俺は不快感を隠そうとせずに宝生を見返した。

「何で？」

「暇だから」

「……暇なら職でも探せ。それか家でゲームでもしてる」

「厭きた。ゲームは。職探しは絶対に嫌だ」

子どもみたいなことを言いやがって。

「お前がゲームに厭きようが職探しを厭おうが、俺には関係ない。俺は連勤明けで疲れてて、家で一人のんびりしてたいんだ。だから

お前が部屋に来るのは断固拒否する」

宝生が何かを言おうとするが、俺は一息ついて直に言葉を発する。

「……………何を言ってもダメだ。じゃあな」

俺は鋭い視線で宝生を睨みつけた。女顔と揶揄されることの多い俺だが、その実視線が鋭くてチンピラすらビビるといふのは有名な話で、このときの宝生もグツと詰まったような顔で口を閉ざした。

「……………」

俺は宝生を置いて、レジに向かった。なじみのパートさんと少しだけ話をして、宝生を振り返ることなくさっさとドラッグストアを後にした。宝生は追っては来なかった。

3、何でだよ！？

マンションの前まで帰り着くと、俺は後ろを振り返った。宝生が後を付いてきているのではないかと考えてのことだったが、それらしき影はない。俺は暗証番号を入力して自動ドアのロックを解除すると、するりとマンションのエントランスに滑り込んだ。エレベーターは最上階の七階で停止していたので、一階に呼び戻す。降りてきた箱で最上階に運んでもらい、自室のドアを開錠する。

「・・・・・・ああ、腹減った・・・・」

最近腹減ったというのが口癖になっているような気がしたが、俺の気のせいだろうか。

朔はまだ眠っているようだったので、買い物袋が音を立てないように留意しながら、そつと買ってきたものを机の上に並べていく。ますますな眼帯を手に取り、交換してやるうかと思うが、それで眠りを妨げるようなことになったら嫌だし、勝手に変えたと怒られても堪らない。そこまであの眼帯に愛着があるとは思えないが、何故か朔には眼帯に対して多大なる思い入れがあるような気がして仕方ないのである。

・・・・まあ眼帯のことは置いて、俺は飯を食うぞ。

俺はそう決意して、さっきスーパーで買った焼肉弁当を出した。弁当は温かくないと喰わん！！という奴がいるが、俺は市販の弁当も自家製の弁当も冷たくて平気だ。というか冷たいほうが好きだったりする。中身が肉やフライだろうと、それは変わらない。麦茶をコップに入れ、一人合掌をする。

俺は眠る朔をぼんやり見るともなしに見ながら、一人黙々と箸を動かした。

「どういうことよ、それ」

昼間から赤ワインを嗜みながら、派手な化粧をした二十代後半くらいの女が思い切り顔を顰めた。ワインを不味いと感じているのか、話の内容に懸念を示しているのか。

「だから言ったとおりだ。今朝“捨て”た場所に行ってみたら、“あれ”の姿はなかった。私たちの予定では物言わぬ体が転がっている筈だったのだから」

悠長にそう言う男に対して、女は今にも男に噛み付きそうな勢いで捲し立てる。

「あんた何でそんな悠長にしていられるわけ!? “あれ”を野晒し（のざらし）にしといたらこっちにとばかりが来るんだよ!？」

「愉快じゃないか」

「あ?」

「……私たちに良いように使われ、虐げられてきた“人形”がどんな形であれ生き延びている。決して未来など来ないのに、苦痛が先延ばしにされるだけなのに、天は“人形”を見放していない。そこに何か意味があるとは思わんかね」

男は満足げにそう言い切ると、美味そうに葉巻を吸った。女は理解できない、といった風に肩を竦める。

「前から思ってたけど、あんたって“あれ”にだけは執着があるよね。“人形”は他にもまだ一杯居るって言うのに。何かあんの?」
女のその問いに、男は唇だけで微笑むだけだった。

イタイ、イタイ。

一杯、なぐられた。一杯、切られた。

血が一杯、出た。イタイ、イタイ、イタイ！

みんな、死んで行つた。

目を抉られて、切られて、殴られて。

……どうしてこんなイタイ目をしてまで、生きないといけ
ないの？

……どうしてあの人たちは僕らをこんなに虐げるの？
嫌いなら、要らないなら、あっさり殺してくれば良いのに。

どうせ、

僕らは、

ココロのないロボットだから。

なのに、どうしてこんなに、胸が痛いんだろう。

「……朔？」

朔が目を閉じたまま涙を流しているので、一体どうしたのだろうと怪訝に思う。

俺は思わず涙の伝う頬を撫で、

「何触ってんの」

朔がいきなり目を開けて俺をぎょろりと睨んだ。ビビる俺ではないが、

「悪い」

と素直に謝っていた。朔は俺を睨んだまま、上体を起こした。目の痛みは退いたらしく、蒼白な顔ではあるが苦痛を訴えはしなかった。

「目は痛むか」

「………治った」

ぼそりと呟くように答え、朔は鼻をひくつかせた。

「……いい匂いだろ。料理の出来ない俺が唯一作ることのできる“特製南瓜スープ”が出来てるぞ」

南瓜、と朔が一瞬腰を浮かしかけるが、俺にはそれが分かったと気付いたのかふいつとソツポを向いてしまった。とことん可愛くないガキだな、と俺は思った。

「南瓜好きなのか」

「べ、別に」

俺はくつくつくと咽の奥で笑うと、一回立ち上がった。朔の視線を感じる。俺はその視線を尻目にスープを深皿に入れ、スプーンを突っ込んで取って返す。物欲しげな朔の瞳が俺を捉えた瞬間、また顔を逸らした。

「ほれ、お前のために作ったんだ。腹減ってるなら、粥もあ」

「何でだよ」

俺の言葉を遮って、朔がポツリと呟いた。

「あ？」

「僕がどういう状態で倒れてたか、あんた知ってるんだろ」

「まあ・・・な。俺が運んだ訳だし」

「じゃあなんでだよ、僕のこと不気味だとか近付かないほうが良いとか思わなかったの？」

朔は顔を逸らしたままだが、その横顔は哀しげに歪んでいる。

「不気味、ね」

俺の言い方が気に入らなかったのか、朔は俺をギッと睨みつけ怒鳴った。

「だってそうだろ！体のあちこちに切り傷があって、全裸でその上に毛布を巻いただけの状態で、雨の中ぶっ倒れてたんだぞ！おかしいと思うだろ、変だと思うだろ！？なのになんでこんな・・・！」

「普通なら絶対こんな奴助けない！介抱なんてしない、なのに！」
俺は朔の口を片手の平で覆った。驚いた朔が手を払う。

「言っただろ、僕に触るなって・・・！！！」

「分かったよ、触らない。触らないから、黙れ」

「・・・っ！」

「良いか、俺は一瞬たりとも朔を不気味だと思ってはいない。悪いな、俺はいつも普通じゃないらしいんだ」

朔の目が困惑を浮かべる。俺は続ける。

「・・・俺さ、昔から言われてることがあってさ」

「何、だよ」

「どうも俺は“異常”に対する警戒心と“死”に対する恐怖心が欠落してるんだとさ」

朔が目を見張る。

「・・・何だよ、それ」

「俺もよく分かんが、まあお前の言う“普通”の範疇には入らなくてことだな」

俺はズイツと皿を朔に差し出す。

「とにかく、今は体力をつける。だから、嫌でも喰っとけ」

朔ははぐらかされたような気持ちになるが、食べないと話が進まないような気がして、渋々といった感じに皿を受け取った。本当は食べたくて仕方ないのだが。

「……いただきます」

「へえ、ちゃんとしたいただきますって言えるんだ」

朔は頬を赤らめると、また俺を睨んだ。

「……当たり前だろ、三歳のガキじゃねえんだから」

そうだな、と俺は笑うと見ていたら食べ難かろうと思って朔の側を離れた。

結局朔は南瓜スープを二杯飲み、粥も平らげた。

「何だ、やつぱり腹減ってたんじゃないか」

他意はなくなった事実を言っただけなのだが、朔はハッと夢から覚めたような顔をして

「悪かったな！」

と怒鳴った。こいつ、何でも穿ちすぎだよ。

「悪かねえよ。ちゃんと喰えるってのは健康な印だしさ。南瓜スープ、美味かったろ」

朔は膨れっ面のままで頷いた。変なところは素直だよな、と思う。

まあ、良いか。

「そうだ朔」

「？」

俺が翳したものを見て、朔の顔がそれとわかる程に強張った。

「……」

「その眼帯、機能しねえだろ。血も泥も雨も吸いすぎて、逆に目に悪くないか？」

朔は震える手でそつと眼帯に触れた。

「良いよ。．．．ばい菌とか雑菌が入ろうが、関係ない」

「目玉がないからか？」

朔は何で知ってる、といった風に俺を見た。そして信じられないという気持ちが籠もった口調で、

「．．．．．あんだ、見たのか」

と訊いて来た。事実だったので俺は頷いた。

「見た。目玉が無くて、眼窩が丸見えだった」

「き、気持ち悪くなかったのか!？」

朔が啞然とする。何をそんなに驚くことがあるのか、と思いつつ俺はまた頷く。

「別に、平気だった」

朔がまじかよ、と小さく呻くのが印象的だった。

4、垣間見える過去（前書き）

サブタイトルが思いつかない・・・。
あまり関係ないタイトルにな
ってるかも・・・。

4、垣間見える過去

結局新しい眼帯に変えてやった。朔は俺に触れられるのを酷く嫌がるので、俺は包装を解いて朔に渡しただけではあるが。

「・・・あんたって絶対おかしいよな、」

再びまどろみながら、朔がしみじみといった口調で俺に話し掛ける。俺が食器類の洗い物を済ませ、さて売上表でも見るか、と思いながら通勤鞆を漁っているときだった。

「だから言っただろ？俺は“異常”に対する警戒心と“死”に対する恐怖感が欠落してるって。それが普通に考えたら変なんだろ」

「・・・変って言われてそんなにあっさり肯定するのも変だな」

「変変うるさいな、人を変人みたいに」

「・・・・・・・・・・」

「何だ、寝たのか」

朔は唐突に寝てしまった。随分疲れているらしい。俺は苦笑しながら、乱れたままの掛け布団を直して、出ている腕の中に仕舞ってやった。酷く穏やかな顔で、朔は眠りについていた。

「なんだと？」

ぎよろり、と大きな目玉がひん剥かれる。出目金がシルクハットの男を睨み付けている。

「申したとおりです。“あれ”の死体を回収することは出来ませんでした」

「そんなのは一回聞けば分かる！！何故貴様はそつのんびりしているんだ、と言っているんだ！」

「それは決まっています。私は“あれ”を追う気がないからです」
平然と答えるシルクハットに、出目金はみるみる顔を真っ赤にしていく。ダンッ！と机を叩き付ける。

「貴様、やる気があるのか！“あれ”を放置するなど言語道断だろうが！！」

「やる気？私にそんなものを期待するなど言っていたのは所長、あなたではありませんか」

「ああ言えばこう言う・・・！だから貴様の部下は揃いも揃って腑抜けばかりなんだ！」

「あれらは本人の問題ですよ、いちいち私を引き合いに出さないで下さい」

シルクハットは明らかに出目金を挑発する口調でのたまった。

「ええい、もう良いわ！！さつさと俺の前から消えろ！！」

「言われずとも」

シルクハットはさらに目深に帽子をかぶると、形だけの辞儀をして出目金の部屋から退出して行く。出目金は側にあつた雑誌をドアに向かって思いっきり投げ付けた。

朔が寝入ってから一時間後。俺は売上表から顔を上げ、思いつきり背伸びをした。最近妙に肩が凝って困っているのだ。外で体を動かして来ようかと思うも、朔を一人置いていくのも気が引けた。
俺はごろん、とカーペットの上に横になった。目を閉じて頭を空っぽにする。

「ん、」

その矢先に朔が小さく声を漏らして身動きをする。もう起きるのだ

ろつか。そう思い、俺は目を閉じたまま意識だけを朔に向けた。こそつと動く音と、衣擦れの音が耳に飛び込んで来る。

「…………お腹すいた、」

俺に聞こえないようにするためか、朔が小声でそんなことを呟く。ばつちり聞こえてるぞ、朔。

「何が喰いたい？」

「お、起きてたのかよ！」

朔が慌てる。腹が減るのは自然の摂理なのだから、そんなに恥ずかしがることはないのに。

俺は起きてた、と答え立ち上がった。上体を起こした朔は、気恥ずかしげに俯いている。

「そんな俯く必要ないだろ。何か喰いたいものあるか？」

「い、良いよ。…………ただでさえこんな、迷惑掛けてるのに、」

「迷惑も何も、俺が勝手に朔を家に連れ込んでるんだから気にすることねえよ。迷惑なんて思ってたないし、たとえそう思ってたとしても迷惑なもんを傍に置いておくほど、俺は優しくないんでね」

俺はそう言っ、台所に立つ。

「腹減ったってことは、胃もたれとかはないな？こつてり系が苦手とかあるか？」

「特にない…………けど、あんた料理できないんじゃないのかよ」

「ああ、あれは虚言だ。おかげで南瓜スープに有り難味が出てたろ？」

朔が哑然としているのが背中を向けていても分かる。

「……………策士だ」

だから聞こえてるっての。

自分で言うのもなんだが、自棄に豪華な昼飯になってしまった。

「これ全部あんたが？」

「お前、俺が料理する間ずっと起きてただろ。誰か部屋に入ってきたか？ 霊が俺を手伝ってたか？」

「・・・・・・疑って悪かった」

「分かれば良い」

朔は完全に布団から出て、やっぱりサイズの合わないパジャマを着て、俺が飯の時に使う卓袱台の前に正座をして座っている。ちなみにパジャマは長袖で、どうやら寒気が酷いらしく半袖はとも着れそうになかったからだ。長袖を着ていても顔色は少々悪い。

「嫌いなもんあつたら無理に喰わなくて良いから」

俺は朔に前もってそう言い、箸を手取る。

「い、いただきます」

卓袱台には、白飯、残り物の野菜と肉で作った八宝菜、ソーセージ入りのハムエッグ、味噌汁、キャベツと人参のドレッシングサラダがごちゃごちゃに並ぶ。

普段の昼飯はカップ麺か冷凍で済ませるのに。手痛い出費だが、朔が目をきらきらさせて喜んでいるので悪い気はしなかった。

朔は手始めにハムエッグに箸を伸ばした。毒なんて入っていないのに、何故か恐る恐るそれを口に運び、これが最後の食事とでも言うように確り噛みしめる。

「どうだ？ ちよつと砂糖を入れすぎかと思ったんだが」

「う、・・まいよ」

言いたいことは分かったが、もっとはっきり言わせたかったので、

「あ？」

と聞き返してみた。すると朔は顔を真っ赤にして俺を睨みつけ、

「だ、だから美味いって言ってるじゃないか、この策士！！」

と怒鳴った。そして恥ずかしさから逃れるように白飯にがつく。どうやら俺のあだ名は策士になってしまったようだ。

「斗賀野先輩の家に？」

鳴海和晃は、思ってもいなかった提案に驚いていた。昼間でのレジ打ちのアルバイトが済んで大学に行こうとしていた彼は、先輩である斗賀野笙汰の友人である宝生雅に声をかけられたのだ。

「そう」

「で、でも僕これから大学に行つて教授と会う予定が、」

それに宝生とは顔見知り程度で連れ立つてどこかに行くほど仲が良
い訳ではない。その彼がわざわざ和晃を待っていた理由が、

「一緒に笙汰の家に行かねえ？」

と誘つたためだったのだから驚くのも無理はない。

「それ、急ぎなの？」

「急ぎ、つてほどじゃないですけど、教授もお忙しい方なので、」

笙汰の家に行くのは嫌ではないが、何分予定がある今日は無理だ。

「……鳴海も知ってるだろ？最近この辺に不審者が出没し
てるって話」

「え、あ、はい。あの、シルクハットをかぶつた変な男の人のこと
ですよな？」

「そう。その不審者の話をしたとき、笙汰の様子がいつもと違つて
たんだよね」

「先輩の様子？」

和晃は今朝買い物に来た笙汰のことを思い出す。特に変な様子はな
く、いつもの先輩だったように思うのだが。和晃が怪訝に思ってい
ると、

「あいつは、不審者のことで何か知ってるはずだ」

と不穏なことを言い出したのでびっくりして宝生を凝視した。

「そ、そんな、先輩がそんな、」

「だからそれを確かめるためにあいつの家に行こうって言ってるの」

「え、えつと……」

はつきり言うのが苦手な和晃は、どうしようと困ってしまう。宝生は既に行く気満々だ。一人で行けばいいのに、と思う。

「どうせ俺一人で行ったら追い返されるのが関の山だしな。鳴海がいるだけであいつの態度は軟化するから」

「ぼ、僕？」

「そう」

和晃はまだ迷っていた。確かに前から、宝生や他の人間に対する態度に比べて自分に対する笙汰の態度は柔らかいとは思っていた。その理由は知らないが、

（……でも先輩が友達に変な疑いを持たれてるのは、嫌だ）
不意にそんな思いが浮かび上がってきて、気づけば和晃は頷いていた。

「げほ、げほ、げほ……」

「馬鹿、がつつくからだ」

俺は朔に温かい茶の入った湯のみを渡す。朔は詰まりながらも、
「ありがとう」

と言いながら湯飲みを受け取った。

「そんなに美味しいか？」

朔は嫌そうに顔を顰めたが、こくりと頷く。まああとは飾りのミニトマトしか残っていないのを見れば、誰だって不味かったのだろうとは思うまい。

「気に入ってもらえたみたいで何よりだ」

朔はそこまで言っていない、と顔を赤らめてトマトを口に入れる。素直に美味しい、完璧だ、くらい言えば良いのに。

「……独学？」

「料理か？……小さい頃から手伝わされてたからな。独学っ
ちやあ独学か」

「ふうん」

「朔もすれば美味しく出来そうだが。ためしに何か作ってみるか？」

「ぼ、僕は無理だよ……前にいたとこだって、」

言葉の途中で、朔の口が不自然な閉じ方をする。顔を蒼くし、俯く。
傍目から見ても体が小刻みに震えているのが分かる。何だろう、そ
んなに動揺するようなことを言ったか？

「朔？」

触られるのを酷く嫌がるから、朔には触らずに目の前で手をヒラヒ
ラさせてみる。

「あ、」

朔は白昼夢から醒めたかのように目をぱちくりとさせ、俺を見た。

無防備な、歳に見合った表情。

「大丈夫か？真っ青だけど、」

「な、んでもない」

そう言つて、俺から目を逸らす。力強く握り込まれた拳を見れば、
何でもなくない（言いくいなく……）のは一目瞭然だが、根掘りはほ
り訊いたところで朔は口を割らないだろう。俺にしても、そこまで
無理強いして訊きたいとは思わないし。

「なら良い。喰ったなら食器片すぞ。良いか？」

朔は声もなく頷くだけだ。まあ良いなら片すだけだ。俺はお盆に空
いた食器を載せていく。朔が手伝おうかどうか迷っているようだっ
たが、敢えて俺から声を掛けようとはしなかった。俺がお盆を台所
に運んだとき、ドアチャイムが鳴った。誰だろう、まさか宝生では
あるまいな。

「……………」

戸惑い顔の朔にはそのままでもいい、と言い、俺は玄関に立った。

「どちらさん？」

一瞬の間があつて、

「あ、あの、鳴海です」

おずおずとした声が応えた。俺は鳴海？と怪訝に思ったものの、ドアを開けた。それが間違いであることに気付かずに。

5、第二の邂逅

「鳴海、どうし、」

俺は言葉の途中でドアを閉めようとした。だがガツと鳴海のものではない手が隙間に入ってきてそれを阻みやがった。

「何で閉めるんだよ」

何処か怒ったような口調。だが俺は怒られるようなことはしていない。此処は賃貸とはいえ俺の部屋なのだから、いつドアを閉めようと俺の勝手のはずだ。他人に口出しされるようなことじゃない。

「俺の勝手だろ」

だからつい本音が出た。

「鳴海も何の用だ」

「あ、あの、僕は、」

俺の口調が何時もよりきつかったせいか、鳴海の声がぶれる。恐がらせちゃったか？そう懸念したせいか、閉めようとするドアから力を抜いてしまい、

「よう」

宝生の胸糞の悪い笑顔と対面する羽目になった。

「……………」

鳴海が硬直しているのが分かる。宝生は興味深そうにじろじろと朔を見ている。

「で、こいつ誰？」

「言ったる。俺の知り合い」

「どんな」

「……………それを一々お前に説明する理由、ねえだろ？」

俺と宝生の間に横たわる険悪な空気に、鳴海がどうにかしないと、
思っているのが傍目からでも分かる。

朔は、たとえば居心地悪そうに俯いて指を弄っている。

「俺不審者の話したけど、何かこいつが関係してんじゃねえの？」

朔がビクツと肩を震わせ、俺は内心で馬鹿か、と思う。宝生に余計な誤解を与える一方だろうが。

朔の動揺に気付いた宝生が、ズイツとその顔を近づけて覗き込むようにする。朔は宝生の視線から逃れようとするかのように、顔を少しだけ逸らす。

「この眼帯だつてさあ、」

こいつ酔っ払ってるのか？

宝生が朔の眼帯に手を伸ばそうとする。俺はそれを止めようとするが、先に制止の声をあげたのは意外なことに鳴海だった。

宝生の手を掴み、

「お、怯えてるから止めてあげてくださいっ、」

と訴える。

「……………鳴海、」

「先輩が知り合いだつて言ってるんだから、信じましようよ。先輩
だったら、僕たちに嘘をついたりしないと思います」

相変わらず鳴海は純真だな、と思う。どうしてそんなに簡単に人を
信じられるのだろうか。

現に俺は今嘘をついているのに。

「どうだか」

宝生は鼻で笑ったが、鳴海から制止されたのが意外だったのか、朔
の眼帯に触れることは止めたようだ。こいつ、何をしに来たんだ？

「名前は？」

「来栖朔」

俺が簡潔に答える。

「ふうん」

「宝生、お前何しに来た訳？鳴海まで巻き込んで」

「さつき会ったときに不審者の話したらお前の様子がいつもと違ったから、気になっただけ」

「その不審者とやらを俺が部屋に匿つてるとでも思つたのか？」

「ああ」

鳴海とは性質の違う素直さに、俺は鼻を鳴らす。

「残念だったな。家捜ししてもらつても良いが、この部屋にシルクハットはないぞ」

精一杯の皮肉だった。捨てたんだろ、と言われたらそれまでだが。

だがそれに最も反応したのは朔だった。宝生に見つめられ体を硬直させていた朔が顔を跳ね上げて俺を見たのだ。

「朔、どうした？」

朔の唇は真つ青で、俺は怪訝に思う。寒いのだろうか。

「シルクハット？」

朔の声は酷く掠れていて。

「ああ、不審者が最近近辺で目撃されててな。何でもシルクハットをかぶったスーツの男が夜な夜な徘徊してるんだとよ」

「そう、なんだ」

宝生の細い目がいやらしい光を放つ。

「何、お前の知り合い？」

朔が力なく首を振るが、信憑性は余り無かった。

「知ってる、つて感じだな」

「し、知らない。そんな人、僕は知らない、」

「あ、あの、大丈夫？」

朔の様子がおかしいことに気付いたのか、鳴海がおずおずと声を掛ける。

「鳴海、朔には触るなよ。そいつ、他人に触られるの凄く嫌がるから」

「あ、す、すみません……」

伸ばしかけていた手を、鳴海はパツと引っ込める。だが朔が何かに

気付いたかのように顔を上げて鳴海を見たから、鳴海も俺も一体どうしたのだろうかと思っただ。

「手、」

「え？」

「……あなたの手、見せて」

意外な言葉に鳴海が戸惑って俺を見るので、俺は頷いてやる。

「……」

鳴海が出した手を、朔が握る。その瞬間、ほんの刹那朔の目が金色に光ったように見えた。

「あの、」

「……不思議な、手ですね」

「え？」

「……あなたの手は、不思議だ。“手”のことで、思い当たる節、ないですか？」

「！？」

鳴海がビクツと手を引っ込め、俺を見た。どうして、この人が知ってるの？先輩、話したんですか？とその目が語っているが、俺は潔癖だ。親しい先輩の“秘密”をわざわざ暴露する理由も必要性もない。鳴海の“秘密”を知らない宝生が不思議そうな顔で俺たちを見ている。

「どうして、」

「あなたの手は、とても暖かい氣と生命に溢れているのが分かります。……不思議ですね」

朔は透明に微笑み、また俯いた。話し疲れたのか、微かに息が荒い。

「朔？大丈夫か？」

「……うん」

鳴海は手を握り締めて朔を見つめている。もしかしたら朔に何かを感じ取っているのかも知れない。

「悪いけど、今日は帰ってくれ。こいつ、疲れてるみたいだから」

宝生はまだ朔に疑いの眼差しを向けていたが、朔の体調があまりよ

くないのは分かるのだろう、渋々とはあるが腰を上げる。

「隠し事は止せよ、笙汰」

「分かったから」

「本当に分かつてるのかよ。……鳴海、行こう。付き合せて悪かったな」

「あ、いえ」

鳴海も立ち上がり、俺に不安そうな視線を寄越す。後で電話するか、とジェスチャーをすれば少し微笑んで頷く。

「それじゃ、朔君、お大事に」

「……………」

頷く朔にも微笑み、鳴海は宝生に続いて部屋を出て行った。

「よく分かったな、鳴海のこと」

「……………」

朔は本格的に具合が悪くなってきたのか、苦しげに胸を押さえている。

「おい、横になつてろ。顔が真っ青だぞ」

朔はもぞもぞと布団の中に入りながら、

「あの、」

「あ？」

「今の、鳴海？って人は気をつけたほうが良いって、伝えて」

「何だと？」

「異能者は、異能者をひきつける、から」

「いのうしゃ？何だよ、それ、」

だが朔は途中で力尽きたのか、俺の知りたいことを説明せずに意識を落としてしまった。

「……………一体なんなんだ。」

俺は携帯を手を取ったが、鳴海はまだ宝生と一緒にいるだろうから、もう少し後で連絡を取ろうと決めた。

5、第二の邂逅（後書き）

大学時代の後輩、鳴海には何か秘密があるようです。友人である宝生は蚊帳の外ですね（笑）

6、忍び寄る悪意

俺が鳴海に電話を掛けるとき、朔はまだ眠ったままだ。呼吸は充分落ち着いてきたようだが、顔色は真っ青なままだ。真逆俺が作った料理に中つたなんて訳じゃないだろうな。

「もしもし、鳴海か？」

『……先輩？』

電話の向こう、ざわついている。どうやら鳴海は街中を歩いているようだ。

『先輩、あの、さっきの朔君の話、』

鳴海はそれが気になって仕方ないらしい。切羽詰った口調は、普段彼がしないものだから。

「落ち着け。朔に詳しく訊こうと思ったんだが、どうも具合が悪いらしく寝ちまつてな。目が覚めたらまた詳しく訊いてみるつもりだけど」

『そう、ですか』

「宝生は？」

『別のダチの家に行くって言ってましたけど』

「全くあいつはいつまでもだらだら。……鳴海は就職、決まりそうか？」

鳴海は恐らく営業や販売には向かないだろう。となると専門職か、事務職か。

『一社、二次面接にこぎつけてるんで、うまくいけばそこに決まると思います』

「そうか、頑張れ」

『あ、あの先輩』

「あ？」

鳴海は心から不安そうな口調になる。今日はコロコロ口調が変わるな、と思う。

『僕の“手”のこと、先輩が言った訳じゃないん……ですよね？
やっぱりそれが気になってたのか。俺は髪をぐしゃぐしゃとかき回し、

「俺じゃない。俺だって顔には出ないけど、いきなり指摘されて驚いてるんだから」

『そう、ですよね』

「………鳴海？」

どうしたのだろう。俺は人の気持ちを察したりするのは得意なほうだとは思うが、予知能力なんてものはない。だが、一瞬鳴海が誰かに襲われるシーンが脳裡に浮かんで俺は奇妙に思った。白昼夢か？
『先輩？どうかしたんですか？急に黙って、』

「あ、いや。……お前、今一人？」

『はい。これから大学に行つて、教授に会います。意外と早く宝生さんに解放してもらえたので、』

俺はその言葉に苦笑する。

「兎に角さっきの件は朔に訊いてまた知らせるから。あんまり気にすんな」

『はい。よろしく願います』

生真面目に依頼する鳴海にじゃあな、と言いついて俺は通話を終えた。その瞬間、

「………嫌だ、止めろっ！……！」

「?!」

何だ？と思つて振り返れば、眠ったままの朔が胸元をギュツと押さえている。尋常ではない汗を掻いて呻く。

「おい、朔!？」

「ねが、……お願いだから止めろ………」

ついにはうつ伏せになって、魘され始める。

「朔、朔!!」

「!!!!!!」

朔はいきなり目を見開くと、ガバツと上体を起こした。ぜえはあ、ぜえはあと荒い息を繰り返し、心臓のあたりを掴んで肩を震わせる。ぽたつ、と額から滴った汗が掛け布団に落ちた。

「・・・朔?」

一体なんなんだ。何の夢を見たんだ。

「・・・・・・・・・・っ、」

咳き込む。血を吐き出すんじゃないかというくらい激しくつらそうな咳だ。そして本当に血を吐いた。しかも結構沢山。

「うえっ、・・・・・・・・がほっ・・・・・・・・!!」

口元を押さえ、苦しげに涙を零す。俺は風呂場から風呂桶を持ち出し、適当に新聞紙をひき、朔に差し出した。朔が涙に濡れた目で俺を困ったように見るが、俺が気にするな、というと小さく頷いて口元から手を離れた。途端に、口から吐き出された血が桶にぽとぽと、と嫌な音を立てて落ちる。

俺はまだ咳きの止まらない朔の背中を擦りながら、こいつは病気なのだろうか、とぼんやりと思っていた。

やっぱり先輩に言えば良かっただろうか、と鳴海和晃は手の中の携帯電話を見て後悔しかけていた。

場所は、大学のスクールバスが止まるバス停前。

(・・・一体誰が僕なんか見てるんだろっ、)

此处最近感じていた、奇妙な視線。不安になって周囲を見回しても、誰も自分を見ている者はいない。考えすぎなのかな、とも思ったが

やっぱり視線を感じる。それも、目を追う毎に強くなる。気を抜いたら後ろから伸びてきた手に捕まりそうで、立ち止まることが恐くなることもある。

今日も、笙汰の家を辞して宝生と別れた瞬間に視線を感じた。四方八方から見られているように感じるので、自分を見ているのは一人ではなく複数で暗がりに関連込まれて殺されるのではないかなどの憶測ばかりが心を蝕み、外出が億劫になりつつある。

だが今は大事な時期だし、バイトだってある。家に籠もっているわけにはいかない。

（でも、恐いんだ、どうしようもなく）

バス停に立っている今でも、後頭部と左手の方からヒシヒシと視線を感じる。隣に立つ外回り中のサラリーマン風の中年男性をちらりと見上げると、彼はぼんやりと道路に視線を飛ばしていた。視線の主はこの人ではないだろうと和晃は漠然と思った。

（先輩に相談してみよう、それに朔君がどうやって僕の“手”のことを知ったのか、気になるし、）
そう考えをまとめた瞬間だった。

ドンッ！！！！！！

和晃は背中を押された。

「え、き、君っ、」

隣にいた男が目を見開いて絶句して自分を見ているのを、和晃は何処か遠く感じていた。

耳に飛び込むクラクション。浮かぶ後悔。

押された体は抵抗する隙すら与えず、沿道から道路に傾く。

（だ、れ・・・？）

道路に力なく飛び込む形になった和晃を、ある人物は口元に笑みを浮かべて見ていた。

その人物の唇が、動く。

イノウシャハ、ヒトリノコラズキエテシマエバ、イイ

道路に体が投げ出されるまでに大した時間はかからなかったはずなのに、和晃はその人物の唇が象った文字を読み取ることができた。まるで、スローモーションがかかったかのように。

（せんぱ、たすけ・・・）

笙汰に心の中で助けを求めた瞬間、和晃の小柄な体は今まで感じたことのない激しい衝撃を感じた。

6、忍び寄る悪意（後書き）

鳴海、ピンチ。朔もどうやら体を病んでいるようです。

7、異能者を排除せし者

朔が漸く落ち着いたのは、二時を回っていた。口元についた血を拭いてやると、朔はありがとう、と掠れた声で礼を言ってきた。萎れているのがよく分かる。俺は血のついたタオルを台所の流しで洗う。

「・・・訊かないの？」

「あ？」

「僕が、どういう生活してたのか、その、血を吐いたことで、俺、好奇心も薄いから」

俺はそれだけ言って、その話題はもう良いと背中に滲ませる。

朔は俺の言葉の意味を汲み取ったのだろう、

「そう・・・」

と小さく呟いただけだった。

そのとき、俺の携帯電話が鳴った。

「もしもし、鳴海？」

『こんにちは、異能者を匿いしモノ』

電話の相手は鳴海ではない。だがかかってきたのは鳴海の携帯の番号だった。それは何を意味するのか、俺は一瞬理解出来なかった。

そして話し掛けてきた声。妙に機械的で温度のない口調。

「あんた、誰？」

『朔、いるだろう？』

いきなり出てきた知った名前に、俺はその名の持ち主に目を遣った。だが朔は俺を見てはおらず、膝を抱えて俯いている。俺は朔から目を離れた。

「質問してるのはこっちだ。俺の質問に答えろ」

『ひひ、冷たいねえ。大事な後輩が死んでもそんな冷静にいれるかな？』

その言葉に、俺は鳴海と電話で話したときに見た“光景”を思い出す。

「・・・お前、鳴海に何をした、」

『おやつ、声に少し怒りと焦りがこもったね。キヒヒ、そんなに鳴海和晃君が大切な？』

「・・・」

『僕は少し彼の背中を押しただけ。それで勝手に道路に出てっちゃったんだ。で、ドカン』

「お前、」

『今生死の境にいるんじゃないかな。精々死なないように願ってなよ』

「鳴海は、」

『救急車、っていうのかな。それで運ばれたよ。僕、傍にいたけど、泣きながら先輩先輩って呟いてたから、君に連絡しないといけないなあと思つてさ。・・・わざわざ連絡してあげたんだ、感謝してよね？』

「お前、鳴海を殺そうとしたのか、」

何だ、ここ最近感じていなかった“何か”が胸の奥底から湧き上がってくるのを感じる。

目の奥が熱い。肌がぞわりと粟立つ。

「・・・どうし、たの？」

俺の異変に勘付いたらしい朔が台所で硬直したままの俺に声をかけてくる。

『おや、今は朔の声かぁ。ちょっと代わってよ』

「お前、朔とはどういう関係だ」

『嫌だな、その言い方。まるで恋人の浮気相手に言うような台詞じゃない』

けたけたけたと他人を嘲笑うのが楽しくて仕方ないといったような笑い声が耳に障る。

『代わって。何、集中治療室に入ってる鳴海和晃君を殺せて僕に言ってるの？』

これは脅しても何でもない俺は感じる。それに恐怖は抱かないが、

正直会ったばかりの朔よりも付き合いの長い鳴海のほうが大事なのは当然だ。俺は朔に携帯を突き出し、出るように目で合図する。朔は戸惑いながらも受け取り、耳にそれをあて、途端に体を強張らせた。

「ど、う……してっ、」

『こんにちは、朔。よくあそこから逃げ出したね……僕を困らせてどうする気?』

「ごめ、ごめんなさ……ごめんなさいっ、」

『謝るくらいなら最初から消えないでよね。全く、折角楽しかったのに大変になっちゃったんだから。上には怒られるは現場は混乱するし……鳴海和晃君って子も死にそうになっちゃてるしい、』

「か、彼に何をしたのっ……!?!」

『ちよつと背中を押したただだよ。そしたら勝手に道路に入っでどーん!みたいな?』

朔がギュツと携帯を強く握り締める。

「な、鳴海さんは関係ないのに、どうして……そんな」

『ふむ、関係ない……か。でもあれ、パツと見だけで異能者って分かったけど?』

朔を挑発するかのように上がる語尾。

「あ、」

『異能者は処分する……これ僕の大事な、誰にも譲れない信条だからさ……あ、朔は別だよ。だってたった一人の肉親だもんねえ』
イヒヒヒヒヒヒヒヒヒ、と不気味な笑みが朔の耳に木霊する。

「にいさ、」

『ま、いいや。そのうち朔のこと迎えに行くから待っててね……あ、そうそう君を拾ってくれた人に伝えておいてくれる? 鳴海和晃君は、辻条医大付属病院に搬送されたって。じゃ、また近いうちに

会おうね?』

「ま、待つて、兄さんっ・・・!!」

だが電話は切れ、朔は哀しげに項垂れる。

(兄さん・・・どうして、そこまで、)

通話は終わったらしい。俺は朔の力の抜けた手から携帯を抜き取る。着信履歴を見れば、やはり鳴海の携帯からかかってきた事になっている。俺は携帯を机に置くと、立ったままで朔を見下ろす。

「今の、誰・・・っつか鳴海は何処に運ばれたか言ってたか?」

「っ、辻条医大付属病院っていうところに搬送された、って、」

朔が途切れ途切れに返事を寄越す。こいつ、電話の相手に向かって兄さんと言っていたな。

つまり鳴海の背中を押して殺そうとしたのは朔の兄貴ってことか?

「・・・・・・・・そう」

「あ、あの、」

「鳴海は大事な後輩だ・・・・・・・・ちよつと様子見てくる」

「ぼ、僕も」

「そんな死にそんな顔で、ふらついて表を歩く気か?」

強く言ったつもりはなく、純然たる疑問を呈しただけなのだが、朔は怯えて俺から目を逸らした。実感は湧かないが、俺はかなり怒っているのかも知れなかった。

「鍵はして行く。絶対に家から出るなよ」

朔は声もなく頷く。

「・・・・・・・・」

俺は携帯と財布だけ持って家を出た。鳴海が今どつという状態にあるのかは、考えないようにしながら。

7、異能者を排除せし者（後書き）

朔の兄らしき人物が声だけ登場。朔との関係は。そして鳴海はどうなるのか！？・・・どうでしょう？

8、死ぬな！（前書き）

文章に少しぐだぐだ感があるかもしれません。読み難かったらごめんなさい！

8、死ぬな！

ああ、もう僕は死ぬんだなあ、と鳴海和晃はどこか他人事のように感じていた。意識が朦朧としたまま過るのは長くはない人生の思い出。小さい頃に事故死してしまった両親の顔。ここまで育ててくれたおばさん夫婦の顔。学友。そして、

（……先輩、）

優しくて時には怖かった、一番敬愛する人物：斗賀野笙汰。和晃が大学一年のときに町中で不良に絡まれていたのを助けられた縁で知り合った。同じ大学、同じ学部と知ってから自分から声をかけ、同じサークルにも入った。

楽しかった。先輩はぶっきらぼうなところもあったけど、本当はとても優しい。年下には面倒見がよく、年上には怖じ気づくことなく対等に渡り合った。怖いもの知らずの先輩の横にいと、楽しかった。自分も強いような錯覚まで抱いたけど。

（でも、もう）

消え行く意識の中、自分の背を押したのであろう人物の姿形を思い出す。

真つ黒な短髪。白い顔に反比例して真つ赤な唇。知り合ったばかりの朔君にどこか似ていた。背は和晃より高かったように思う。にっこりと微笑み、真つ赤な唇が言葉を型どる。

（あの瞬間は何て言ってたか読み取れたはずなのに、今は思い出せなくなってる……）

すらりとして、細かった。でも頼りない印象はなく、地に根をはって生きているような印象を受けた。自分の信じる道だけを見据えて生きる強さを身に付けているような。

（僕とは、真逆、の……）

どうしよう、本格的に頭がぼんやりして来た。先輩に会いたい。会って、今まで親しくしてくれたお礼を言いたい。そして、僕を突飛

ばした人の姿形を伝えなければ。

和晃はそう思った。何故かは分からない。兎に角先輩に伝えなければ、と思ったのだ。伝えてどうしたいのかは、分からないけれど。

（でも、もう、）

闇に吞まれていくのを止められない。体の感覚が消えて行く。もう楽になるうか、と思う。こんな状態じゃあ、先輩に会えても話なんてできないから。

（みんな、さようなら・・・ありが、とう、）

目を閉じ、闇に身を委ね、

『鳴海！しっかりしろー！』

先輩の声が、聞こえた。

俺は、ガラス越しに映る後輩の無惨な姿に立ち尽くしていた。だが集中治療室・・・ICUの中にこもっている医師や看護師たちの様子が更に慌しくなってきた、思わず聞こえないと思いつつも叫んでいた。

「鳴海！しっかりしろー！」

細い腕には様々な機器からのコードが伸び、頭は包帯でぐるぐる巻きにされ、ちらりと覗く瞳は力なく閉じられている。恐らく体も酷い傷を負っているのだろう。想像するだけで身が焼ききれそうに思える。この惨状を作り出したのが朔の兄貴だとしたら、俺はどうするのだろう。俺の家に一人居る朔は一体何を考えているのだろう。

「和晃、和晃・・・」

「雅恵、しっかりしなさい」

俺の横では、一組の中年夫妻がいて俺と同じように集中治療室の中を覗きこんでいる。鳴海のおじ夫妻で、一応面識はある。

「でも、どうして・・・あの子がこんな目に」

おばさん・・・雅恵さんは鳴咽を堪えていた。おじさんの章介さんは目を真っ赤にしながらも妻を支えようと泣くのを堪えている。俺がそちらに目をやると、気付いた章介さんが悲しげに微笑んでくる。俺は辞儀をするしか出来ない。

「鳴海、絶対に死ぬなよ。・・・絶対に死ぬな」

俺は小さく呟き、集中治療室に目を戻した。

絶対に、死ぬなよ。

一方、一人笹汰の家に残された朔はもう一度寝ることも出来ず、上体を起こしたまま布団に入って居た。寒気は酷くなる一方で、頭まで痛くなってきた。

(・・・っ、)

あの温かい“手”の持ち主である鳴海和晃を殺そうとしたのは、紛れもない兄である。本当に和晃が死んだら、自分はどうやって償えば良いのだろう。

兄に問い質せば、

「朔が殺したわけじゃないんだから、朔が償う必要はないよ。それに、お前を勝手に介抱したのは斗賀野笹汰って奴だろ？その件でお前が負い目を感じる必要はないさ」

と軽い口調で答えるに決まっている。

そしてもし朔がこねろうものなら、鋭い平手が飛んでくるのだ。

「お前は誰に向かって口を聞いているんだ？お前は僕の下僕なんだから、僕の言うことをホイホイ聞いてればいいんだよ」

平手された痛みを思い出し、朔は腕を抱えて俯く。

（・・・お願い、鳴海さん。死なないで）

自分本位な勝手な願いを、一体誰が聞いてくれるのだろうかと朔は思いながらも、願うことを止められなかった。

「また酷いことをしたものだな、陸」

来栖陸は、上から掛けられた声に不遜な笑みで応えた。

「何が？」

「惚けるなよ。分かってるんだろ？」

「ならさあ、あっさり殺せば良かったの？中途半端に生かしてるから、怒ってるの？」

無邪気な笑顔に、瀬尾春樹はため息をつく。

「・・・俺が言いたいのはそういうことじゃない」

「じゃあどういうこと？僕馬鹿だからさあ、はつきり言われなきゃ分かんないの」

「あまり余計な殺生はするな、と言っている。異能者だからって誰彼構わず傷つけるのもダメだ」

陸がむっ、と口を尖らせて春樹をねめつける。

「春樹たちがそんな手緩いこと言ってるから馬鹿どもが蔓延るんだよ？それを僕がどれだけ嫌な想いをして見てるか」

春樹はそれは悪かったな、と気難しげな顔をして陸の漆黒の髪を撫でる。陸は気持ちよさげに目を細めて彼に身を任せる。

「・・・そういえば、朔の行方だが」

「それはちゃんと掴んでる。今何処に誰といるのかも・・・ね」
ふふっ、と微笑む陸を、春樹はなんとも言えない表情で見る。

「春樹どうしたの、変な顔して？」

「いや、何でもない」

春樹は思う。少し生死に対する価値観が他者とは違うこの少年から朔という弟の存在を奪い取ったとき、この子は一体どうするのだろう、と。

（・・・俺は、どっちにつくべきなんだろうな）

「出来ることはしました。・・・今晚がヤマになると思います。ご本人の意思の持ち方次第です」

集中治療室から出てきた三十代後半くらいの男性医師はおじ夫妻と俺とを等分に見ながらそう言った。

「ありがとう、ございます」

声も出せないくらい泣いている雅恵さんに代わって、章介さんが医師に頭を下げている。俺も頭を下げる。

「雅恵、しっかりしなさい。和晃のほうが痛くて苦しいのに、頑張ってるんだから」

「・・・はい」

「斗賀野君もありがとう。様子を見に来てくれて」

俺は無言で首を左右に振る。お礼を言われるようなことなんて何もしてない。俺が好きで来たただけだ。頭を下げられるようなことは、してない。

「・・・俺、帰ります。鳴海が目を覚ましたら、」

「ああ、連絡する。本当にありがとう」

目を真っ赤にした雅恵さんまで頭を下げてくれる。俺も下げ返し、身を翻した。本当なら鳴海が起きるまで、目覚めるまでここにいたかったが、正直俺が此処にすることで鳴海の生存確率が上がるとも

思えないからだ。

勿論家族である章介さんたちに対してそんなことは思っていない。

対象はあくまで、俺だけだ。

それに、俺にはすることがある。

俺は病院を出て、自宅に向かう。家に帰って、朔を問い質すためだ。朔の出自ではなく、鳴海を殺そうとしたのは本当に朔の兄貴なのかを訊くためだ。

「もし、そうだったら、」

もし本当にそうだったらどうするのだろう。何度も俺の中を巡る問いがまた首を擡^{もた}げる。

“異常”に対する警戒心が薄く、“死”に対する恐怖心が欠落していると言われる俺

そんな俺でも、知り合いを殺されたら怒れるのだろうか。

誰かが死ぬことがあっても、平気な顔のままでいるのだろうか。

「鳴海、絶対に死ぬなよ」

仇を討とうとか、鳴海と同じように痛い目にあわせてやる、と意気込んでいるわけではない。ただ、兎に角知りたかった。後輩を傷つけたのは本当に朔の兄貴なのか。本当にそうなら、何故なのかを。鳴海のように良い奴を殺そうとするのは、一体どういう理由からなのか、知りたかった。

だから俺は家路を急ぐ。

自宅のドアを空けた途端に広がる光景を、予想することなく。

8、死ぬな！（後書き）

さて、自宅に帰った“俺”の目に映るのはどんな光景なのでしょう
か？

9、鳴海の“手”

ドアを開けた瞬間に飛び込んできた光景に、俺は部屋を間違えたかとさえ思った。だが調度品は俺のものだし、最上階端を間違えることはあるまいと思い、ここは俺の部屋だと結論付ける。

「……朔？」

布団にいるはずの朔の姿がない。しかも室内は嵐が通過したのかと言えるくらいに荒れていた。せつかく整理した書類が床に散らばり、机は薙ぎ倒され、筆笥の引き出しが全部開けられ、数枚の服が床に散乱している。そして、所々に散らばる血液が目飛び込んで来る。朔が喀血したのか？

「朔！」

とりあえず屋内にいるかどうか確認しなければ。

「水の音……？」

そして今更ながらに、俺の耳が水の流れるような音を捉えた。台所の流しは止まっている……とくれば風呂か！？

「！朔！？」

朔は浴槽に頭を突っ込んだ状態でぴくりとも身動きしていない。蛇口から出ているのは真水で、どうやら朔は水を貯めた浴槽に頭を浸けているらしい……って悠長に状況を確認している場合ではない。

「お前、何やってるんだ！」

ぐいつと肩を掴み、頭を浴槽から引き上げる。

「おい、朔、おい、起きろっ……！」

朔の口元には血が付いたような痕跡がある。眉は苦し気にしかめられ、色を失った唇が恐怖のためか小刻みに震えている。

「朔！」

「っ、ん……」

ようやく反応があった。小さく呻いた後、ゆっくりと目を開く。

「大丈夫か！？何があったんだ」

「あ、ぼ……く、」

朔はどうやら頭がぼんやりするらしく、しばらく俺を見上げていた。
「どうした、朔」

「……一人で居たら、急にドアが開いて、」

朔はゆっくりと俺から離れ、寒気がするのか自分の肩を抱く。

「男の人が何人か入って来て、僕を殺そうとしてた……」

そのときの恐怖を思い出したのか、朔は苦しげに顔を歪めた。小刻みに震える体。

「朔を？」

朔は頷き、

「抵抗したけど、敵わなくて……ここまで引きづられて、頭をつけられて、」

そう言われて、朔が頭からずぶ濡れになっていることをようやく実感する。俺は慌ててバスタオルを出すと、朔の頭にかけてやる。

「とりあえず頭を乾かそう。パジャマも新しいの出すから、」

俺の差し出した手を取る朔の手も小さく震えていて、尋常ではない恐怖を体感していたのだと認識する。

「ちよつと待つてろ」

俺は朔を部屋に立たせたまま、別のパジャマを引っ張り出す。

「これに着替えて、」

「……どうして？」

いきなり問い掛けてきた朔は、バスタオルをかぶったままで泣いていた。俯いているため、涙は簡単に床に滴る。

「朔？」

「どうして、訊かないの。どうして、僕のこと放り出さないの？どうして、優しいの？」

恐らく朔の出自や、鳴海のこと、そして襲われる理由。それらを訊かないのは何故なのか、と言いたいのだろう。

「ふえっ……ひっく、」

迷子になってしまった幼子のように、朔は嗚咽を漏らしている。俺

はしばらく何も言えず、突っ立っているだけだった。

「・・・・・・・・何だ、放り出して欲しいのか」

冷徹に言ったつもりはなく、単純に思ったことを言っただけだ。だが朔の鳴咽が急に止み、荒かった息が詰まるのが分かった。朔は恐る恐る、といった風に顔を上げて俺を見た。

涙の伝った跡が、頬にくつきりと残っている。

「・・・・・・・・」

「お前が放り出して欲しいって言うなら放り出してやるよ」

「ち、違う・・・・・・・・そういうことじゃなくて、」

「じゃあ何」

急に面倒くさい気持ちになって、持ったままだったパジャマをバサッと床に落とした。いい加減に受け取れよ、と少し思った。

「だから、その、不気味に思わないの・・・・・・・・」

「何を」

「体の、傷のこと・・・・とか、誰に襲われたのか、とか」

「訊けば答えるのか？」

「そ、それは、」

「・・・・・・・・そういえば、お前を襲った奴は何処に行ったんだ？それらしい人影がなかったんだが」

「・・・・・・・・」

答えを持つてはいるらしいが、答えるか否か迷っている様子がありありと伺えた。

そんな状態で、よく訊かないの？と言えたものだ。

答えたくない、訊いて欲しくない。そう朔が思っていることは明白だった。俺は溜息をついて、朔の頭をバスタオル越しに掻き乱した。

「え、え、」

「良いからパジャマ替える。眼帯も変えないとな・・・・・・・・。落ち着いてから、鳴海のことと訊きたいことがあるし」

鳴海、という名前に朔がビクツと反応したのが分かったが、今は問い詰めるべき時ではないだろう。俺はそう判断して、このときは口

を嚙んでいた。

意外とどの棚にどの服が入っていたか自分でも分からないものなんだな、と俺は部屋を片しながら思っていた。

「こんなダサイシャツ、俺いつ買ったんだろう……」
書類を拾い集めては、俺の努力は一体何だったんだろうと思ったりもした。

「ごめん、血がついた……ね」

「良い。気にするな」

水を含ませたタオルで血の跡を叩いてみたが、あまり効果はない。時間が経ちすぎているのだ。それでも誤魔化せる範囲ではあるから、良しとしよう。

朔は俺が作ったホットココアの入った湯気の立つマグカップを両手に、俺の所作をずっと目で追っていた。まるで何かを見ていないと余計なことを考えてしまいそうで恐いというかのように。

「美味いか？ココア」

「う、うん……」

朔は俺から目を逸らすと、気まづげにココアを啜る。

「……鳴海、今日がヤマだって。ヤマって意味、分かるか？」

朔は小さく頷く。

「鳴海さん、無事だったんだ……？」

安堵の籠もった声。

「一応な。後は本人の気の持ち様だって、先生は言ってた」

「……」

「なあ、鳴海を殺そうとしたのは、朔の兄貴なのか？」

「……」

顔を逸らしたまま、朔は体を強張らせ、俺の言葉が真実だと示した。

「……朔を責めるわけじゃないから、素直に応えてくれ……
どうして鳴海は殺されそうになったんだ？あいつが何かしたのか？」
「そ……それは、」

「それにお前、鳴海の手のことには気付いてたろ。あれはどういう理由だ？」

鳴海には不思議な力がある。いや、正確に言えば、鳴海の“手”が、
だが。

俺は朔を問い詰めながら、ある過去の情景を思い返していた。

あれは確か鳴海が二年生、俺が四年生にあがって一カ月後くらいの新緑の季節だったと思う。サークルのことで話があって、俺は放課後に鳴海を探していた。

「お、いたいた」

鳴海がいたのは、大学長が趣味でしている菜園のそばにある花壇の縁だった。だが俺がやってきた校舎に背を向けて、花壇に手を伸ばしていた。何をしているのだろうと思って声を掛けようとした俺の声は口から発されることはなかった。

「……………」

綺麗に咲き誇るパンジーの中、一本だけ何故か枯れかけている花びらに鳴海の手が触れた瞬間、俺の目に想像を絶する光景が飛び込んで来た。

鳴海が手を触れて五秒ほどした後、枯れ掛けて俯いていたパンジーが顔を上げたのである。加え花びらが綺麗に色づき、さっきまで枯れ掛けていたことが嘘のようになった。まるでマジックを見ているような気持ちになって、俺は、

「どうやったんだ？」

「！先輩！？」

鳴海がどう思つかも考えずに、声を掛けていた。

鳴海は見られていたのか、と気まずげな顔になったが俺はそんなことどうでも良かった。ただ鳴海のしたことに驚いていただけで鳴海に恐怖や気味悪さなどは一切感じていなかった。

「すごいな、手品じゃないんだろ？」

「せ、先輩、恐くないんですか？」

鳴海がおずおずと訊いてくる。不安そうに目があちこちに動いている。まるで盗みを見つけた小心者の泥棒みたいで、俺は吹き出した。

「な、何で笑うんですかつ」

鳴海が真っ赤になって声をあらげる。全く威圧感はないが。

「別に……なあ、さっきのすごいな。昔から出来るの？」

鳴海は不思議そうに目を真ん丸にして俺を見る。

「は、はい……初めて気付いたのは小学三年生のとき、です」

鳴海の口調が重たくなり、俺はああ成る程……と納得する。恐らくその際誰かに目撃されて不気味がられたのだろう。そんな記憶が過つたに違いない。不安そうな後輩の頭に手をやれば、鳴海は気持ちよさげに目を細める。

「昔何があつたか知らんけど、俺は気持ち悪いとか不気味に思ったりはしないから、まあ安心しろ」

鳴海の髪は滑らかで柔らかく、触れている自分ですら気持ち良くなる。

「先輩って、本当に不思議な人ですよね」

「変人ってことか？」

「……そういう意味じゃないです」

拗ねたように言う鳴海の姿が可笑しくて、俺は久しぶりに大声を上げて笑った。鳴海は奴にしては憮然とした顔をしていたが、俺につられたのかはに cand 笑みを浮かべた。くちさがない者はその笑み

を女みたいだと嘲笑する輩もいたが、俺は鳴海やかいのその笑顔が心地よ
いと感じていた。…決して変な意味合いはないが。

「そう言えば、先輩どうしたんですか？こんなところまで」

「おお、鳴海を探してたんだよ。サークルのことで話があるから、
部室棟まで来てくれるか」

「……はい」

頷き、鳴海は再び元気になったパンジーに指先だけでそつと触れた。
軽く揺れる花びらが、鳴海にお礼を言っているように見え、俺はむ
ずがゆい気持ちになった。

「ありがとうございます、先輩」

歩き出した鳴海が不意に言った言葉に、俺は軽く眉を上げる。

「……僕のこの“力”を不気味がらないで凄いつて言ってく
れて、ありがとうございます」

何だそんなことか、と思っただが鳴海にとっては大問題なのだろう。

俺は笑みで応え、部室棟へ向かって歩き出した。

「……なあ、朔。応えてくれよ」

朔は怯えるように身を硬くしたまま、顔を逸らしたままだ。

ほら見る、と俺は思う。何が、訊かないの、だ。折角訊いてやった
のに応えないじゃないか。

応える気がないなら、最初からそんなこと言い出すな。

俺は軽く息をはいて、朔から視線を逸らした。

訊くだけ無駄だったわけだ。

「……分かった、もういい」

これ以上このことで時間をかけるわけには行かない、そう思った。
その瞬間、携帯電話が震えた。鳴海の病態に何か変化があったのだ

ろつか。俺は俺にしては焦りながら通話ボタンを押した。

「・・・・・・もしもし」

『あのさあ、僕の可愛い弟を苛めないでくれない？』

それは鳴海の背を押したと電話で自白してきた人物の声だった。

10、陸からの電話

俺は携帯を握る手に力を込めた。鳴海の、力なく閉じられた瞳が脳裡を過ぎる。

「・・・さつき病院に行ってきた。お前のせいで最悪な気分だ」

『あはは、それ僕のせいじゃないよ。鳴海っていうガキのせいだ・・
・変な力を持ってるから』

変な力。枯れ掛けの草木を綺麗に咲き誇らすことが出来る。そのことを言っているのか。

「お前に、鳴海の何が分かる、」

押し殺した俺の声に、電話の向こうが哄笑を上げる。一々人の気に触る言動を取る奴だ、と思う。

「朔がお前の弟なのか？」

『そうだよ。朔、僕のこと何も言わないの？』

声に、微かに怒りが籠もる。

「お前、俺たちを見てるのか？」

『ん？』

「僕の弟を苛めるな、って言ったな。そんなの、俺たちを見てないと分からないはずだ」

『なあんだ、そんなことかあ』

また笑った後、可笑しくて仕方ないといったように、

『だって僕と朔は一心同体だから。朔が考えてることはすぐ分かる。今、泣いてるのも、分かる』

その言葉に、俺は朔を見た。朔は涙に濡れた目で俺を見ていたから、目が合った瞬間に気まずそうに目を逸らした。

「朔」

「！」

「朔、お前の兄貴からだ」

朔の目が見開かれる。

「出ないのか」

『出ないよ。出たくないと思ってるから』
電話口から聞こえるそんな声。

『朔、僕のこと嫌いだもんね。僕はこおんなに朔のこと好きなのに』

朔が腕を抱えて俯く。傍目から見ても体ががたと震えているのが分かる。

『朔、僕の大好きな朔。今から会いに行こうかな？』

朔の耳元に電話を近づけるんじゃないかと、俺は後悔した。我慢するかのように蹲ったままだった朔がいきなり俺が携帯を持っているほうの手を払ったのだ。携帯が飛び、床に落ちる。

『あは、あははははははははは！！僕の可愛い朔！怯えてるね、恐がつてるね、いつもの可愛い悲鳴を聞かせてよ！！』

一体どういう原理なのか、離れた電話から、耳につけている時に聞こえるくらいの音声で声が聞こえてくる。

「嫌だ、もう・・・、嫌だ」

耳を塞ぎ、涙を流す朔の様子は尋常ではない。これ以上電話を繋いだままにするのはやばい。俺は携帯へ急ぐと、

「もう喋るな。クス」

捨て台詞をはいて電話を切ろうとする。

『知りたくないの？鳴海を殺そうとした理由』

俺の指は、その言葉にピクツと動きを止めた。朔の精神状態を考えれば今すぐ通話を切るべきだが、その先を聞きたくもある。

『知りたくて仕方ない・・・っていう沈黙だね、それは』

くすくすくす、と笑う声が耳に障る。

「・・・お前、何を知ってるんだ」

こいつが鳴海を殺そうとした。鳴海を殺そうとした。鳴海を殺そうとした、

『朔を渡すことを条件に教えてあげても良いよ？』

「！」

そう来たか。声の感じや話す内容から碌な人間ではないと思っていたが、やはり碌でもなかった。

『どう？あなたには朔を匿う理由なんてないし、可愛い後輩が殺されそうになった理由を知るほうがあなたの為にはなるような気はするけど、どう？』

「・・・で朔を渡したら、また体に傷を付けて笑うのか？」

『あははははは！！悪い！？だって朔は僕の“玩具”だもの！玩具を持ち主が好きにして何が悪いの！？』

続く哄笑を遮るように、俺は声を出した。

「断る・・・と言ったら？」

笑い声が唐突に止み、

『それ、本気で言ってるの？』

怒りの滲んだ声が聞こえて来た。俺は薄ら笑いを貼り付け、

「本気だよ。人間性に問題があるとは言え、恐怖に怯えてる人間を放り出すほど腐っていないからな」

朔が顔を上げる。俺が目を遣ると、不安そうに見返してくる。だが涙は止まっていた。俺は電話を耳から離すと、

「朔」

「な、何・・・？」

「お前、兄貴のもとに戻りたいか？」

朔は何度も首を左右に振った。掻いた汗が中空に飛び散るほどに。俺は頷き、再び電話に意識を戻した。

「一心同体で朔のことなら何でも分かるんだろ？」

向こうから抑揚のない声が聞こえて来た。

『・・・・・・・・・・ああ、分かるよ。朔が僕をとて拒絶して居るのが分かる』

「だからお前の条件は呑めないな。切るぞ」

『朔に伝えといて・・・・必ずまた泣かせてやるって』

次の瞬間にはツーツという音。俺はやれやれと溜息について携帯を置いた。さ

「に、兄さんは何て？」

「……取引を持ちかけられたんだ」
朔が首を傾げる。

「朔を渡す代わりに、鳴海を殺そうとした理由を話すって」

「！！」

「それと……、」

本当に伝えるのか。必ずまた泣かせてやるって兄貴が言ってたって。……あの、

俺の逡巡が伝わったのか、朔が不思議そうに声を掛けてくる。俺はそんな朔の頭を撫で、

「何でもない……朔がいやだって言うなら、絶対兄貴には返さないから」

朔は真つ赤な目を見開き、唇を震わせる。顔色は更に蒼白くなり、絶対休養が必要だと嫌でも分かる。

俺でも不思議だが、何故行きずりで拾った人間を此処まで介抱し守ってやろうとしているのか俺には分からずにいる。赤の他人である朔がどうなろうと俺には関係ない。

その、筈なのに。

俺は一体どうしたんだろう。何がしたいんだろう。

「あり……がとう、」

また零れる涙。でもそれは悲しみのせいではないと思いたい。

「ありがとうございます、」

掠れながらも必死に紡がれる言葉に、俺の足りない“何か”が震えたような気が、した。

10、陸からの電話（後書き）

朔を守ってやりたいと思い始めた“俺”の心に何か変化が起こりつつある様子。

そして朔の兄である陸はどう出るのか……………。

11、死生観と朔の涙（前書き）

サブタイがっつ・・・！！

とりあえず久しぶりに更新の本編をどうぞ！！

11、死生観と朔の涙

「面白いことが起こっているようですね」

シルクハットを目深にかぶった黒スーツの男は真つ赤な唇を弓形に歪めた。笑っているのだ。

「・・・本職よりこちらのほうが面白そうだ。軍配は・・・あつちに上がりそうだが一見の価値はあるだろう」

あるマンションをぶつぶつ呟いて見上げていると、音もなく誰かが彼の横に立った。眼鏡をかけた物静かそうな風貌をした男。

「これはこれは春樹さん。ご機嫌如何かな？」

シルクハットは鍔を軽く摘んであつけらかなとした声で挨拶をした。それを瀬尾春樹は渋面で受け止める。

「公衆の目前で俺を下の名前で呼ぶなって言ってるだろう、如月」
「ふふっ」

シルクハットは微笑で苦言を受け流すと、

「良いんですか？公衆の目前で私とお話なんかしても・・・なんて言いましたっけね、あなたの家来のお名前・・・あの可愛い顔をした、」

「陸は家来ではないし、本人の前で可愛い顔なんて言おうものなら噛み付かれるぞ」

「そうそう、その陸くんです。彼、怒るでしょうねえ。・・・ところで家来といえbaumう一人いましたっけね。・・・今は、」

スツとマンションの一室に指を伸ばし、にこりと唇だけで微笑む。

「あの部屋に人間という、ね」

「だから家来ではないと言っている。・・・それにあいつが逃げ出したのは、お前の差し金だろうが」

「お見通しで。どうします、私を殺すんですか？」

春樹は眇めた目でシルクハットを見遣る。シルクハットは決して顔を見せようとはしない。帽子を脱がそうとしても抵抗はしないだろ

うが、良い顔はしないだろう。付き合いの長い春樹は彼のことをよく知っている。

「・・・どうやら殺す気はないようですね。ただの散歩ですか？」

「そんな訳がなかるう・・・朔が懐く人間とはどういったものか？ 気になつてな」

「おやおや、鬼の瀬尾と呼ばれた前所長の息子とは思えぬことを仰る。あの方は常に血の気盛んで一族でも抑制が難しかったと言うに」

「俺をあの人と一緒にして欲しくないな」

渋面を更に深める春樹に、シルクハットは言葉を重ねる。

「家来を取り戻しに来た・・・といった面構えでもないし・・・さてはあなた、迷ってらっしゃいますね」

的を射ていた。春樹は押し黙り、陸の実弟・朔がいるであろう部屋を見上げる。何故朔の居場所がわかったかという、決して陸に聞いたわけではない。シルクハットが朔を捨て置いた場所を報告書で知り、後は現地に来て朔の匂いを嗅ぐだけで事足りる。春樹の鼻は犬の何倍も嗅覚に優れ、何処でも重宝されていた。そのことはシルクハットも承知していて、春樹がどうやって朔の居場所を掴んだのかを不思議には思っていないようだった。

「・・・朔にとどめを刺さなかったのは、何故だ」

「私がじわじわ相手を苦しめるのが大好きだというのはご存知でしょう？ あの子も例外ではない。じわじわ苦しめて死に至らしめるつもりだった・・・なのに明朝に捨て置いた場所に行けばあの子の姿はなかった・・・歓喜に震えました。もっともつと苦しんで然る後に死ねと思いましたよ」

「・・・お前は朔を殺したいのか、殺したくないのかどっちなんだ」

「と、仰いますと？」

恍けたような声を出すシルクハットを、春樹は真正面から睨みつけた。普段温厚で所員から受けのいい彼にしては厳しい態度だ。

「陸のもとからの脱走を手引きしておいて、朔を殺そうとしてるじ

やないか。お前の行動には一貫性がないだろう」

そう。然る後死ねと思った、じわじわ苦しめて死に至らしめるつもりだったと言いながら、しかし朔を虐待していた陸のもとから朔が逃げ出せるような手引きもしている。まさか朔を殺すためだけに春樹や陸を敵に回そうとしているのか？

「……どうなんだ。お前は結局朔を殺したいのか、生かしたいのか」

シルクハットからの応えは暫く無かった。

そして人の往来も全くない。どうやら相手の術中に迷い込んだらしい、と春樹が思い出したとき、

「どちらかといえば殺したいのは陸、のほうですね」

「……何？」

予想していた答えとはどれとも異なり、春樹は思わず怪訝そうな声を上げていた。

「……と言ったらどうしますか？」

「っ、お前っ!!」

「私に手玉に取られるようではまだまだですね、瀬尾春樹さん」

愉快そうに咽の奥でくっくくと笑いながら、シルクハットは歩き出した。恐らく本来の職場に戻るのだろう。

「待て……!」

「あなたはあなたの思う道を進めば良い……たとえ元親友が目の前に立ちほだかろうと、あなたはあなたのなすべきことをすれば良いんです」

……伸ばされた手は取られることなく。

感情の読めない濁った瞳が、一瞬だけ昔の奴に戻った気がして、でもそれは自分の錯覚で。

「もう、交わる道がなくても……あなたはあなたの生を生きればよい。私も、そうします」

五年前の情景が重なって、胸が痛くなる。

届かない手、届かない声。それでもあいつには届いていると信じた。

信じないと正気でいらなかった。親友が“狂気”に囚われてしまったのが自分のせいだから、尚のこと。

「如月！！」

シルクハットは春樹の呼びかけには応えず、颯爽と歩き去った。

「……………くそ、」

シルクハットが春樹の視界から消えた瞬間、雑踏が戻ってきて、買い物帰り風の主婦が春樹の毒づきに不思議そうな顔を向けた。

……………俺に似ず、可愛い妹だった。まあ男に余り可愛いとは使わないかも知れんが。

名前は斗賀野蛭。とがのぼる真ん丸い目と愛らしい笑顔の持ち主だった。

「お兄ちゃん、大好き！」

「パパもママもだあゝいすきっ」

笑顔でいつも俺たち家族を癒してくれていたと言っても過言ではないだろう。

わがままは滅多に言わないし、過剰に泣いたりダダを捏ねたりして両親を困らせることもない。

小さい頃から出来た妹だったと思う。

そう……………“だった”。過去形だ。

斗賀野蛭はもう居ない。三つ下の妹は、俺が十歳、妹が七歳の時に死んだ。

俺が、殺したんだ。

人は言う。あれは笙汰の所為じゃない。不運な事故だった。

両親もそう言っていた。でも、あれは俺の所為だ。

守ろうと思っていたのに。お兄ちゃんだから、蛍のこと守ってあげないよね。

父さんや母さんからそう言われたから。二人が俺を頼ってくれていると分かったから。それに、一緒に遊んだり絵本を読んでやったりすると蛍は物凄く喜んでくれるから。だから、守りたかったのに。でも、結局守れなくて……………

あの時、まだ十歳っていうガキだったけど、“死”は何も特別なことじゃないんだ、と自棄に冷静に悟った。死は常に俺たちの直傍にあつて、楽しいことも嬉しいことも辛いことも哀しいこともあつさり根こそぎ奪い取っていくんだって。蛍の笑顔が一瞬にして奪われたように。

だから死は恐いものじゃない。生と同じで普通にあるものだから、恐れる必要なんてない。

俺はそう知ったんだ。

だから、俺は……………

「あの、大丈夫ですか……………?」
「……………」

俺は思わず朔の頭をポン、と叩いた。

「な、何するんですか」

「別に」

素っ気無く言つて、俺の顔を覗き込んでいる朔を遠ざけるように手

をヒラヒラと振る。

俺はどうやら過去に意識を飛ばしていたらしい。恐らく朔を守れなかった妹と重ね合わせて大義名分を得ようとしているのだ。朔を守るのは、妹を守れなかったから。その償い。

「……………さて、もう仕事する気分じゃねえなあ、」

「あ、ごめ……………なさい」

「朔のせいじゃないさ」

俺は時計を見上げる。午後六時。意外と時間が経ったな、と今更ながらに思う。

「何喰いたい？……………って腹減ってないか」

昼飯は結構食べた筈だし、大して動いていないし。そう思ってたのだが、

ぐううううううう、と朔の方から物凄い音が響いてきて俺は思わず目を細めた。眼光に怯んだらしい朔が、赤面して顔を逸らす。何処まで行っても素直な反応をする奴だ。

「……………減ってるみたいだな。まあ健康なようで結構、」

「……………」

「んな顔すんな。減らないよりマシだ」

俺はどっこいしょと年寄りくさい掛け声とともに立ち上がる。夕食は何にしようか。

「朔ってスパゲッティって喰ったことある？」

コクコクと真つ赤な顔で頷く朔。

夕飯は決定だな。俺は支度をするために台所へ移動した。

陸は見るからに不機嫌そうだった。外から帰った春樹はその不機嫌

さにまた頭痛の種が増えたと思った。

「どうしたんだ、陸」

「うつさい、触るなっ……!」

腕を跳ね除けられる。

「朔のこと？」

陸が不機嫌になるのは朔のことか食事のことくらいだ。だから春樹はそう訊いたのだが、

「だったらなんだ!!」

更に逆鱗に触れてしまったらしい。顔を真っ赤にして怒鳴る。

(……頭痛いなあ、)

「朔の奴、今度会ったらただじゃおかない。……僕のことを馬鹿にして……」

ブツブツ呟きだす。こうなったらもう放っておくしかない。春樹は溜息をついて、流れ弾があたりぬように部屋を出た。

「……ごちそうさまでした」

こいつは本当によく食べる奴だな、と俺はしみじみと思った。当初はスパゲッティのみだった筈が、白米やら有り合わせの野菜炒めやら缶詰めのフルーツやら、食べる食べる。ただ鳴海にしる宝生にしる店の仲間にしろ、俺の周囲には少食な奴が多いからまあ新鮮ではあるが。

「……」

そしてすぐに眠そうに首を傾げる。こいつは食べるとすぐに眠くなる質なのだろうか。

「朔、眠いなら寝ていいんだぞ？」

だが朔は首を横に振って、立ち上がる。何をする気なんだ、こいつは。

「お皿……洗う、」

何で片言なんだ。まさかもう眠りに落ちていて、寝ぼけてるんじゃない？ 皿を割られては堪らないので、俺は朔の腕を掴む。

「良いから。寝てろ」

「……でも、」

「寝ろ」

強く言うと、朔は頷いて大人しく布団に入る。だが横になろうとしない。

「寝ないのか？」

「……怖い、から」

「は？」

「寝て起きたら……鳴海さんが死んでしまっているような気が、して、」

ギュツと握りしめた拳が視野に入ってきて来る。不謹慎な物言いに怒るべきなのかと思うが、出来ない。朔は自分のせいで鳴海が生死の境目にいるのだと、自分を責めているのだろう。

「……鳴海は死なないよ」

朔は顔をはねあげて俺を見る。俺は自分がどういう顔をしているか分からないが、朔は俺を見て息を呑んだのは分かった。

「あんないい奴が、死んじゃいけないんだ……死ぬのは、俺みたいな奴で良いんだよ」

それは心の底からの本音で。脳裏にちらつくのは、妹である蛍の笑顔。鳴海の力なく閉じた瞳。

「……どうして、そんなこと言っ、ですか？」

朔の乾いた声に、蛍の笑顔や鳴海の瞳が脳裏から霧消した。俺は朔を見る。大きな瞳が潤み、

「……死んで良い人なんて、いません。どんな人だって生きるべき

です……僕だって、」

堪えきれなくなったように俯き、長い前髪のせいで朔の目は見えなくなった。

正直自分の言葉で朔がうちひしがれるとは思ってもいなかった。

「……僕、寝ます」

消え入りそうな声で言い、朔は布団に潜り込む。俺は自分でもよく分からない感情に、ため息をはく。時計を見やれば、まだまだ俺が寝るような時間ではない。だが近くに寝る者が居るのに、煌々と明かりを点けていても良いものかと迷う。余り迷わないと自負出来る俺にしては珍しい。まだ一日も一緒にいないのに、朔に影響され始めているのだろうか。

「……悪いな、朔」

朔からの返事は、なかった。

12、鳴海の独白（前書き）

意識不明に陥っている鳴海のお話

12、鳴海の独白

『化け物、鳴海っ』

『化け物、鳴海イツ』

まだ小学生の僕が蹲る周りを、数人のクラスメートたちが囁し立てながら走り回る。

僕は涙を流しながら止めてと訴えるけれど、誰も止めてくれないし、誰も助けてくれない。

『やめ、止めてよぉ』

『泣いた泣いた、化け物の癖になあいた』

野次は酷くなる一方。

ついには髪を掴まれて、ぬかるんだ土に顔を突っ込まされた。

『どうしたの鳴海。化け物は化け物らしく抵抗して見せてよ』

とうに声変わりの済んだ同級生の男の子の声が聞こえた。僕を苛めているグループのリーダー！。

『ぼ、僕・・・は、化け物なんかじゃない・・・』

『え？聞こえない』

明らかな嫌味に、上がる笑い。

『ぼ・・・僕は化け物なんかじゃないっ』

『化け物じゃなかったら何な訳？枯れた花に触れたら綺麗に咲くなんて普通出来ないでしょ。化け物でもない限りさ』

倒れたまま俯く視界に、リーダーの靴先が入ってきた。ぴかぴかに磨かれた、小学生が履くの？と言えそうな高級そうな革靴。その靴先がゆっくり右の方に動いたかと思うと、

『いつ・・・!!』

僕の右手の甲を思い切り踏みにじった。激痛に、更に涙が出る。

誰も助けてくれない。僕が泣き喚くのを楽しそうに眺めているだけ。先生すら見て見ないフリをした。先生も知っていたから。僕の変な

“力”を。

先生も、僕を変なものを見るような目で見た。

その目が、今でも頭から離れない。僕を否定する、僕を不気味だと断言する瞳。

僕は誰にも危害なんて加えてないのに。ただ、枯れかけていた花に触れただけ。そしたら何故か枯れかけの花が巻き戻しを起こしたかのように綺麗に咲いた状態になった。

最初自分の“力”に気付いたときは驚きより恐怖の方が勝っていたように思うけれど、それでも嬉しかった。他の人には無い“力”ではあったけど花がまた綺麗に咲けるのなら花も喜んでくれると思った。それに僕が他の人と違うのだということは幼心にも分かったし、人の顔色を気にしがちな僕だからその“力”を滅多に使わなかったし、絶対に人の前ではやらなかった。

なのに、何を間違えたのか僕はあんな・・・皆の目の届く場所で、してしまった。

その瞬間に走ったざわめきと、僕を見る皆の目は決して忘れることなど出来ない。

その瞬間から、僕の周囲は僕を集団の輪から弾き出し、僕を“化け物”だと罵るようになった。

中学校に行っても、同じ小学校の子が多かったから、僕の良くない噂が広まるのに大した時間はかからなかった。苛めはなくならなかったけど、幸いといえば幸いか僕を小学校の頃に苛めていたグループのリーダーは引越していったから、酷くもならなかった。

そのかわり友達も出来なかった。もともと引つ込み思案だし、近付いていって“化け物”と罵られ拒絶されるのが嫌だったから。だから自然僕は周囲と距離を置くようになった。

高校は一般の公立高校に行った。中学校によくしてくれた先生には私立も狙えるとは言われたけど、受験というものにも私立の高校に

もワンランク上の高校にも興味は無かったから。

それでも実家からは離れた高校にした。電車で片道一時間はかかる高校だ。

運が良かったのか、その高校ではあまり地元の顔見知りには居なかった。だから安心はしたけど、その頃には“力”のことは抜きにしても人と触れ合うことに一種の恐怖を抱いていたから友達はあまり出来なかった。それでもクラスに二、三人は話仲間は出来た。一緒にどこかに出かけたり、といったことはなかったけど、学校にいる間だけ傍に居れくればよかった。学校は何かと誰かと組になったり授業の関係でグループを作ることが多いから、少しでも話せる相手がいれば都合が良い。

つまはじきにされることもなく、かといって誰かと親密になるといったわけでもなく、高校生活は普通に過ぎていった。

そして、大学。今いる大学を選んだことに大した意味はない。募集要項を見て、少し興味のある学科があったこと、そして自分の学力で受かるであろう公立の大学だったから。両親を亡くした僕は学費をおじさん夫妻にご厄介になっていたけど、さすがに私立大学に行くだけの学費を工面してもらうのは申し訳なくて気持ちだけで良いと言った。おじさんたちは気にしなくて良いと言ってくれたけど、大学に行かせてもらえるだけで僕は嬉しくて満足だった。

そして入学からしばらく経ったある日、僕は最悪な人と再会していた。

『あ』

それは小学生時代に僕を一番苛めていたあの革靴の子だった。街角でばったり出くわしたのだ。僕は一人で、相手は友人を含め五人。目があった瞬間に僕は身を翻して立ち去ろうとしたけど、反応したのは向こうの方が早かった。

『お前、鳴海だよ』

呼び声に、ビクンツと体が竦み、身動き出来なくなった。脳裡に苛められていたときの苦痛と悲しみが一気に蘇った。

『何、知り合い？』

仲間が怪訝そうに言うのに頷いて見せる。

『まあね。小学生の時の同級生。ちよつと来いよ』

グイツと腕を引っ張られ、抵抗することも出来ないまま暗がりにつながれて行かれた。

『は、放してよっ……！』

『今俺ら、金がなくて困ってたんだよねえ。くれない？』

『ど、どうして僕が……っ、』

グイツと胸倉を掴まれ、ニヤニヤ笑んだ顔がグツと近付いて来る。

『金寄越せよ。“化け物”の鳴海君？』

『……っ！』

仲間の腕が伸びてきて、僕の鞆を奪う。

『か、返し……んぐっ……』

お腹を殴られて、僕は呻き声を上げてあまりの痛みにしやがみ込んだ。でも攻撃はやまなかった。鞆を取り戻そうと伸ばした腕を捻られ、地面にねじ伏せられる。

『い、痛いっ……！』

『さっさと財布だけ取ってずらかろうぜ』

『分かってるよ……おっ。結構持つてるじゃん』

止める、それはおじさんがくれたんだ、好きなものを買いなさいって僕にくれたんだ……！

だがそんな言葉は痛みと恐怖の前に出てこない。諦めるしかないのか、と思った。

その矢先、

『……折角の休みなのに、嫌なもん見ちまったなあ……』
妙に間延びした声に、その場全員の視線が声の主に向かう。

……そこにいたのはすらりと背の高い二十代前半くらいの男の人だった。綺麗な顔立ちで、一瞬女の人かと思った。少し眠たげな瞳が僕に注がれる。

『何だ、お前』

『ただの通りすがり。ねえ君』

その人が何気ない口調で僕に声をかけてきた。返事をしようとしたけど、氣道が塞がれてしまったかのように声が出ない。

『……君がやられ役で間違いないみたいだね』

そして唇の端を歪めると、僕の鞆を物色していた一人に視線を向け、
『ぐわっ……！』

あっさりと倒した。それを見た仲間たちが逆上して思い思いに男の人にぶつかって行くけど、男の人は彼らを軽くいなしたただけでいとも簡単に地面に伏さした。

『な、何だ……お前、』

残るのはあの革靴の子だけになっていた。仲間たちが簡単に倒されてしまったことに畏敬の念を隠し切れずに男の人を見上げている。

『……お前がヘッドか、』

眼光が一気に鋭く光った瞬間、

『クソツたれ……！』

定石の捨て台詞を残して逃走した。

『……』

僕はポカンと間抜け面で助けくれた人を見上げた。差し出された手におずおずと掴んで立ち上がる。

『はい、鞆』

『あ……りがとうございます』

掠れた声しか出せなかったけど、にっこりと微笑んだその人に頭を撫でられる。

『じゃあ。気をつけるよ』

『あ、』

ちゃんとお礼も出来ぬまま、僕を助けてくれた人は雑踏の中に消えて行った。

『……』

それが僕と、斗賀野笙汰先輩の出会いだった。

斗賀野先輩が同じ大学に在籍していると知ったのは偶然だった。五コマ目終了後に構内を歩いていると、友人らしき人と歩いているのを見たのだ。

先輩はまだ帰らないのか、鞆を持っていなかった。何処に行くんだろっ、と僕は思いながら何となく先輩たちの後をつけた。

『……地歴研究会？』

確か入学後すぐに開かれたサークル紹介で、映像だけの紹介のグループにそんな名前がなかっただろうか。先輩はサークル棟のその部屋に入っていたのだ。

つけてきたのは良いけど、僕はどうしたいのだろうとドアの前でボケツと立ち尽くしていると、

『邪魔』

『！ご、ごめんなさい！！』

人が後ろに立ったことにも気付かなかった。慌てて身を退けると、後ろにいた女の人がドアノブを掴もうと手を伸ばすのと、そのドアが内側から開いたのは殆ど同時だった。

『九条遅い……ってお前、』

『あ、』

ドアを開けて顔を覗かせたのは僕を助けてくれた人で、向こうも絡まれていたのが僕だと気付いたらしく眉を上げた。

『あの時の』

『あ、あの、あの時はっ』

九条と呼ばれた綺麗な黒髪の女の人が胡散臭げに僕を見下ろす。

『九条は先に入ってっ』

『……ええ』

九条さんと先輩が入れ違いになる。先輩はドアを閉めると、

『あの時は訊かなかったけど、怪我はなかったか？』

『あ。ぜ、全然平気です』

気にしてくれていたんだと思うと、僕はなんだかこそばゆい気持ちになった。

『・・・何だ、嬉しそうな顔して』

『あ、ごめんなさい・・・・・・・・・・』

『お前、名前は？』

『な、鳴海和晃です。鳴く海に和平の和に日の光の晃です』

馬鹿丁寧の説明する僕に、先輩がプツと噴出す。クールそうなのに、笑うと茶目っ気のある顔になるなあと僕はぼんやりと思った。

『一年生か？』

『入学したばかりです』

『そうか。俺は斗賀野笙汰。一応三年』

そのときはただ世間話をするだけサークルに入会をするとか見学をするといったこともなかった。

でも僕は結局サークルに入り、先輩や九条さんたちに可愛がってもらって、

先輩には“力”を目撃されて・・・でも先輩は僕を気持ち悪がったり不気味がったりしないで、ただ凄いと言ってくれた。

僕を排斥することなく、“力”のことを認めてくれて。誰かに言い触らすこともなく。

態度を変えることなく。

大学を卒業後も何かと僕のことを気にしてくれて。

そう、今日だって・・・・・・就職のことを気にしてくれて。

いつものように優しい笑顔で頭を撫でてくれて。

父さんの掌のように大きくて温かい手。

でももうその手に触れること・・・出来ないのかな。

僕の人生は、楽しいことよりも圧倒的に辛くて哀しい出来事が多かったように思う。

それに、どうして自分にあんな“力”があるのだろうとも思う。あ

の“力”さえなければ、苛められなくて済んだんじゃないか。そう思うこともある。あんな“力”がなかったら、もつと違う人生を遅れたんじゃないかって思う。

でも。

きつと先輩に出会えて親しく出来るようになったのはこの手の“力”のおかげなのだろう。

先輩に凄いと認めてもらえて、久しぶりに“力”を持ててよかったと思った。一番最初は“力”が発現してすぐのこと。当時淡い想いを抱いていた女の子が花が枯れたと泣いたことがあった。だから僕はその子の家に遊びに行ったとき誰も居ないタイミングを見計らって“力”を行使した。そしてみんなが戻ってくると花は綺麗に咲き誇っていて女の子は神様の奇跡だ！と言って喜んでくれたこと。彼女の両親は気味悪そうに花を見ていたけどそのときの僕は女の子に喜んでもらえたことが嬉しくてそんなの全く気にならなかった。

一寸先は闇。昔の人は上手に言ったものだ、と僕は苦笑する。

今からだの感覚は一切ない。ただ指が何処らへんにあるかは何となく分かっていて、その指の先から一寸の距離もないほどに黒々と蠕わだかまる闇が存在している。それに触れたら僕はもう二度と先輩やおじさんたちのいる世界には戻れないのだろう。

それは哀しいし、寂しい。でも僕に、戻る資格なんてあるのだろうか。

変な“力”。先輩は認めてくれたけど、認めてくれたのは先輩だけだ。確かに知られることが恐くて隠してはいたが、僕の“力”を知らない人は五万といて、知っている人はほんの一握りだけ。

本来普通の人間であれば持っていない“力”を僕は持っている。それだけ僕という存在は世界から見れば異質な筈だ。世界を狂わせる、不必要な存在。そうではないのだろうか。

きつと僕が死んだらおじさんやおばさんは悲しむはずだ。先輩も、泣いてくれるだろうとは思う。思うけれど。

おじさんやおばさんは、僕の“力”を知っても僕を好いてくれるだろうか。“力”のことを抜き差しにしたって、僕はこの人たちの負担になっっているんじゃないかって、この人たちに本当は嫌われているんじゃないかって思うことがある。その上に“力”のことを明かすものなら、きっと僕は疑心暗鬼になってあの人たちを信じられなくなってしまうと思う。

異能者は、一人残らず消えてしまえば、いい。

……思い出した。僕を押した人が言っていたであろう言葉。声は聞こえなかったけど、何故か口の動きははっきりと捉えることが出来た。

その人は、怒っていた。僕に。僕の、“力”に。真っ赤な唇は弧を描いていたけど、目は全く笑っていなかった。射殺さんばかりの凍て付いた瞳で、じっと僕が道路へ体を倒していく様を観察していた。

異能者め、ここで果てる

・・・・朔君に良く似た顔。朔君は片目に眼帯をしていたけど、僕を押した人は眼帯をしていなかった。その違いを覗けば、朔君と明らかに違っているところはなかったと思う。

朔君とあの人は知り合いなのか。・・・でもあんなに似てるんだから、兄弟か何かなのかな。

朔君・・・先輩は知り合いって言うていたけど、本当に？

宝生さんにはああ言ったけど、僕も信じていなかったりする。先輩にあんな知り合いはいない。

あの二人にはえもいわれぬ距離感があった。長い間会っていなかった同士で緊張していた？

・・・違う、先輩は滅多な事じゃ緊張しない。

じゃあどうして？

「和晃！和晃！！」

ああ、おばさんが呼んでる。おじさんも一緒に呼んでくれてる。

そうやって僕を現世に留めようとしてくれてるのも、僕が無害だから？

“力”のことを知っても僕を留めようとしてくれる？愛してくれる？

猜疑が心を覆う。いくら血の繋がりがあっても、親に捨てられる子どもだっている。自分の腹を痛めて生んだ子でなければ益々捨て易くなるんじゃないだろうか。

僕は愛されていいの？変な“力”を持ってるんだよ？

普通の人とは違う。

それでも、愛してくれるの？

蟠る闇が、ゆらゆらと揺らめく。まるで僕を“あっち”側へ誘っているみたいに。

『そんなに不安なら死んでしまえば良いよ。苦痛も悲しみもない世界に、おいでよ・・・和晃君』

誰の声だろう。中性的だけど、きつと女の人の声だ。なんだか、母さんの声に似てる気がする。

じゃあ、父さんもいるね。

・・・母さん、父さん。二人が死んでから、僕はよく分からなくなつた。自分だけ生きてる意味が分からなくなつた。“力”を持った変な僕が生きて普通に真つ当だった母さんと父さんが死んだ。どうして？どうして僕より先に逝っちゃったの？・・・どうせなら、僕も一緒に行きたかつたな。

朔君に似た人が無理矢理、といった感じで笑顔を浮かべて僕を見ている。闇が手招きする。

『いらつしゃい、和晃。向こうで、母さんと父さんと一緒に三人で幸せに暮らしましょう？』

母さんの声。父さんも笑ってる声がある。

僕を待ってくれてる？僕、変な“力”があるのに、母さんたちと一緒に居て良いの？

『当たり前でしょう？和晃がいる世界と違って、こっちはとてもよい世界よ。人と違う“力”があるからって誰もあなたを責めたりしない。あなたも、その“力”のことも認めてくれる。みんな理解してくれる。争いも疎外もない。穏やかな世界よ』

母さんの言葉に、僕は惹かれた。今まで僕を疎外してきた人たちの顔がぐるぐると脳内を巡る。

ああ、これが走灯馬つていうものなのかな。

あの人たちがいない世界。みんな僕を受け入れてくれるんだ・・・

“力”こと。

それって、とてもいい世界だ。
なら、行ってみてもいいかなあ。

母さんも父さんもいるし……………、

「鳴海、しつかりしろっ!!」

え……………?

今、先輩の声がした気がする。

「鳴海、死ぬな……………」

先輩?

僕を呼ぶのは先輩?

右手に温かいものを感じる。何だろう。

「和晃!!和晃!!」

誰かが僕を呼んでる。この声は…………おじさんと、おばさん?

「…………ちっ」

誰かの舌打ちが耳元で聞こえた気がして、僕は何時の間にか閉じていた目を開いた。

闇が霧散し、まばゆい光とともに僕は現実の世界に戻っていった。

12、鳴海の独白（後書き）

ちよつと支離滅裂になってるかもしれませんが。読みにくくてごめんなさい・・・・汗

13、朔のトラウマ（前書き）

朔が壓されている理由の一端が明らかになります。まだまだ謎は多いですが・・・。

13、朔のトラウマ

「……朔の魔される声で目が覚めた。」

「俺いつの間に寝てたんだ……」

俺はぼんやりする頭を抱えたまま、魔されている朔を見た。朔は汗びっしょりで掛け布団を思い切り跳ね除けていた。俺はといえば朔の寝顔を見ているうちに眠ってしまったのか、胡座をかいたままの姿勢で眠りに落ちていたらしい。器用だな、と自尊する。

「う……はあ、はあ……」

俺は電気を点けないままに立ち上がり、洗面台からタオルを取りに行く。住み慣れた部屋だからか、電気を付けなくても少々なら歩ける。濡れたタオルと乾いたタオルを一枚ずつ用意し、部屋に取って返す。

「っ、……」

一体どんな夢を見ているのか。起こしたほうが本人のためになるのだろうか。少し考え、俺は濡らしたタオルをそっと朔の額に載せた。朔が一瞬身動ぎしたが目を覚ますことはなかった。額が気持ちいいのか、苦しげだった表情が微かに和らぐ。

俺は乾いたタオルで朔の汗を拭いてやりながら、今何時だろうと首を巡らせる。

壁掛け時計は文字盤が光るので、闇の中でも時間は分かる。

時刻は午前零時を少し過ぎたあたり。何気に寝ていたんだな。

そういえば鳴海は今晚がヤマだと医者と言っていた。頑張ってくれている、だろうか。

きつと鳴海のことだから、自分が死んだらおじさんやおばさんが悲しむから……とか何とか理屈を捏ねて生還するに違いない。あいつはそう言う奴だから。

『鳴海ちゃん他人のために頑張るタイプだけど、あんたは自分のために頑張るタイプだよな』

大学で知り合った一匹狼気質の女、九条晶子の言葉が不意に脳裡を過ぎる。彼女は日本の中心で無事就職を果たしたらしいが、最近は連絡を取り合っていない。

確かに九条の言は正鵠を得ている。鳴海は他人の目を気にして、簡単に自分を殺すタイプだ。

俺は自分大好きではないが他人よりも自分を優先する。だからこそ俺は後輩ではあるが鳴海といるとあまり気分が重くならなかったのかも知れない。

人間嫌いとはまでは行かないものの、俺は人があまり好きではない。第一に面倒くさい。第二に、邪魔くさい。なんでこんなにいるんだ、と疑問に思ったことも少なくない。どいつもこいつも何のために生きてるんだ・・・と思うこともたまにはある。

まあ俺も今のところこうして生きてるわけだから、無茶なことは言えないけど。

「う、」

朔がぶるつと体を震わせたかと思うと、疲れきった瞳が開いた。額に載っているタオルに気付いたのか、手を伸ばす。

「朔？」

「あ、」

「すごい魔されてたし、汗掻いてたから。冷たかったか？」

「・・・とても気持ちよかったです、ありがとうございます」

上体をゆっくりと起こし、タオルがかかったせいで濡れた前髪を掻き下す。

「気分悪いとか無いか？何か飲むか？」

朔の魔され方は尋常ではなかった。顔全体を苦悶に歪ませ、胸を掻き抱く姿がちらつく。

朔は少し迷ったようだが、

「お水、下さい」

と掠れた声で頼んできた。俺は頷き、台所へ向かう。流しの上の電気だけ点けると朔が背後で身動きする衣擦れの音が響いた。

「ほら、水。御代わりなら言えよ・・・水ならたくさんストックがあるから」

朔は頷くと、コップ一杯を一気に飲み干した。

「はぁ、はぁ、・・・っ、」

「！」

朔の体がぐらりと傾ぐ。眩暈でもしたのか。

「大丈夫か」

「・・・」

こくり、と再び頷く朔。その顔には生気がない。

「寝ろ」

「でも、どうせまた魔されるし・・・それに僕夜より日中のほうがよく眠れるから」

力なく言う朔に俺は一つの可能性を思いつく。

「朔、暗闇が恐いのか？」

それは夜など致命傷ではないか。俺がそう思いつつ訊くと、朔はなんととも言えない哀しげな表情になった。

「・・・恐い、とまでは行かないけど、好きじゃない。自分が暗闇に食べられるような気がして」

暗闇に食べられる？俺は異様な表現に眉を顰めるが、朔は俺の表情には気付かないのかそれともどうでも良いのか言葉を続ける。

「昔、夜にちよつと事件があつて、それから・・・イメージが消えなくて、」

「事件？」

「僕、人間に殺されそうになったことがあつて」

奇妙な言い方をする、と俺は思う。人間に殺されそうになった？まるで朔自身は人間ではないような言い方ではないか。

「灯りの無い空間で、首を締められて・・・だから夜に寝てたり無明の中に佇んだと、闇から腕が伸びてきて僕の首を締めるときそんな気がして、恐いんだ・・・」

上がる嗚咽。震える華奢な肩。鳴海や蛭に重なる。

「・・・だからそれ以来、夜は明かりを点けて寝ないと魔される。いつもじゃないけど、確立は高い。だから灯りはつけたまま寝てる」

「じゃあ何で先に言わなかったんだ」
俺はそう言いながら電気を点ける。いきなり明るくなったせいで明順応できず、俺は目を瞬かせるが朔はそんなことは必要ないようだ。つた。

蒼白な顔が俺を見上げている。

「だって普通は電気を消して寝るでしょ？だからその、あなたもそうじゃないかって、」

「勝手に判断するな」

言葉の途中で割り込む。朔が気圧されたように口を噤む。

「いつ俺が灯りを消さないと寝られないと言った」

「そ、それは」

「朔にそういう事情があると分かった上で俺がわざわざ電気を消すと思っただのか」

純然たる疑問である。俺はそんなに嫌なやつに見えるのだろうか。

『あんたって腹に一物抱えてそんな顔してるからね』

九条にずっと前に指摘されたことを思い出す。アレは本当に不本意だった。九条には言われなくなかった。

「そんな、こと……思わない、けど、」

苦しげに、そして悲しげに朔は言葉を紡ぐ。

「けど、何？」

俺は何を突っ込んで訊いているのだろう。朔は怖がっているのか、身を硬くしている。

「……いや、無理には訊かない。悪いな、脅かすみたいな言い方して」

朔は首を左右に振る。

「……兎に角、電気は点けたままにしとく。暗くしないと寝られないつつうことはないから、心配するな」

「ありがとうございます……」

「朔、敬語は使わなくて良い。そういうの慣れてないからむず痒くなる」

以前鳴海にも言ったことのあることを言った。鳴海は敬語のまま話すが、朔はどうだろうか。

朔は何が恥ずかしいのか、口籠もっていたが素直にこくりと頷いた。

「あり、ありがとう」

「どういたしまして。・・・ほら、電気点けとくから体を休めろ」

朔は上体を倒し、じっと蛍光灯を見上げる。

「え、つとあなた、は寝ないんです・・・寝ない、の？」

何だそのぎこちない言葉の羅列は。そう思うと俺は可笑しくなつてプツと噴き出す。

「な、何で笑う・・・の」

「いや、良い。朔らしくて」

「ぼ、僕らしいって、ば、馬鹿にしてる・・・の!？」

俺は目の端に涙を浮かべつつ、顔を照れに真っ赤に染めている朔の顔を緩く撫でてやる。

「してないよ」

以前、大学で倒れた鳴海を医務室に見舞いに行ったときも俺は鳴海の顔を撫でてやった気がする。鳴海は気持ち良さそうに目を細め、お見舞いありがとうございますとはにかんだような顔で笑った。

俺は何時の間にか朔と鳴海を重ねているのかも知れない。今病院の集中治療室で必死に戦っている鳴海と。

・・・頼む、鳴海。絶対に戻ってきてくれ。

俺の願いは鳴海に届くのだろうか。そんなことを思いながら、明るい光のもとでとうとうと始めた朔の顔を撫で続けた。

最近自分の思う通りにならない。

皆が寝静まった中、陸は腕を組んでむっつりと不機嫌な顔で黙り込んでいた。

朔には逃げられるし、心底拒絶されるし、殺そうとした鳴海という異能者は息を吹き返し、よって朔を絶望に突き落とすことも出来ない。散々だ。

（……待っててね、朔。絶対君を絶望に突き落としてあげるから。そして、兄である僕の傍でしか生きていけないことを、思い知らせてあげるから）

無理矢理自分を奮い立たせ、陸は薄明かりの中整った顔立ちを嘲笑の形に歪めた。

14、陸の決意と迫る暗雲（前書き）

鳴海はどうなったのでしょうか。

14、陸の決意と迫る暗雲

携帯電話が鳴ったとき、窓の外は白み始めていた。

朔が身動きしたが目を覚ますことはなかった。俺は手を伸ばして寝ぼけ眼のまま携帯を開いて液晶画面に目を落とす。

「！」

その瞬間、眠気は吹っ飛んだ。慌てて電話に出る。

「もしもしっ」

『あ、斗賀野君かい？』

安堵の滲んだ男性の声。鳴海のおじさんである章介さんの声だ。

『寝てたかい？』

「俺は平気です。鳴海は・・・あいつはどうになりました!？」

朔が俺の声に気付いて起き上がる。

『君にも心配かけたね。今は眠ってるけど、一度目を覚ましたんだ・・・先生の話だとヤマを越えたそうで、和晃さんはよく頑張りました・・・とまで言ってくれてね』

無事だった。鳴海は無事だったのだ。

「そう・・・ですか。良かった」

久しぶりに味わう心からの喜びに、俺は気が抜けて座り込んだ。どうして鳴海の存在は俺の心をこうも揺さぶるのだろう。他人のことなんて気にならない・・・筈なのに。状況による、のだろうか。

『和晃から君に伝言があるんだ』

「・・・鳴海から？」

『もう闇に身を任せてしまおうと思ったときに、先輩の声が聞こえたから、ちゃんと戻って来れた。先輩、有難う・・・』と
あいつらしい、と俺は思う。

「そうですか・・・。鳴海はまだ集中治療室に？」

『今はね。そのうち一般病棟に移るように手配してくださるそうだ』
「分かりました・・・連絡、有難う御座いました」

俺は離れた場所にいる章介さんに、心の中で辞儀をした。

『また何かあつたら連絡するよ』

「はい・・・失礼します」

電話は向こうから切れた。俺は朔を振り返る。

「今の・・・、電話は、」

「朔、鳴海・・・無事だった」

「！」

朔の目が見開かれ、ついでぼろぼろと大粒の涙を零し始めた。ぱたぱた、と音を立てて涙が掛け布団の上に落ちる。ついで上がる泣き声。

「よ、よか・・・良かった、よか、良かったあああつあつ！」

朔は純粹に鳴海の無事を喜んでくれているのだろ。目を真っ赤にし、鼻を垂らし、泣きじゃくる。

体についた無数の刃物の傷跡。実兄による言葉の暴力。そして、実際に行われているのだろ。兄からの折檻。体も心も疵付いている朔だからこそか、他人の痛みに敏感だ。

「朔、ありがとうな」

「お礼なんて・・・だって、鳴海さんが死にそうになったのは僕のせいだ。お礼なんて、しないで、」

「お前のせいなわけあるか、馬鹿。お前の兄貴が鳴海を殺そうとしたんだから」

「・・・」

朔は何度も首を左右に振る。

「・・・実際に手を下そうとしたのは兄さんだけど、でも」

咽に何かを詰まらせたかのように口を閉じ、苦しげに息を詰める。

でも、という逆説の後の言葉が続かない。朔の中の“理性”がブレーキをかけたのか。

「兎に角鳴海は無事だったってことだ」

朔がこくりと頷く、その瞬間

閉じてたばかりの携帯が再び着信を告げた。液晶では鳴海の携帯か

らかかったことになっているが、恐らく、

「・・・何か用か」

『話す前から僕だって分かるんだ。大した進歩だね』

皮肉と怒りがない混ぜになったかのような不思議な口調で聞こえてくる、朔の兄貴の声。

「それはどうも」

『朔に代わってよ』

朔を見れば、一瞬ビクツと震えたものの細い腕を俺の方に伸ばしてきた。俺は朔に携帯を手渡す。

「に・・・いさん？」

『おはよう、僕の可愛い朔・・・あの“手”の異能者・・・鳴海だっけ助かったみたいだね？』

「・・・連絡があつた、よ」

『嬉しいでしょ？』

「それは・・・嬉しいよ」

『折角異能者を殺そうと思つたのに』
ビクツと再び朔の体が震える。

「でも鳴海さんは“あの人”たちとは違うんだ・・・！人を傷つけるために“力”を使つてたわけじゃないんだ」

『・・・いつから僕に口答えできるようになったのかな？朔？』

「口答えだなんて、僕はそ」

『分かつた。そんなに僕に可愛がつて貰いたいなら、会いに行つてあげるよ』

「！！」

『また、可愛い声で鳴いてくれるよね？』

「ひっ・・・！！」

朔が仰け反つて携帯を取り落とした。

「朔！？」

朔はがたがたと体を震わせて両耳をふさいだ。目を限界まで見開き、荒く息を繰り返す。

「ごめ、ごめんなさい・・・兄さんごめんなさい、もうしません、もう兄さんを怒らせるようなことはしません、だから、だから許してください・・・・・・・・っ」

『幾ら謝ったつてもう遅いよ、朔？今から会いに行くからね！？悪い子にはお仕置きが必要だもんねっ！？』

沸き起こる哄笑。酷くなる朔の震え。俺は携帯を掴み、電話機の方こうに耳を澄ませる。

『朔震えてるね、恐くて震えてるね・・・・・・・・ふふふ、とっても嬉しいよ』

一方的にそう言い、通話を終える。

「朔、」

朔は電話が切れても耳を塞いだままだ。何かぶつぶつ言っているの
で耳を近づけて聞いてみれば、

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい・・・・・・・・」

と恐らく兄貴に対して謝罪の言葉を繰り返している。目は何処か遠くを見て、光がないように見える。

「朔！」

大声で呼んで肩を揺すってみても、朔は俺を見ずに今この場にいない兄貴に謝罪を繰り返すばかりだ。

「ごめんなさい、ごめんなさい・・・・・・・・」

俺は密かに溜息をつく。だが無理矢理黙らせるのも違う気がして、どうすることも出来なかった。

春樹が部屋に入った瞬間に陸が電話を壁に向かって投げ付けたので思わず驚いてしまった。陸の奇行は今に始まったことではないと言
うのに。

「朝っぱらから何暴れてるんだ、陸」

真つ赤な顔が春樹を睨む。春樹は降参、というふうに両手を軽く上げて溜息をつく。

「ムカツク」

ボソツと呟かれた言葉。

「・・・・・・何が」

分かっているが敢えて訊くあたり俺も懲りないな、と春樹は自嘲する。

「分かってるでしょ、朔だよ朔！今まで大人しい顔して僕に従ってたくせに、僕から逃げ出した途端に掌を返したように口答えして！」

欲しいものを買ってもらえない子どもみたいだ、と春樹は呆れる。

「・・・・・・陸、前から言ってるだろ？朔は朔。陸は陸だって。自分の考えを朔に押し付けるのは感心しない」

「良いんだよ！朔は僕に従ってれば！！」

恐ろしいまでの執着心。陸と朔の兄弟がどういう境遇に生まれどんな人生を過ごしてきたか知っている春樹には納得できないこともないが、余りにも病的過ぎる。「朔は僕がいなかったら今この世界にいなかったんだよ！？なのに、助けてやった僕を軽視して、」

「それは陸にも言えることだろう、陸だって朔がいなかったら、」

「煩いっ・・・・・・！！」

ビュンツと飛んできたものを、春樹は慌てて避けた。反応がもう一步遅れていたら、重い広辞苑が鼻っ面に激突していたに違いない。

朔によって使い込まれた広辞苑は、哀れな事にドアに思い切り激突してドンツと床に落ちた。

「陸、」

「僕が朔と同じ！？ふざけるなよ、僕は朔なんか居なくなっただって平気なんだっ・・・・・・！！」

強がりだな、と春樹は思う。陸は認めたくないのだろう。

「分かった、分かったから物を投げるな」

「その顔は分かってない!!」

「陸!!」

鉄まで投げてこようとしたのにはさすがに慌てた。春樹は陸の手首を掴んで止めさせる。

「危ないから止めるって!!」

「放せっ!!」

あつさり手を振り払い、陸は椅子から立ち上がる。

「おい、何処に行くんだ」

「朔のどこだよ、気配だけで何処にいるかは分かるもの」

「行つてどうするんだ」

嫌な予感がする。陸が本気を出せば人間なんて木っ端微塵である。

朔をかくまっている人間が危ない、というかそれ自体はどうでも良いが、陸が一般人を手にかければ“上”が煩い。

「……決まってるじゃない。朔を連れ返すんだよ、僕のところだね」

狂的な眼光に、春樹は思わず息を呑む。陸の肩を掴む。

「待て!!」

何とかして止めようとする。だが次の瞬間、陸の鋭い蹴りが春樹の腹部にマトモに入った。

「がっ……!」

「あんたたちだって朔を野放しにしとくわけにはいかないんでしょ？ お偉いさんたちが動かないから僕が先行した……そういうことで良いじゃない」

まだ肩から手を放さない春樹の頬を殴りつける。堪らず膝を折る春樹の脳天に、

「お休み」

強烈な踵落としが命中する。春樹はなす術なく昏倒する。

陸の目に一瞬後悔の色が浮かぶが、

(……待っててね、朔。すぐに会えるから……すぐ、気持ちよくしてあげるからね)

朔を、弟を求める気持ちの方が強い。

陸は薄っすらと微笑み、部屋を後にする。朔を取り戻すため。
朔を、絶望に突き落とすため。

14、陸の決意と迫る暗雲（後書き）

次は恐らく陸と朔が再会します・・・すると思います。良ければ次回もお楽しみに♪

15、外出（前書き）

ここは繋ぎの意味合いが強いです。

15、外出

さて、どうしたもんか……と俺は朔がこもったままの布団を見る。今日が休みで良かったかも、と思う。だが鳴海の見舞いに行きたいし、ずっと家にいて朔を見守っている訳にはいかない。かといってこのまま放っておくのも、いかなものかと思う。

「朔、」

「……何、」

掠れた小さな声で、朔が俺の呼び掛けに答える。

「……お前も、鳴海の見舞いに来るか？」

それが良案に思えた。鳴海がこそつ、と顔を覗かせる。蒼白な顔が俺を見つめる。こもる不信心。

「……僕も？」

「このまま部屋にこもってても、兄貴の影に怯えることに代わりはないだろ？それに……少しでも鳴海に悪いと思ってるなら、あいつに謝って欲しいんだが」

「……」

朔の瞳が惑う。外出が怖いであろうことは想像に難くない。

「……」

「昨日だって変な奴等が家に入って来て殺されそうになったんだから、何処に居たって一緒だろ」

電話の感じや鳴海をいとも簡単に殺そうとしたことから、朔の兄貴は人命を軽々しく考えているのは間違いない。

「でも、僕のせいで他の人も巻き添えに遭ったら嫌だ……から、」
徐々に小さくなる声音。だが外に出たいという気持ちはあるのか、ちらりと窓の方に目を遣る。

「じゃあずつとここにこもって、いつ来るか分からない奴に怯えたままで居るのか？」

「だって、」

朔は言葉を続けられないのか、くちごもる。出るか、出ないか。葛藤が痛いほどに伝わって来る。

朔の気持ちも分からないでもない。朔が外出し外で襲撃された場合と、家にいて襲撃された場合では危害を加えられる人間が多いのは外出の際に違いない。朔はそのことが不安なのだろう。結局襲われるのなら自分一人の方が絶対に良い。普通の人間ならそう思うのだろう。

「……分かった。無理にとは言わないから。朔の好きにすれば良いさ」

とりあえず朝飯だ。俺は台所に立ち、食パンを取り出す。

「とりあえず飯作るから。ちゃんと喰えよ」

「……うん」

蚊の鳴くような声で、朔は頷いた。

食パンとハムエッグという簡単な朝食を摂り、俺は鳴海の見舞いに行く支度を整えていた。

その俺の視界の中では、昨日とは打って変わって食の全く進まない朔がいて、沈鬱そうな顔で皿の中の卵を眺めていた。気持ち悪いのか、口元を押さえている姿は半病人のようだ。

「朔？吐きそうか？」

朔は力なく首を左右に振る。

「じゃあ俺そろそろ出るから。一応鍵はかけていくけど、」

あまりあてに出来ないだろうな、という言葉は飲み込んでおく。これ以上朔を脅かす必要もないだろう。

「……」

朔からの応えはなく、俺は軽く息をついて立ち上がる。携帯と財布と、鍵と、

「ま、待って」

囁くような声音で、朔が出て行こうとする俺を呼び止める。

「何」

「・・・や、っぱり、行く」

「え？」

「行って、ちゃんと鳴海さんに謝る、鳴海さんが死にそうになったの、僕のせいだから」

鳴海が死にそうになっているのは朔のせいではないと先に否定するべきか。しかし俺が幾ら否定したところで朔がそう思い込んでいる以上どうしようもない。

「大丈夫か？」

朔はためらいがちに頷き、

「きつと・・・、その、斗賀野さんといれば恐くない、から」

途切れ途切れなそんな言葉を吐き出した。

まあ要するにあれだ、俺を頼ってくれてるってことだな。

「遠まわしな告白みたいだな、」

「え？」

「・・・何でもない。じゃあ外に出られる格好に着替えないと」

しかし俺の服は朔にはぶかつてでかすぎる。かといって小さいサイズの服なんかないし。

いや、待てよ？

俺はふと思いついてクローゼットを開けた。二つあるうち小さい方の箆笥に確か、

「お、あつたあつた」

以前鳴海が泊まりに来て忘れていった服をまだ返しそびれていた。服を忘れるなんて鳴海も意外に忘れっぽいなあと思ったが、返し忘れたままの俺も俺である。

「これ、鳴海のだから丁度良いと思う」

「・・・鳴海さんの」

受け取った朔はえもいわれぬ顔をしたが、着替えるために立ち上がった。

外へ出た瞬間に、朔の体が明らかに強張ったのを俺は感じ取った。

「・・・っ、」

一体何を思い出して、外に何を見ているのか。俺には計り知れない。ただ知っているのは、刃物で傷付けられた裸体を毛布で包んで死んだように倒れている姿だ。

「朔、やっぱり、」

朔はぶるぶると首を左右に振る。

「大丈夫・・・斗賀野さんが、いるから」

「・・・タクシーの方が良いな、」

バスや電車など不特定多数の人間が使う公共交通機関は使わない方が良いだろう。

俺は小さく震える朔の腕を取り、大通りに出る。じゃないとタクシーは捕まらない。

「・・・」

朔は何も言わない。鳴海の服を着て、俺に腕を引かれるままに足を運ぶ。

朔を医者に診せるために病院に向かっているような気がして、俺は変な気持ちになる。

タクシーが見え、俺は手を上げる。運転手は穏やかそうなおじさん

で、笑顔でドアを開けてくれる。タクシー運転手も色々いるものだ。「そっちの子、具合でも悪いの？」

よほど朔は酷い顔をしているのか、運転手さんがバックミラー越しに朔の様子を見ながら声を掛けてくる。気遣いは嬉しいが、今は無用の長物だったりする。

朔は顔を見られたくないらしく、俺の胸に顔を預けてくる。

「大丈夫です。人見知り……の酷い版、かな」

「大丈夫なら良いんだけどね」

運転手さんはそう言って運転に集中する。

「……朔。もし気分悪くなったら、直に言っただぞ」

うんうん、と声もなく何度も頷く。やっぱり来い、なんて言っんじやなかったのかも知れない。

鳴海がああなったのは自分のせいだと思っている朔にああ言えば、外へ出るしなくなるのは理解していたはずなのに。

朔は俺を“策士”と銘打った。そうなのかも知れない。俺はきっと打算的な人間なのだろう。

「着きましたよ」

病院のタクシー乗り場で俺は朔を引きずるようにして車を降りた。運賃を支払い、

「朔、頼むからちゃんと自分の力で立ってくれ」

「あ、ご、ごめんなさい、」

そっと朔から手を放すと、どうにか朔は自分の力だけで立ってくれた。

「この病院は総合病院だから、特に人が多い。人に酔ったら、必ずすぐに言えよ。無理だけは、するな」

朔は俺の気迫に押されたのか、目を丸くして頷く。それを確認し、俺は朔に付いてくるように言い病院の自動ドアをくぐった。

15、外出（後書き）

朔は勇気を出し、“俺”と一緒に鳴海が入院する病院にやってきました。これからどうなるのでしょうか。

16、強襲（前書き）

朔は笙汰とともに鳴海のお見舞いに来ましたが・・・。

16、強襲

病院は早くも賑わいを見せていた。病院の朝は早いのだろう。

「行くぞ、朔」

人の多さに戸惑っている朔の腕を取り、俺は昨日鳴海が収容されていたICUへ向かった。

「おや、斗賀野君、」

章介さんが俺の姿に気付いて、座っていた長いすから立ち上がる。

おばさんは疲れたのだろう、背もたれに背を預けて深い寝息を立てていた。

「来てくれたのか、ありがとう」

「鳴海は？」

鳴海はまだICUの中のベッドで眠っている。しかし顔色が昨日見たときよりも良くなっている。

「まだ入ってるけど、午後から一般病室に移れるそうだ。患者さんが多くて個室になるそうだけど、ヤマを越えて生きてくれているだけで私も妻も満足だ」

そう言つてガラス越しに鳴海を見つめる章介さんの瞳は優しい。実の息子を見ているかのようなうだ。

「……おや、その子は？」

章介さんが俺の後ろに隠れるようにして佇む朔に気付いた。朔がビクツと体を震わせる。

だがここで怯えられるようでは、先が思いやられる。

「朔。ちゃんと挨拶して」

俺は半ば無理矢理に朔と体の位置を入れ替えると、章介さんの前に立たせた。章介さんの不思議そうな目が朔を見下ろす。

見知らぬ相手の矢面に晒された朔はなかなか顔を上げることが出来ずにいたが、俺は一切の助け舟を出す気はなかった。薄情だ、冷淡だ、と幾ら他人に罵られようがこのスタンスは変えない。俺たちの

間に奇妙な沈黙が流れ、先に気まずさに音を上げそうになったのは章介さんだった。だがそんな彼が声を発する前に、朔が名乗りを上げた。

「く、来栖・・・朔、です！ よろしくお願いしますっ」

今にも裏返りそうな声。だが俺は笑わないし、章介さんは更にそう。章介さんは一生懸命な人間には優しいのだ。

「初めまして。和晃のおじの鳴海章介です。君は斗賀野君のお友達？」

「あ、ぼ、僕は」

朔が口籠もるが、当然だろう。真逆自分の兄が鳴海を殺そうとしたので、その謝罪に來ました、などとは言えないだろう。

「俺の親戚です。俺の友人が入院してるって言ったらお見舞いに行くって聞かなくて」

全くの嘘ではないが、殆どが嘘だ。章介さんに嘘を言うことは、何故か酷く気が引けるが、仕方ない。

「そうか・・・ありがとう、和晃もきつと喜ぶ」

その言葉はどれほど朔の心を抉ったのだろう。そつと朔の顔色を伺うと、白い頬を強張らせていた。章介さんが目敏くそのことに気付いた。

「顔色が悪いね。大丈夫かい？」

俺にはなく、朔に直接問い掛ける。朔は何度も首を縦に振って、それを返事に変えた。俺は軽く朔をフォローしてやる。

「多分疲れてるんだと思います。な？朔」

「はっ、はい……っ」

「そうか。そこまでして和晃のお見舞いに来てくれたんだね。有難う」

「べ、別に、そんなに、」

「鳴海は、あれから話したんですか？」

「いや。でもたまに目を開けて、先生の声には反応するみたいなんだ」

「そう……ですか」

とりあえず一命を取り留めたのは確定のようだ。

「一般病室に戻れるのは午後から、なんですね？」

「ああ」

午後、と呼べる時間帯までまだまだ時間はある。このまま病院で待ち続ける……という選択肢もあるにはあるだろうが……。

俺は横に突っ立って鳴海の様子を眺める朔の横顔を盗み見る。

今にも倒れそうな蒼白な顔。章介さんも朔の様子が何かおかしいと感じているのか、気遣わしげな視線を変えない。

余計な心労を章介さんにかけてそうで、居心地が悪い。

「章介さん、」

「ん？」

「昼前にまた来ます」

「分かった。よろしく頼むよ」

俺は章介さんに礼をすると、朔の手を引いてその場を離れる。

「と、斗賀野さん………?」

「お前、顔色悪すぎ。見舞い客が患者になるとか悪い冗談は論外だ」
一度外に出た方がいい。俺はそう考えて朔の手を引いたまま、外への道を急ぐ。

「と、斗賀野さん、痛い、一人で歩けるから放してっ！」

朔の大声が響いて、院内の人々の目が俺たちに一斉に向けられる。

俺は彼らに何でもありませんから、と愛想なく言い放ちながら兎に角歩く。

外来は早くも多くの人でごった返している。

館内放送に、子どもの喧しい泣き声・わめき声や外来患者の歓談する声にと院内は騒がしい。

俺はそんな中を突っ切り、朔とともに外へ出た。

「無理矢理引っ張ったりして悪かったな、」

「………」

朔はよほど痛かったのか、目の端に涙すら浮かべていた。

「いえ、」

「気分はどうだ」

「・・・正直、しんどいです」

「だろうな、」

医療に門外漢な奴でも分かりそうなほどに朔の顔色は悪く、具合がよろしくないの是一目瞭然だ。

「病院の中にある売店で飲み物買って来るから、此处で待ってる」
俺が朔を座らせたのは、病院の敷地のすぐ外にあるバス停のベンチだった。

他にもバス待ちの人がいたが、時間の関係か数は疎らだ。

「バスが来てもそ知らぬフリしてれば良いし、誰かが話し掛けても無視してたらいい。ちゃんと此处で待ってるよ？」

朔の目に一瞬心細そうな色が浮かんだが、朔はその目をすぐに俺から逸らして俯いた。長い前髪が目鼻を隠す。

「うん。分かった」

朔が頷いたのを確認してから、俺は病院に取って返した。後に自分のこの行動を酷く悔やむことになることなど、全く予想しないままに。

鳴海さんが一命を取り留めて嬉しい筈。なのに、僕の心は全く晴れない。

なんなんだろう、酷く嫌な予感がする。

斗賀野さんは飲み物を買って来るからと言って、病院の中に戻って

しまった。

飲み物なんかどうでも良いから、兎に角傍にいて欲しかった。変な意味ではなくて、本当に一人にいるということが恐かったんだ。

「・・・・・・・・・・」

道路の縁だから、車の音と排気ガスが凄い。こんな道路の傍に立つ病院に入院しても大丈夫なのだろうか。空気が汚いとは思わないのだろうか。

「斗賀野さん、早く戻ってきて、」

嫌な予感がヒシヒシと僕の頭と心を締め付ける。

僕は顔を上げる。車と人が道路を引つ切り無しに行き交う。

憧れていた“外”なのに、居心地が悪すぎてどうしようもない。

でも、それでも“あそこ”に戻りたくない想いに変わりはない。

・・・・・・・・そんなことを取りとめもなく考えていると、僕の横に誰かが座った。斗賀野さんでないことは、横目で見ただけで分かる男の人であることに間違いはなさそうだけど、斗賀野さんより小柄で比べるべくもない。

「トガノ、っていうんだ？　どういう字、書くの？」

楽しげに発された言葉に、ぞくつと皮膚が粟立った。

この威圧感。この声。

僕は一瞬にして呼吸出来なくなった。

「・・・・・・・・この僕が聞いているんだ。応えろよ、クソツたれが」
「に、さ、」

言葉は、詰まった咽のせいで上手く出せずにいる。

「ふふ」

楽しげな笑い声が僕の鼓膜を刺す。

腕を掴まれ、グツと握り締められる。

「い、痛っ、」

「大人しく僕に付いて来い・・・・・・・・・・」

嫌だ、助けて斗賀野さん、とが、

「・・・・・・・・・・はあ」

呆れたように、兄さんが溜息をつき、

「・・・・・・・・!!」

町の往来にも関わらず、咽元にナイフを突きつけてきた。でもナイフを握った手は長い袖で隠されていて、傍目では僕がナイフを突き付けられていることなど分からないだろう。

「その咽搔つ切つても良いんだよ？僕に朔の可愛い悲鳴を聞かせてくれるの？」

「・・・・・・・・や、嫌だ、兄さん・・・・放して、」

「分かつてるんでしょ？悪いのは朔だつて」

「嫌だ、いや・・・・・・・・、」

斗賀野さん、助けて、

「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿朔」

兄さんの我慢がついに限界に達したのだと、その言葉で僕はありありと悟った。

「僕を苛つかせたこと、後悔すると良いよ」

ちくつと、小さな痛みが首筋に走り、兄さんが一人ではないことに今気付いた。

「・・・・・・・・つ、」

全身がいきなりカツと熱くなった瞬間、視界がぐらりと揺れた。目の前がぐらつく。

『君に“自由”をあげようか？』

自由なんて、僕には・・・・・・・・・・

絶対に手に入らない。そんなことずつと、分かつてた筈なのに。

「斗賀野さん、たす・・・・・・・・け、て」

助けを願う資格なんてないって分かつてる筈なのに、僕は斗賀野さんを呼んでいた。

「朔は、僕だけのものだ」

兄さんの楽しげな声を最後に、僕の意識は闇の中に沈んだ。

16、強襲（後書き）

朔捕まってしまうました・・・というより兄貴である陸の執念が恐ろしい・・・私がそういう風にしたんですけど・・・。

17、死への序曲と欠陥再認識（前書き）

この章は少しBL要素入ってる・・・かも知れませんが。手緩いので、大したことないと思います。そしてやっぱり朔は可哀想な子です。暴力はいけませんね・・・。

17、死への序曲と欠陥再認識

俺が飲み物を買って表に戻ったときには朔の姿がベンチからなくなっていた。

「・・・・・・朔？」

動くな、というようなことを言っておいたのに、一体何処に行きやがった、と俺は思いながらベンチに近付き、

「？」

その上に四つ折りになった紙に気付いた。風で飛んでしまわないようにするために、ご丁寧に釘にも錘代わりの石が載せてある。誰も触れていないことを不審に思いながら、俺は紙を手にとった。朔に係るものだとい何時の間にか思い込んでいることに、俺はこのとき気付いていなかった。

俺は慌てず騒がず（何かの標語みたいだ、）、紙を開いた。そして目を見開く羽目になったのは言うまでもない。

そこには黒の油性ペンで、

《朔は返してもらってからね》

と悪筆で書かれてあった。

「朔、」

朔の身に何が起こったのか、これで予想できるというものだ。

そう、朔は連れて行かれたのだ・・朔の兄貴だという奴に。いや、連れ戻された、というのが正しいのかも知れない。

だが、どちらにしろ無理矢理なのは同じだろう。朔は兄貴に心底怯えていたのだ。そんなあいつが素直に兄貴の元に帰ろうとは思えない。

やっぱり朔を一人にするんじゃないかった、と俺は臍を噛む。

俺は何を聞いて何を見ていた。朔は常に狙われているのだと知っていた筈なのに。

「何処行った、」

俺は紙を八つ裂きにしながら、周囲を見回す。当然の如く朔の姿は何処にもない。

既に周囲からは離れたと見て間違いないだろう。

どうする、走り回って探すか。俺がそう考え始めたときだった。

「やっぱり笙汰だ」

知った声に振り向くと、宝生雅がいた。いつものようにスウェット姿で、気だるそうな目で俺を見ている。

「宝生」

「何だ、変な顔して……あ、そう言えばさあ、」

「何だ」

またいつもの無駄話か、と俺が苛付き始めたとき、

「俺あいつ見たよ。笙汰の知り合いとかいう奴」

「！？」

俺は思わず宝生の肩をガツと掴んでいた。普段の俺からは想像出来ないのであろふ必死さが伝わったのか、宝生がギョツと目を見開く。

「笙汰？」

「何処だ、何処で見た！？誰かと一緒だったか！？」

俺の気迫に呑まれた宝生は目を白黒させていたが、どもりながらも応えてくれる。

「ほら、道路の向こうに“奈留木邸”ってあるだろ？そこで、」

「分かった。サンキュな！」

それだけ聞ければ十分だった。まだそこから離れていないことを願いつつ、俺は駆け出していた。

「お、おい笙汰一体どうしたんだよ！？」

宝生の呼びかけは、あっさり無視した。

「……ん、」

「朔、起きた？」

「！」

朔は目を見開いて、目の前に広がる兄の笑顔を見つめる。唇を近づけてこようとすると兄、陸を突き放すために手を前に出そうとするが、それが出来ないことに気付いた。何故なら自分の両手は後ろに回されてロープか何か紐状のもので縛られていたからだ。

「ん、んっ……！」

朔が抵抗出来ないのを良いことに、陸は弟である朔に深い口付けをする。

「っ、め、めて……」

「トガノさんとも、こういうことしたの？」

唇が離されると同時に、そんなことを訊かれる。朔は涙を浮かべながら、必死に首を左右に振る。

「して、ない。あの人はこんなことしないっ……！！」

「生意気」

不機嫌そうに呟き、陸はバシッツと音を立てて朔の頬を思いつきり平手打ちした。

「……っ！」

「お前はただ僕の言うことに頷いていけば良いんだよ。口答えするな」

朔の人権を頭から無視して、陸が言い放つ。

「そんな、」

「お前は僕の“玩具”なんだから」

耳元でそつと囁かれ、背筋を悪寒が這い上がる。逃げ出さたくて身を擦つても、縛られた腕はビクともしない。それに陸が恐くて、どうしようもない。

陸が、恐怖に硬直する朔のシャツの下に手を入れてくる。

「やだ、止めてっ……」

「変な朔。前は僕にこうされること、凄く好きだったじゃない。あれは、嘘だったの？」

「す、好きじゃない！兄さんが、恐くて、」

抵抗できなかったただけだ、と続けようとした唇にまた口付けをされ言葉を継げなくなる。

嫌悪感に吐き気がした。

聞こえはしないと分かっているのに、心のなかで必死に斗賀野という青年に助けを求める。

「ほら、反応してる」

「っ」

涙が、頬を伝う。分かっていたのに。この兄からはどうしたって逃れられない。自分には“自由”などないのだと。分かっていた・・・
・・ 筈なのに。

誰も、助けてはくれないのだと、分かっていた筈なのに。

どうしてこんなに、

「朔！！」

・・・ 第三者の声に、朔の前を触ろうとしていた陸の手がぴくりと止まった。

でもその顔に浮かぶには、不遜な笑み。楽しみを邪魔された時の苛立ちは露ほども見えなかった。

「斗賀野、さ、」

どうやらまだ病院から遠く離れていたわけではなかったらしい。としたら此処は何処なのだろう、と朔は今更そんなことを思う。

居る場所は薄暗くて、様子が分からない。ただ無風なのと物音が殆どしないことから、屋内だと言うことは分かる。

「実際に会うのは初めて、かな」

朔から手を離して立ち上がりながら、陸は第三者・・・斗賀野笙汰と対峙する。

（ふうん、なかなか格好良いね。頼りがいもありそうだし、朔が好みそうなタイプだ）

そんなことを考えながら、陸は自分を睨んでくる斗賀野笙汰に向けて、場違いなくらいににこやかな笑みを送った。

こいつが鳴海を殺そうとした。こいつが朔に何らかのトラウマを植え付ける行為をしている。

それでも俺は冷静になろうと努めた。それほど目の前も子どもからは禍禍しい気配を感じた。恐怖は感じないが、何の構えもなく近付いてはいけない相手なのだろうことは伝わって来る。

「……初めまして。トガノさん。朔の兄である来栖陸です。このたびは、」

そう言つて、蹲る朔の前髪を引つつかんで無理やり立たせる。

朔の顔が痛みに歪む。

「……っあ、」

「うちの愚弟がお世話になったようで、感謝します」

にこにこ笑みを浮かべながら、朔を傷つけることに何の抵抗も感じないようだ。あまつさえ苦痛に歪む朔の顔を観察するように見つめだす始末。

「朔とはもう寝たの？」

「………は？」

予想外の質問がふつくらした唇から発され、状況も忘れて俺は頓狂な声を出してしまった。早く朔を引き離してやらなければならぬのに。

「だからあ、朔とはもう寝たのかって訊いてるの」

返事がないことに苛立ったのか、陸が全く・・・とぶつぶつ呟く。

「寝た？」

「あ、もしかしてまだ？朔は良いよ？美味しいよ」

全く意味不明だが、寝る、というのがただの睡眠の意味ではないの
だろうとは分かった。つまり、

「お前、実の弟のセックスしてるのか？」

「？変？」

そう言いながら、陸は朔の首筋を噛んだ。吸血鬼か、と俺は眉を顰める。

・・・そんなことを考えている場合じゃない。早く朔を助けないと。

首筋を噛まれた朔は、全く気持ちよさそうじゃない。苦しげに眉根を寄せ、俺を必死に見つめている。助けて、と無言で訴えられたと感じたのは、俺の錯覚だろうか。俺は一步を踏み出す。ガラスの破片でも踏んでしまったらしく、足元がじやりと音を立てる。

「おっと、朔は渡さないよ」

その言葉と同時に、何者かの気配が俺の背後で発生した。

「！」

俺は勘だけを頼りに、咄嗟に横に転がった。コンマ五秒くらいの差で、俺の頭のあった場所をびゅっと何かが音を立てて振り下ろされていた。

「斗賀野さん・・・んうっ・・・！」

朔の呻き声に顔を上げれば、後ろに回った陸に口を押さえられた朔の姿があった。

「朔のことは諦めて早く日常に戻ったらどうですか？朔は今までどおり僕が可愛がりますから」

俺を殴ろうとした奴の姿はない。どうやらどこかに隠れたらしい。存在までが消えていないことは、俺に向けられたままの殺気からも分かる。

陸が命じて初めて俺を襲うように襲われているのかも知れない。

「お前の言う可愛がるっていうのは、朔をいじめることか？」

「・・・苛める？失礼な人だね。朔、あの人に僕のことどういう風に説明したのかな？」

陸の口調に険が交じる。

朔の瞳から新たな涙が零れ落ちる。

その顔が鳴海と重なり、俺は思わず拳を握り締める。どうやら鳴海
の存在は俺の中でかなり大きいらしい。

「おい、お前」

陸の注意が俺に戻る。

「お前じゃない。僕の名前は来栖陸、だよ」

「そんなことどうでも良い」

自分の名前をそんなこと呼ばわりされた陸は、眉間に深い皺を刻んで俺を睨みつけて来る。

「そんなこと？お前、僕の名前をそんなことって言ったな？！」

逆上し、口を覆っていた手を朔の首に回しグツと力を込める。朔が呻き声を上げ、目を白黒させる。

「・・・朔もトガノさんも、どうも僕を怒らせたみたいだね？」
顔を俯かせるから、陸の顔が見えなくなる。

「もしそうだったらどうする？」

「・・・こうするんだよつ！！」

いきなり怒声を張り上げたかと思うと、陸はいきなり朔の頬を殴りつけた。悲鳴を上げることも出来ず、朔の体は無抵抗のままガラスの破片が散らばった床に倒れこむ。

「朔っ・・・！！」

俺が朔に近づくより、当然陸が次の行動に移る方が早かった。

陸は残虐な笑みを浮かべながら、どうにか起き上がろうとしている朔の脇腹を爪先で蹴り付ける。

「んっ、ぐ・・・！！」

「どうしたの、いつもみたいに可愛い声で鳴いてみてよ？トガノさんに聞かせてあげたらどう？」

頭を上から勢いよく床に叩きつけた拍子に、ゴンツという物々しい音が響く。

「止める！！」

俺は陸に肉迫し、その細い体を突き飛ばす。陸は抵抗一つせず、後ろに下がった。大したダメージは受けていないようだが、俺を攻撃してきそうな気配もない。

「おい朔、朔・・・・・・！」

俺はあまり頭を揺らさぬように注意しながら、朔を腕に抱えて揺する。

朔の鼻からは鼻血が出ており、床のガラス片で切ったのだろっ、頬や目の下に赤い裂傷^{れっしょう}が走っていた。

「朔！！」

ビクツと腕の中の体が震え、瞼が震えた。

「朔、」

「・・・・・・斗賀野、さん？」

虚ろな瞳が俺を見上げる。途端に、恐怖とは別の意味を持つであろう涙が大きな瞳から零れ落ちた。

「斗賀野、さ・・・・こわか、恐かった、」

ボロボロと涙を零す顔はやはり鳴海に重なったままだ。

本物の鳴海も、車に轢かれる直前には恐怖を感じていたのだろうか。俺には感じ取ることの出来ない、“恐怖”という感情を。

「悪かった。一人にして悪かった」

「そんなこと・・・・！斗賀野さん、後ろっ」

「！？」

振り返るより先に、ゴツと後頭部に何かが押し付けられた。

「そんなに死にたいなら、殺してあげるよ。朔の目の前でね」

何の迷いもない、はつきりとした明確な口調。

「兄さん、止めてっ、」

朔の懇願も、涙も陸を止める材料になりはしない。陸は涙を浮かべて叫ぶ弟を見て、にっこりと微笑む。

俺はただそんな兄弟の様子をぼんやり眺めているだけだ。死の危機に瀕しているのに、恐れなど一切ない。やっぱり俺は欠陥があるらしい。

「さようなら、斗賀野笙汰さん」

「止めるおおおおおおおおおおっ……!!」

朔の咽から血が出そうなほどに悲痛な叫びは、銃声によって遮られた。

17、死への序曲と欠陥再認識（後書き）

笙汰危うし！・・・ですが“死への恐怖”はやはり感じていないよう
うで。

18、戻って来た束の間の平穏と内省

「あれ？」

痛みはない。俺は怪訝に思いながら、上体だけを捻って振り返る。

「……………兄さん、」

朔の啞然としたような声。

「何で、何で、邪魔をする！春樹っ！！」

陸の持つ拳銃は俺に突きつけられたままで、火を噴いた形跡はない。だが立ち尽くす陸の脇腹のあたりが燻り、そこに背後から着弾したのだと分かる。平気な顔で立っている、ということはかすただけのようだ。

陸は憎悪に満ちた目で出入口の方を睨み付ける。

「……………陸、帰るぞ、」

そこには俺と同じ年くらいの男がいた。片手に煙の昇る拳銃を構え、しかしその顔は苦痛に歪んでいる。

「邪魔するな！僕は朔を連れ戻しに来たんだ！」

俺の背後にぴったりくっついて噉り泣く朔の体がびくりと震えた、ような気がした。

男はゆったりとした足取りで陸に近付いて行く。

悲しみげな瞳から、俺は目を離せない。

「陸、悪いな」

完全に無防備になった陸の首筋に手刀を叩き込むと、陸は何の抵抗もできないまま男の腕の中に崩れ落ちた。

「は、春樹……………さん、」

朔の体が小刻みに震えている。とするとこいつも朔にとって歓迎すべき奴ではないのか。

「朔」

だが発された声は驚くほど柔らかくて、俺は虚を突かれる。朔の敵ではないのか？と思いかけた俺だったが、

「……………今日は退散するけど、これだけは言っておくよ。朔、お前は“こちら”側の人間だ。その人の側にはいられないよ」という言葉に警戒心を蘇らせる。

「……」

朔が息を詰める。

「そのうちに分かるだろう。自分の居場所が一体何処にあるのか。自分が“どちら”側の存在なのかを」

ギョツ、と朔が俺の服の裾を掴んだ。俺は春樹、と呼ばれた男を見る。朔の保護者なのだろうか。

「あまり睨まないで貰えるかな？」

男は小さく微笑みながらそう言う。

「あんた、誰？鳴海を殺すように陸にけしかけたのは、あんたか？」

「酷い言い掛かりだね。俺はそんなことしないって言ったって、信じてはくれないんだろうね」

「……………朔がすごく怯えてるからな。それにあんたの笑顔、胡散臭い」俺のはつきりした物言いが可笑しかったのか、男は苦笑する。

「朔が標しるべか。朔、随分気に入られたみたいだね」

……………とことんムカつく野郎だな、と俺は思う。気に入るだの、朔を標だの、ムカつく。

「おい、」

男に向けて踏み出し掛けた俺を、朔が腕を掴んで止めた。

「ダメッ、斗賀野さん……………春樹さんに触ったらダメ、」

「？」

どういう意味だ？

俺は朔が何を言いたいのかが分からない。ただ朔が男に脅威を感じ、奴と俺が交差することを恐れているのは分かる。

「朔」

「な、何で、すか？」

「お前を逃がしたのは、シルクハットをかぶった男だったか？」
シルクハット？

今町内で騒がれている不審者もシルクハットをかぶっているのではなかったか。やはり朔はシルクハットと繋がりがあるのだろうか。それに、逃がしたとはどういうことなんだ？俺は二人の様相をじっと伺う。

「どうして……、」

「やはりそうか……。あの野郎、」

小さくひとりごちた男は、また俺に視線を向けてきた。そして諭すような口調で、言う。

「悪いことは言わない。朔をさっさと手放せ。それが君の“平穩”のためだ」

朔が俺から手を放す。俺が男の言葉に素直に頷くとも思っただろうか。

……残念だが、

「断る」

朔が弾かれたように俺を見上げ、男はふうん…と意味深に鼻を鳴らした。

「と、斗賀野さん……どうして？」

「俺も聞きたい。そんなに朔が気に入ったのか？」

気に入るだの何だの、ウザったいな。

「平穩に何の興味もないって言えば良いか？」

正直なところ、俺も何故男の提案を蹴ったのかが分かっていない。だが、傍目から弱り傷付いた人間を放り出すことに少しの抵抗を抱いているのだと思う。

「君は面白い男だ。朔、良いのに拾って貰ったな」朔は見開いた目で俺を見上げたままだ。歳に見合った表情に、俺は頬が緩むのを感じる。

「変な顔」

「なっ、だ、だって、」

「朔がそんな顔するなんてな。陸が見たらそいつに嫉妬しそうだ」男が腕の中の陸を見てそんなことを言う。

「まあ陸のことは俺に任せて、朔はその人に連れ帰って貰え」
意外な言葉だったのだろう、朔の視線が俺から男に流れる。

「え……」

「嫌なのか？」

「ちが……っ、ただ、どうして連れ戻さないのかって、」

「そりゃあお前は“こちら”側の人間だから、いつかは戻ってもら
うさ……でもそれは今じゃない」

俺も朔も男の考えが読み取れず、男を見詰めるだけだ。

「俺には俺の考えがあるってことだよ、朔」

そう言い、男はうつすらと酷薄な笑みをその整った顔に浮かべた。
朔の体がまた緊張に固まる。

「じゃあ朔、暫しのお別れだ。陸のことは任せておけ」
「……」

よいこらせ、という掛け声とともに男は気絶したままの陸を抱き上
げる。所謂“お姫様だっこ”といわれる形で。そして男は俺を見て、
「しばらく朔のこと、頼むね」

知り合いに頼むかのように軽い口調で言い、男はゆっくりと立ち去
っていく。俺たちはただその背を見送るだけだ。

「……………」

ふらっ、と朔の上半体が傾ぎ、俺は慌てて支えてやる。

「朔、」

朔は俺の腕の中でぐったりとする。どうやら極度の緊張と、ようや
くそれから解放されたことのせいで体に疲れが出てしまったようだ。
体が熱く、熱があるな……と直感する。

「訳の分からんことばかりだが、兎に角朔を休ませんとな……………」
流石にさっきの男みたいにお姫様だっこは誰が見ていなくとも気恥
ずかしいので、俺は朔を背負うことにする。

荒い息遣いが背中に感じられ、思わず、

「お疲れさん……………」

という言葉をつき出していた。

まだ意識のない陸を近くに停めていたバンに押し込み、春樹はようやく人心地ついた。

（くそつ、）

拳銃を手にしていた右手はまだ小刻みに震えている。

『そう、お兄ちゃんはあたしを撃つのね？あたしが、お父様とお母様を殺したから』

幻影なのは間違いないのに、バンのフロントガラス越しに死んだ当時のままの“妹”の姿が見える。

春樹は何度か首を左右に振り、目を閉じながら“そんなものは見えない”と何度も念じる。交通事故でも起こそうものならあとが大変になる。それに陸の体を傷付ける訳にはいかないのだ。右手の震えは止まらず、春樹は凝り固まっていた肩から力を抜く。こういう時はあまり止めることを意識しないほうが良い。自然に落ち着くのを待つ。

（……………あまりいいものじゃないな、）

制止のためとは言え、生きたものに凶器を向けることが春樹には苦痛だった。だがあの場で朔だけに向けられていた陸の意識をこちらに向けさせるためにはあれくらいしか方法がなかったように思うのだ。

（……………それに、あの男は、）

朔を拾い、家に匿った。どんな男か色々と想像はしていたが、

（なかなかに興味深い、）

と春樹は思う。

色素の薄い目は何処か望洋としているのに、力がこもると鋭い刃のような光を放つ。だが時に、朔を見る目が優しくなる。まるで弟を見るかのように。

（少し調べてみるか、）

右手の震えは収まってきたようだ。春樹は全てのことを頭の中に押し込め、バンを発車させた。

俺の携帯に章介さんから連絡がかかってきたとき、俺は家にいた。あれから朔を連れて自宅に戻り、布団に寝かせたあと俺はただじっと朔の眠る様子を見ていたからだ。

朔は一切身動きせず眠り続けているか、陸から解放されたからか穏やかな顔付きなのが救いではある。

「もしもし、斗賀野です」

『ああ斗賀野君かい？ 私だ』

「すみません、鳴海、出れたんですか？」

『まだ話は出来てないがね。命の危機はもうないそうだが、事故のショックで精神的に参ってると言われたから……話すのはなかなか難しいそうだ』

章介さんは喜びと悲しみとが混在した口調で俺に言う。

『きつと君がいれくれたら和晃も安心すると思うんだ』

買いかぶりすぎだ、と俺は内心でそう思う。俺は鳴海にとってそこまで大きな存在ではない。鳴海にとっての一番はきつと章介さんたちだ。

両親を事故で一気に喪った鳴海を支えたのは章介さんたちだ。

「いきます……けど鳴海が安心するかどうか」

『安心するさ。……そういえば君といた子だけど、具合はどうだい？』

「……やっぱり気付いてましたか？」

章介さんが電話の向こうで苦笑する。

『あれは緊張も入っていたけど、具合が悪いのだろうとは思ってた』
「・・・・・・気にさせてすみません」

『構わないさ。和晃のことも知ってるみたいだし、あいつのことを心配してくれていることは伝わってきたから』

本当に章介さんは優しい人だと思う。・・・・・・俺とは違って。

「すぐ行けるか分からないんで、鳴海の病室がどこか教えてもらって良いですか？」

章介さんから鳴海の病室を教わって、電話を切った。

「ん、」

帰宅して初めて朔が声を発した。ただの呻き声か。

「朔。朔？」

起きるだろうか、と思いながら声を掛けてみる。すると朔は小さく瞼を震わせて、ゆっくりと目を開いた。亡羊とした瞳が、天井を走査し、そして、俺を見上げた。

「朔？俺が分かるか？」

色を失った唇が戦慄わななき、掠れた声を発する。

「斗賀野、・・・・・・さん、」

「気分はどうだ？・・・・・・最高の訳はないと思うが」

朔は何かを考えるかのように瞳を閉じる。

呼吸は穏やかだが、陸や春樹という男のことを考えてパニックに陥るかも知れない。

だから応えは急がせず、俺はただ朔が話し出すのを待った。

やがて、

「・・・・・・ごめんなさい、」

朔が紡いだ言葉は予想を裏切った。てっきりあの時の心理的な状態について触れてくるかと思っただのに。

「なんで謝るんだ」

「・・・・・・」

「どっちかといえば謝るのは俺のほうだろ。朔を一人にするべきじゃないってというのは考えなくても分かることだったのに」

朔はそんなことない、と蚊の鳴くような声で言う。

「僕が弱いから。兄さんのこと、突っ撥ねる力もないから、」

今になって恐怖が蘇ってきたのか、朔はギュッと強く目を閉じて拳を握り締めた。小さく小刻みに震える体が朔の恐怖の度合いを俺に知らしめる。

「朔、あまり自分を責めるな」

「で、でも、」

「俺は怒ってないから。だから謝る必要はない……そりゃ心配はしたけど、」

ぼろりと零れ落ちた言葉に、俺は自分で驚いた。心配？

「……俺は今自分で“心配”と言ったのか？

他人を心配できる心が、俺にはあるのか？

「じゃあ心配させてごめんなさい、」

「じゃあって何だよじゃあって」

思わず突っ込むと、朔の頬が微かに緩む。

「……そう言えば、兄さんたちは？ここ、斗賀野さんの家だよね、」

そうか、朔は前後状況が理解できていないのか。

俺は朔の精神的負担にならないように、言葉を選んであの時の状況を説明してやった。

「……そんな気遣いがまだ出来るんだな、という軽い驚きとともに。」

19、鳴海の目覚めと別離（前書き）

お久しぶりの投稿です。内容はタイトルから察していただけると。

19、鳴海の目覚めと別離

朔が寝入ってしまったてから、俺は鳴海の見舞いをどうしようかと考えていた。

朔が眠っている間に行っておくか、だがもしかまた俺のいない間に襲撃されたらと思うと今一踏ん切りがつかないでいる。

「……だが俺はまた明日から仕事だし、少なくとも明日俺が仕事から帰るまで朔は一人になる。」

仕事に連れて行く訳にはいかないし、朔には家に居てもらうしかない。

だから今日朔を置いて鳴海の見舞いに行っただとしても、明日のことが今日のことになるだけだ。

でも、

「今日はきつかったからな、」

俺がそばにいて朔が安全かどうか、とか安心かどうかなんて分からないが今日は傍に居た方がいいように思う。

「………なんか飯作ってやるか」

目を覚ましたらすぐさま空腹を訴えるに違いない。俺は自分自身を歳の離れた弟の面倒を見る兄のように感じながら、立ち上がった。

何か良い匂いがするなあ、と朔は浮上しつつある意識の中で思っていた。醤油の香ばしい香りが鼻を擽る。

お腹、すいたなあ………。

卓袱台に料理を盛り付けた皿を置くや否や、朔の方からぐるぐる、という音が響いてきた。

「お目覚めか、朔」

「・・・・・・うん、」

朔は顔を赤らめながら上体を起こし、皿の上の料理を見てぐくりと咽を鳴らした。

現金な奴だな、と俺は苦笑する。

「飯、食べそうか？」

ある意味意地悪な質問だったか。

朔はこくりと頷いて布団から抜け出してきた。

「手え洗って来い。立てるか？」

朔は両手を床について、ゆっくりと立ち上がる。少しふらつくが、大丈夫なようだ。

「タオルはこれ。トイレ行つとくか？」

「ん、大丈夫、」

朔は流しで手を洗った後、卓袱台に戻って来た。顔色も良くなったし、錯乱した様子もない。

「あの、」

座った瞬間、朔がポツリと言葉を溢した。俺はどうしたのかと思う。

「僕、本当にここにいて、良いの……？」

「は？」

「今日、すごく危ない目に遭わせて……、春樹さんにも色々言われて、銃だつて向けられて……ほんとに、ごめんなさい、」

朔の言いたいことは分かったが、言葉がばらばらになっている。

俺はただ朔を見つめる。

「危ないんだよ、僕がいると。斗賀野さんが出ていけっというなら出て行くから。ご飯作ったり、優しい言葉かけてもらったりしたら、此処から離れたくなくなっちゃうから……だから、」

「だから冷たくして欲しいってか？」

「……………」

「お前は此処から出ていきたいのか？そうなら俺がお前にどういう態度を取ろうが出ていけば良い。反対に此処に居たいのなら俺がどういふ態度を取ろうが居たら良い。嫌がるのを無理矢理どうこうしたりしないよ、俺は」

朔は顔を両手で覆って俯く。だが手の下から流れるものに、俺の目は吸い寄せられた。ひくつ、と肩が揺れる。

「早く食え。冷める」

朔が行動を起こしやすいう、俺は朔から離れた。書き物用の机に向かった。朔を背にする形だ。

「要するに好きにしろってこと」

いつも通りの平坦な口調だと自分で思った。

朔は飯を食い終わると、また死んだように眠った。捲れた布団を直してやった後で、俺は汚れた食器を洗う。指先に冷えた水が心地よい。

（鳴海は、）

鳴海は、どうしているだろう。章介さんと、意思の疎通が出来るだろうか。

（でも、今はまだ出来ていなくても）

生きていてくれて良かった、と俺は思った。

食器を洗った後は、書類仕事に入る。

げっ、そう言えば明日新刊出しじゃねえか……早く出ないとな。

俺は文庫・新書本と生活書を兼任している。主は文庫だが、生活書には社員が一切いないため兼任ということになってはいる。なってはいるのだが、生活書はパートのかたがたがしっかりした面子が揃っているんで、俺はあまり口を出していない。……むしろ出すと怒られる。

皆さん良い人ではあるのだが、如何せん気の強いかたがたが集まっているのだ。

そして明日は大手出版社の文庫の新刊発売日。棚整理に品出しに忙しい。あまり売れていない商品の返品もしなければ……。

実際返品処理するのは裏方の人たちの仕事だが、あまり返品の量が多いとあまり良い顔をされない。

……売れないものは仕方ないじゃないか。

「……つくしゅん、」

朔がクシャミをする。寒いのだろうか。

俺は朔に向き直る。穏やかな顔で眠っているから、心なしホツとする。誰かを案じるなど久しぶりの感覚だ。

「さて、仕事片付けちまうか」

俺は一人決意をし、再び机に向き直った。

「・・・・・・・・」

鳴海のおじ、章介は頂垂れたままで甥が目覚めるのを待っていた。起きてくれ、と何度思ったことが。

「頼む、起きてくれ」

どうしてこんなに優しくいい子が殺されそうにならないといけないんだ。

「頼む。頼むから・・・・・・・・」

だが鳴海は目覚めない。

「・・・・・・・・和晃、起きて、くれ」

章介の頬を、何度も涙が伝った。

鳴海が目を覚ました、と連絡が来たのは、午後四時近くだった。

「もしもし、斗賀野ですが」

「と、斗賀野君か!？」

携帯の向こうで、章介さんの焦ったような声が聞こえて来た。

真逆鳴海の容態が急変したのでは、と俺は嫌な想像をしてしまう。だが、

「和晃が、和晃が目を覚ましたんだ!!」

「・・・・・・・・!!」

俺は思わず背筋を伸ばした。

「鳴海が!？」

俺の大声で、眠っていた朔が身動きをした。起きるかもしれない。

「ああ。今から出て来れるかい？和晃が斗賀野君に会いたいそうだ」
鳴海が俺に会いたがつてる？

「・・・・・・分かりました。今からすぐ病院に向かいます」

朔のことが一瞬気にかかったが、鳴海に面会したい気持ちもあった。もし俺が鳴海と対面することで少しでも鳴海の活力になるのであれば、そんなのお安い御用だった。

「ああ。また病院に近くなったら連絡をくれるかい？面会時間外になるから、色々と必要みたいなんだ」

「分かりました。じゃあまた後で」

俺は携帯を切り、朔をゆすつてみた。朔は覚醒が近かったのか、すぐに目を開けた。

「・・・・ん、斗賀野、さん？」

「朔、鳴海が目を覚ました」

「!」

眠そうだった朔の目が見開かれた。両手を使って半身を起こす。

「ほ、本当？」

「今携帯に章介さんから電話があつた。俺はこれから病院に行つて来るけど、・・・・朔はどうする？」

朔は喜びが浮いた顔を、しかしすぐに曇らせた。俄かに体が震えているようだ。

「あ、・・・・僕、は」

脳裡に今日の出来事が巡っているに違いない。拉致された場所にまた行くのだ。並大抵の勇氣がいることは想像できる。だから無理にとは言わなかった。朔本人の判断に任せたい。

朔が縋るような目で俺を見上げてくるが、俺は、

「朔が決める」

とにべもなく言い放った。朔は俯いて、指を弄る。

「僕、は」

「早く決める」

容赦ないことは分かっていたが、俺も鳴海の無事を早くこの目で確認したいから、朔を急かした。

「・・・・・・朔」

「い、行く」

「大丈夫か？」

「本当は、恐い、じつとしてたい。・・・・でも、一人でいるほうがもっと恐い、」

分かった、と俺は頷き、朔に上着を貸してやる。

「前のボタンを閉めとけば中がパジャマでも少々構わんだろ。行くぞ」

朔はおずおずと上着を着込み、こくりと頷いた。

今朝と同じようにタクシーに乗ったが、一度乗ったことでもう慣れたのか、朝のように朔は落ち着きがない、というようなことはなかった。

「着きましたよ」

運賃を払い、降車場で降りると、事前に連絡していたから章介さんが病院の玄関で待っているのを見つける事が出来た。

章介さんは朔の姿を認めると、一瞬心配そうな顔をしたが朔がちゃんと辞儀をするとすぐに鳴海に良く似た柔らかい笑みを浮かべた。
「病院の方には事情をお話してる。手続きも済んでるし、行こう」

俺と朔は二人して頷きながら、章介さんの後に続いて鳴海の病室を目指した。

外科病棟、三階。ナースステーションの前を突っ切り、一番端の病室へ案内される。どうやら鳴海の病室は此処らしい。

「……………今、鳴海は？」

「斗賀野君が来てくれる、と言ったら嬉しそうな顔をしてね。声を出すの、まだ辛いはずなんだけど、じゃあ待つてる……………」

俺はその言葉に思わず痒い気持ちになった。鳴海はそこまで俺を慕ってくれているのか、と思う。こんな“欠陥”だらけの俺を。

「和晃、斗賀野君が来てくださったよ」

開けたドアの向こう、酸素マスクをつけた鳴海の姿があった。

人の気配に気付いたのか、閉じられていた瞳がそっと開いた。まずその瞳は章介さんを捉え、続いてゆっくりと俺の方を見た。

「……………鳴海、」

俺が鳴海の名を呼んだ瞬間、

鳴海の大きな瞳に、ぶわっと涙が膨れ上がった。

「……………っ、ぱい、せん……………ぱい、」

俺は鳴海のひやりとする手をそっと握った。

「ちゃんと生きてたな」

「せ……………ぱい、の声……………したんです、」

酸素マスク越しのくぐもった声でも、俺の耳には不思議とはっきりと届いた。

「俺の？」

微かに頷いて、

「僕に……………死ぬな……………って、声、して……………せん、ぱいに、また会い……………たくて、」

もうあとは言葉にならなかつたらしい。鳴海は目を閉じて、苦しげな嗚咽を零す。

「もう喋らなくて良いから、寝ろ。今は、ちゃんと体を休めて、早く元気になって章介さんたちを安心させてやれ」

鳴海はまた頷くと、再び眠りに落ちた。本調子になるには、まだまだ時間が必要だろう。

俺の声で命を取り留めるなんてな、と俺は眠り続ける鳴海を見下ろしている。

俺なんかの声で、救われる命があつたなんて。

「斗賀野君、腹減つただろう」

章介さんが差し出してくれたサンドイッチを、俺は頭を下げながら受け取る。

「あの、すみません。鳴海の見舞いに来たのに、来た方が休んでしまつて、」

俺は朔が眠っている空きベッドの方を見遣りながら言った。章介さんはもう一つのパイプ椅子に腰を下すと、穏やかに微笑んだ。

「・・・いや、気にしなくて良いよ。どうやら彼も疲れてるようだし、和晃のお見舞いに来てくださった大事なお客様だからね」

「・・・ありがとうございます」

章介さんは本当に人間が出来ていると思う。俺なんかとは違って。

「斗賀野君、何かあつたのかい？」

「・・・え？」

「何だか顔が暗いから・・・キミ、基本的にあまり感情を表に出さないから」

俺は思わず章介さんから顔を逸らす。

「……………和晃のこと、これからも頼むね」

章介さんは意図的なのか、コロコロと話題を変えてくる。

「俺、なんかで良ければ」

自然と口にしてしまった、自分を卑下するような“なんか”という言葉。

「和晃は、キミのこと本当に好いて、本当に慕ってるよ」

「……………そう、ですか」

喜んで良いことの筈なのに、素直に喜べない自分がいる。どうしても。
だろう。

真逆、鳴海を重荷に感じている……………のか？

「私は少し外の空気を吸ってくるよ。キミは？」

「あ……………俺は、鳴海を見てます、」

「そうか。頼むよ」

章介さんは俺に鳴海を託すと、ゆっくりとした動作で病室を出て行った。

「……………」

好いて慕われるほど、俺は鳴海に何かをしてやれているのだろうか。
初めて出会った時、不良に絡まれていた鳴海を助けたからだろうか。
インプリンティングの類ではないのか……………流石にそこまで言う
のは大げさか。

「……………全く、朔の奴。暢気に寝やがって、」

俺は椅子から立ち上がり、朔の眠るベッドに近付いた。

朔は穏やかに呼吸をし、少し笑みを浮かべて眠りに就いている。俺
の部屋よりも病院の方が居心地が良いのだろうか。

「……………ん、むう、」

小さく声を漏らしたが、朔が目覚めそうな雰囲気はない。

……………まあ今日は恐い想いをしたから、ゆっくり休めば良いか。
俺はそう考え、乱れた掛け布団を綺麗に掛けなおしてやる。

「そう言やあ、俺も眠たくなってきたなあ、」

一度そう思うと、本当に眠たくなってくるのが人間というものらしい。

いかんいかん、俺まで寝るわけにはいかない。首を左右に振って、俺は眠気を覚まそうとする。

「・・・せ、ぱい？」

鳴海の口が小さく動いて、俺を呼んだ、気がした。

「鳴海？」

「・・・ださ、い、」

上手く聞き取れないが、口の動きから、“僕は良いから、休んでください”と言う風に言われたのだと思う。

「・・・」

鳴海は口の動きで話そうと思ったらしく、声を出さない。やはり辛いのだろう。

“僕はもう大丈夫です。明日もお仕事ですよ？僕が言えた義理じゃないけど、ゆっくり休んでくださいね”、だろうか。

俺が気を遣われてたら世話ないな、と苦笑する。

「ありがとな、鳴海」

につこりと微笑んで、鳴海は目を閉じた。

顔をそつと撫でてやると、鳴海が気持ち良さそうにした、気がした。

朔はうつすらと目を開けた。開けた瞬間に、溜まっていた涙が頬を流れる。

（僕のせいで。僕のせいで鳴海さんは死にそうになって……斗賀野さんは鳴海さんを思って苦しんで……。僕のせい、僕のせいで皆、皆）

脳裏に響く、兄の冷たい言葉。

『お前の存在は疫病神と同じだ。誰彼構わず、他人を不幸にする』
あの時は、掴まれた腕だけじゃなくて、……心も痛かった。色のない兄の目が怖くて、足が震えた。

『だから、黙って僕の横に居ろ。僕は、朔になら不幸にされても良い』

兄が自分を手元に置きたがっていることは知っている。分かっている。

（でも、凄く怖い……。いつか、いつか兄さんに本当に殺されそうで）

だから逃げた。自力ではないけれど、逃げた。理由は兄さん以外にもあったけれど、一番の理由は、

「……………朔？」

俺が声を掛けると、朔は横にした体をビクッと大きく震わせた。そして涙をこぼし続ける目を、ゆっくりとこちらに向ける。

「と……………がの、さん」

「お前、泣いてるのか？」

近づいても全く俺に気が付かないから、ぐっすり眠りこんでいるものだとばかり思ったのだが。

「……………な、泣いてなんか、」

「泣いてんじゃねえか。思いつきり」

「……！」

朔は俺を振り払うように、バツと掛け布団を顔に被せた。

「朔、」

「何でもない！何でもないから、」

朔があまりにも頑固に言い張るから、俺は肩を竦めてそれ以上の追求を止めた。

「分かった、分かったからデカイ声出すな。鳴海が目覚ます」

「ご、ごめんなさい、」

俺は溜息をつきながら、腕時計を見る。

時間は夜の七時半。

そろそろ出るべきかも知れない。章介さんは家族だから良いにしても、流石に俺までずっと傍にいる訳にはいかない。

「朔、出るぞ。鳴海も落ち着いてるみたいだし、もう大丈夫だろう」
「分かった……」

朔は掛け布団をかぶったまましばらく中でもぞもぞしていたが……恐らく涙を拭っていたのだろう……ようやく起き出した。

「あの、鳴海さんに……挨拶しても、良い？声は、掛けないから起こさないように、するから」

「ああ、良いよ」

朔はぺたぺたとスリッパの音を立てながら、眠る鳴海の横に立った。長めの前髪で隠れ、朔がどんな表情を浮かべて鳴海を見ているのか、俺からの位置では分からない。ただ、小刻みに震える肩が朔の心中を知らしめるような気がした。

「朔」

「………斗賀野さん、」

「何だ？」

「………僕の、所為だね」

唐突に紡がれた言葉に、俺は眉根を寄せながら朔に近付く。朔から何やら不穏な空気が漂ってくる。

「？」

「僕の所為で、鳴海さんはこんなにボロボロになって、僕が、兄さんから逃げ出したから」

震える声。ギュッと握り締められた拳。鳴海から離れない視線。

「………だから言っただろう？朔の所為じゃあ、」

「居たいなら居れば良いって言うてくれたこと、本当に嬉しかった」
朔は俺の言葉を遮り、そんなことを言い出した。

「おい、」

「そんなこと言われたの初めてで、本当に嬉しくて、僕なんかでも居場所があるのかなって、思えて。僕は、それが嬉しくて、」

頼りなく紡がれていく言葉。俺は黙って耳を傾けるしか出来ない。

「……でも、やっぱり無理だ。人をこんなに傷付けてまで、僕が幸せになつて良い訳がないんです」

「……」

「痛いのは嫌だけど、僕のせいで人が傷付くのはもつと嫌だから、だから、」

朔がいきなり俺の方を向き、涙の滲んだ瞳でにっこりと微笑んだ。白い眼帯で覆われた片目は、泣いているのだろうか。

「……僕は、もう斗賀野さんや鳴海さんの近くには居られない。甘えたら、きつともつと傷付けることになるから、そんなの嫌だから」

「朔、」

「ありがとうございます。ご飯、とっても美味しかったです」

その瞬間、朔の拳が俺の腹部に直撃し、俺はあっさりと体勢を崩してひんやりとした床に膝をついた。

「……こんなことする必要なんて、無いんですけど。普通に立ち去ったところで斗賀野さんに引き止めてもらえるわけなんてないんですけど、こうした方が、離れやすいから」

「さ、」

「さようなら、斗賀野さん。もう鳴海さんを傷付けるようなことは、絶対にしません」

俺の意識は徐々に途切れ始めた。

目を閉じる迄に、朔が泣きながら何度もごめんなさいと呟くのを耳にしながら。

20、ナミダ（前書き）

今回はちょっと短めです（汗）

20、ナミダ

「・・・くん、」

誰かの声がする。何と言ってるんだ？

「斗賀野君・・・!!」

「!!」

頬をバシッと叩かれて、俺はその衝撃で目を覚ました。

「良かった、やっと起きた」

章介さんがホッと安堵の溜息をつく。

「え、俺・・・っ、」

ゆっくりと上体を起こすと、腹に鈍い痛みが走った。体もがちがちに強張っている。

「吃驚したよ。病室に戻ってみたら、君は床で伸びてるし、朔君の姿もないし、」

朔の姿がない？

「あの、馬鹿っ・・・!!」

小さく毒づき、俺はベッドから出ようとする。だが章介さんに腕を掴んで止められた。

「斗賀野君、何処に行くんだっ!？」

「・・・決めない、ですけど、朔を迎えに、」

分かっている。朔は自分の意志で俺の前から姿を消した。

意識を失う前の、朔の様子を思い出す。何度もごめんなさいと謝罪をしながら、顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにしていた。

「迎えに、って」

戸惑う章介さんの腕を退けようとしたが、

「・・・い、」

鳴海の声がして、俺は思わず動きを止めた。

「・・・言えば今何時だ？」

「章介さん、今、」

「あ、ああ、朝の五時だよ」

「……道理で周囲が明るい訳だ。」

俺は一体何時間意識を失っていたんだ？ 朔は、何処に行きやがった？ 兄貴やあの春樹とかいう男の元に戻ったのか？

「せ……ぱい」

鳴海の声がまた聞こえた。病室の外に向かっていた爪先を、

「……おはよう、鳴海」

鳴海の眠るベッドの方へと、向けた。

その頃、笙汰を気絶させて鳴海の病室を飛び出した朔は体をぶるりと震わせて眼を覚ました。

場所は児童公園にある一つのベンチ。

朔の目覚めとともに、近くの地面を歩いていた雀がちゅん、と鳴き声を上げて飛び立った。

「……っ、」

微かな眩暈を感じて、朔は俯く。

自分は一体何をやっているんだ、と思う。

何がしたいのか、分からない。

自分には行く場所なんてないのに、どうして笙汰のもとを離れたのか。

彼と居れば当面の衣食住には困らないのに。

（……駄目だ、もう誰も巻き込まないって決めたじゃないか）
鳴海の病室で誓ったことが既に揺らぎ始めている。

朔はギュツと拳を作る。弱い自分が嫌だった。もつと強くなりたい。もつと、もつと。

「・・・・つく、」

もつと強くなりたいと願う程に、何故か泣きたくなくなって朔の瞳からは涙がぼろぼろと零れ出す。

「どうして、泣きたくなんか、ないのに、」

そして頭に浮かぶのは、自分のせいで重傷を負ってしまった鳴海の寝顔と、陸から自分を救ってくれた笙汰の顔。

「斗賀野さん・・・・」

酷く自分勝手だと思う。自分から離れたのに、ものの数時間で寂しくなつて泣いている。

笙汰が迎えに来てくれないだろうかと願っている。期待、している。叶うわけのない願いを、願っている。

「おや、何を泣いているのですか？出来そこないが」

不意に背後から聞こえて来た笑みを含んだ声に、朔はビクツと身を震わせた。

「お久しぶり、ではないですね。朔君」

「・・・・・・」

恐る恐る振り返りかけた朔の首根っこを、ひやりと冷たい手が押し留める。

「振り返る必要はありませんよ。怖いものは見なくて結構です」

「・・・・・・はい」

素直に返事をする、声が小さく笑みを漏らす。

「素直で宜しい。さて・・・何故泣いているのですか？私が折角外の世界に出してあげたというのに、何を悲しむことがあるのです」

「そ、それは、」

「・・・・以前から、この声の持ち主の質問には素直に答えることが多かった。」

何故か素直になってしまふのだ。

だが今度ばかりは素直に言葉に出すことが出来なかった。

「おや、素直な朔君にしては頑なですね？」

手が首根っこから離れる。

ホッと思をついたのも束の間、背中に何かゴリツと押し当てられる感触がして体を強張らせる。

「此処で殺してあげてもいいのですよ？出来そこない君」

「・・・・・・っ、」

「あなたは陸君と違って素直なのが美点なのですから、素直でありなさい。それに私はあなたのいわば恩人です。恩人の問いに応えられないとはどういう所存ですか」

恐い。

陸とは違う意味で恐い。

足元をじわじわとにじり寄り、ゆっくりと体を這い上がってくるよ
うな、

「・・・・・・寂しい、」

「ほう？」

「寂しいんです、」

口にしたら一気だった。

えもいわれぬ感情がこみ上げてきて、朔は声を上げて泣き始めた。

「そうですか、寂しいんですか」

「さび、寂しいっ。・・・・自分から離れたのに、自分から逃げ
てきたのに、なのに、なのに僕はっ・・・・」

「求めてしまう」

朔は何度も頷く。

「僕を探しに来てくれるんじゃないかって、ご飯だって言って僕を
呼びに来てくれるんじゃないかって、そんなわけないのに、願って
る。そうであって欲しいと望んでる」

笙汰は来ない。それは朔が嫌いだとか朔が自分の意志で去ったから、
という理由ではなく、きつと。

朔が鳴海という笙汰にとって大事な後輩を傷付けたから。
たとえ直截的ではなくても。

「来てくれる、とは思えない？」

「無理、無理です。僕は、あの人の大事な人を傷付けたから、溢れる涙は止まることがない。」

朔はただただ泣きつづけた。

いつのまにか背後にあった存在がいなくなっただけでも、ただ一人で泣き続けた。

21、それぞれの想いと朔のピンチ

『えっ、休む？』

急遽休みを貰うため、自分が勤めている本屋が開店するや否や俺は、店に電話を掛けた。

「はい、すみませんが」

電話に出たのは店長だった。歳の割りには出世街道まっしぐらしいが、本人は店を運営する現場主義とのこと。スタッフのことを大事にしてくれる、と慕われている人だ。

『君が休むなんて初めてだね。具合が悪いの？』

「……………」

俺はどう説明して良いものか惑う。正直に、仲のよい後輩が入院していてそれに付き添いたいから……と言って納得して貰えるのだろうか。

『……………何か事情がありそうだね。ちょっと待ってて』

一度保留になり、音楽が流れる。

『ごめん、お待たせ。……今日はラストも多めだし、許可します。

ただし明確な理由のない欠勤は今回だけしか駄目だからね』

「すみません……ありがとうございます」

『あまり無理はしないようにね』

「え？」

『それじゃ、失礼しますね』

「あ、はい」

電話が向こうから切られるのを待つて、俺は今や懐かしくなったピンのダイヤル式電話の受話器を置いた。

「斗賀野くん、本当にいいのかい？」

後ろで俺を見守っていた章介さんが申し訳なさそうに訊いてくる。

「良いですよ。というか、俺が鳴海を診ていたいんです」

俺の存在なんか誰かの生きる糧になれるのなら。

あんなに俺を慕ってくれている鳴海の力になれるのなら。

「そうか……和晃も喜ぶよ」

章介さんが気にしているのは、俺の仕事のことだけではないだろう。

「朔のこと……ですか」

「やっぱり探しに行ったほうがいいんじゃないのかい？」

「良いんですよ。朔が決めたことだから」

そうだ。もともと俺の気紛れから“拾った”だけ。執着する理由なんかないのだから。

朔が俺から離れたいのなら離れば良い。離れたい人間を追う趣味はない。

「そう……君が良いなら構わないよ」

「すみません……気を遣わせてしまって、」

「構わないさ」

章介さんの優しい笑顔とともに、俺はまた鳴海の病室へ向かった。

鳴海は穏やかな寝息を立て続けている。もう本当に大丈夫だろうか、と俺は思う。

まさかまた陸が鳴海を殺しに来る、なんてことはないだろうな。

「俺が、守る、」

「……ん、ばい？」

俺の決意が届いたのか、鳴海が不意に目を開けて俺を呼んだ。

鳴海がゆっくりと指を伸ばしてくるから、俺はそつとその手を取った。

細くて冷たくて、今にも壊れてしまいそうな、ほっそりとした手。……思えばこの指が萎れた花を、再び綺麗に咲き誇らせるこ

とが出来るんだな、と今更ながらに不思議に思った。でも、不思議とそれが不気味だとは思わなかった。

凄い力だと。鳴海にピッタリな力だと思った。

「・・・・・・・・・・？」

俺がじつと手を見ているのが不思議だったのだろう、鳴海が軽く小首を傾げる仕草をした。

「いや、悪い・・・何でもないんだ。・・・気分はどうだ？」

鳴海が掠れた声でもどうにか喋ろうとするから、俺は慌てて、

「口パクで良いから」

と止める。

鳴海がゆつくりと口パクを始める。

『だ・い・ぶ・よ・く・な・り・ま・し・た。そ・れ・に・せ・ん・
ば・い・が・い・る・か・ら、』

「ありがとう、鳴海」

『い・え。・・・そ・う・い・え・ば、さ・く・さ・ん・は？』
「！」

『・・・・・・・・せ・ん・ぱ・い？』

鳴海と朔の顔が不意にダブって、俺は目を何度も瞬かせた。

鳴海がそつと俺の頬を指で撫でた。

『せ・ん・ぱ・い？』

「あ、悪い。朔は、ちょっと散歩だ」

らしくない嘘を吐いた。きつと鳴海にはばれている。そんな気がした。鳴海の黒目がちの瞳が、一瞬哀しげに揺れた・・・・・・・・ように俺には感じられた。

『・・・・・・・・せ・ん・ぱ・い、か・な・し・そ・う』

「鳴海、」

『ど・こ・か・い・た・い・ん・で・す・か・・・・・・・・？』

痛いのはお前の方だろう、と俺は思う。

「・・・・・・・・俺は何処も痛くないから。心配しないで、鳴海は自分が早く元気になることを考えろ」

『で・も』

「……良いから。ほら、喋り疲れたら、休め。俺のことは気になくて良いから」

鳴海は不安そうな眼差しで俺をしばらく見詰めていたが、やがて本当に疲れたように目を閉じた。

「お休み、鳴海」

俺はまた鳴海の額を撫でた。こうすれば少しは痛みや疲れが治まるのではないか。

俺らしくない、非科学的なことを思いながら。

今にも泣きそうな先輩を見て、僕の胸はますます痛くなった。そんな顔しないで、何がそんなに哀しいんですか？

何度もそう訊きたいと思った。でも僕はまだ上手く話せない。……先輩、泣かないで。

泣かないで欲しい。

どうすれば、先輩に笑ってもらえる？僕はそう思いながら、目を閉じた。

「お休み、鳴海」

そう言つて、先輩はまた僕の額をゆつくりと撫でてくれる。それがひどく気持ちよくて。とても、嬉しくて。僕を心配してくれている先輩の気持ちが伝わって来て。僕は哀しげな先輩を案じながらも、やってきた睡魔に勝てず・・・再び眠ってしまった。

兄の姿はまだ見えない。

朔は小さく息を吐き、再びベンチに横になった。風邪でも引いてしまったのか、体が酷くだるい。熱も有るような気がする。

（・・・・・・・・結局僕は一人じゃ何も出来ない。自分から兄さんのもとに行く勇氣なんて無いし、でも、ほかに行く場所もない、）だから朝起きたベンチの上から一歩も動けていない。自分が何をしたいのか、これからどうしたいのかも、全く分からずにいる。ただただ一箇所に座り込み、何か“変化”が起こってくれることを待つだけ。

「・・・っ、けほっけほっ、」

咳が出てきた。まさか本当に風邪を引いてしまったのではあるまいか。

どうしよう、今風邪を引いている場合じゃあ、

「おい、お前ら。見るよあそこ」

まだ若い男の声が、朔の耳朶を打った。だが自分には関係ないだろうと考え、あえて声の方向を見ようとは思わなかった。しかし、

「誰か寝てるぞ」

「ふうん、まだガキだな」

「どうする？結構ああいうのほど金持ってそんな感じすっけど、」
「行ってみつか。弱そうだし」

どうも自分のことが話題に上がっているように思えて仕方ない。朔は恐る恐る目を開いた。

「あ、気付かれた」

朔を、四人の男たちが見下ろしていた。

「・・・・・・っ、」

朔が息を呑むと同時に、男の一人・・・茶髪で耳に小さなピアスを五つも付けている・・・がニタニタ笑いを顔に引っ付けて朔に言った。
「ねえ僕、こんなところで一人で何してるの？」

性別に関係なく大勢に囲まれることに慣れていない朔は、それだけでパニックに陥りかける。

「あ、あの、ぼ・・・僕は、」

「焦っちゃって、かゝわいい」

揶揄するように言われたかと思うと、いきなり腕を掴まれ体を起こされる。

「やつ、なに、」

「あのさあ、俺たち金が無くて困ってんの」
髭を疎らに生やした、強面の男が言う。

「有体に言つとき、お金が欲しいの。で、君に貰おうかって」

かつあげにしては穏当な口調だが、言っていることはむちゃくちゃだ。

朔は男たちに怖れを抱きながらも、必死に首を横に振る。

「それ、どういう意味かな？ 僕？」

「っ、む、無理です・・・僕、お金なんて持ってないんです、」

それだけ言うのがやっとだった。息苦しさに、朔は掴まれていない方の手で自分の心臓のあたりを掴んだ。

「だつてさ、どうする？」

「確かになあ。何も持ってないし、」

「そう言えばさ、この眼帯どうしたの？ めばでも出きてんの？」

仲間の一人が、朔の眼帯に言及してきた。朔は思わずグクツとする（斗賀野さんは何てこと無いみたいだったけど、きっと普通の人たちは、）

眼窩が空っぽであることを知れば、気持ち悪いと言っだろう。

朔を不気味なものを見るような目で見るだろう。

「あ、あの、こ・・・れは、」

体が震える。どうやってこの場を切り抜ければ良いのだろうと朔が必死に考えていると、

「でも血が滲んでる。変えたほうが良いよ」

四人の中で一番かつあげとは縁が無さそうな眼鏡をした優男が、眼帯にそつと触れてきた。

「・・・・・・！」

咄嗟だった。どうして良いか必死に考えていた朔は、思わずその手を払っていた。

「酷いなあ、折角人が心配してあげてるのに、」

眼鏡の男が、グイツと朔の胸倉を捻るように掴んで来た。

「優しくしようと俺ら思ってたのになあ」

ピアスの男が凄んで来る。

「ごめ・・・ごめんなさい、」

彼らの顔が全て陸の顔と重なる。陸四人から責められているような

感覚がして、朔は呼吸をすることすらままなくなってきた。

「みんなどうする？ごめんなさい、だつてさ」

四人が何が面白いのか、一斉に笑い声を立てる。朔は恐怖に体をガクガクと震わせる。

（斗賀野さん、助けて……助けて……！！）

きっと虫のいい話なのだろう。自分から離れていきながら、いざ危険な目に遭ったら彼に助けを求めている。

「ごめんなさい、ごめんなさい……っ」

これはきつと罰なのだ。

鳴海和晃をあんな目に遭わせたことへの、罰なのだ。

「けど金ないってさ」

「……」

眼鏡の男が、朔の服に触れる。金がないかどうか、確認しているのだろう。

「なっ、ない、お金なんて、持っていない、」

「五月蠅い、黙ってる」

冷たい声が聞こえた瞬間、朔の頬に激しい痛みが走っていた。どうやら平手で叩かれたらしい。

「や……め、」

「……やつぱり持っていないみたいだね。どうしようか」

早くどこかに行つて欲しい。

もう自分に構わないで欲しい。

四人の視線が、痛い程に突き刺さる。

そのとき、

「何やってんだ！！」

また別の人間の声がして、朔は再び身を震わせた。

今度は誰だ。また僕を傷付けるのか。

「んだよ、お前」

朔が目をやった先には、

「あ、」

斗賀野笙汰の知り合いの青年が、ずかずかと公園に乗り込んできて、四人を睨みつけた。

「俺はその子の知り合いだよ。知り合いに手え出すな」

笙汰と会話していたときには全く伺えなかった凶悪さがちらりと顔を覗かせる。

名前は、何だったか。

笙汰は彼のことを何と呼んでいた？

「じゃあ、あんたが代わりに金出してくれる？」

「は？なんで俺やこの子が手前みたいなのに金出さないといけねえ訳？阿呆らしい」

青年がどんどん近付いて来る。

「こつち来い」

そう言われ、朔は男の手を払うと慌てて青年の後ろに隠れた。

また守られている・・・そんな想いを抱きながら。

「俺がこいつらを引き付けとくから、その間に朔君は逃げて」
ボソツと囁かれた言葉。

思わず彼の顔を見上げれば、ニツと不敵に微笑まれた。

「俺に任せとけ」

朔は頷くしかない。

「コソコソと何の相談？」

眼鏡の男が言う。

「別に」

そう言った瞬間、青年がいきなり膝を眼鏡の男の腹に叩きつけた。

「っ、」

「不意打ちなんざ卑怯だろ！」

「こんな子を寄って集って囲むのより全然マシだっ！！」

そう怒鳴り返しながら、茫然と立ち尽くす朔に青年が目配せをする。
「！」

逃げるなら今だ、とその目が語っているような気がして朔は申し訳ないと思いながらも脱兎の如く駆け出した。

公園の外に向かつて。
背後から響く、肉を打つ音を聞きながら。

22、逃避と混乱（前書き）

サブタイ、あとから変えるかも・・・・・・・・です（汗）

22、逃避と混乱

「…………どのくらい走っていたのか、距離も時間も分からなくなっていた朔はバツタリと足を止めた。

周囲を見回せば、当然のごとく全く知らない景色が広がりそれが朔の不安を更に際立たせる。

「はっ、はあはあ……………」

ふらついた足取りながら、どうにかこうにか人の邪魔になりそうにない隅っこへ移動し、その場にへたりこむ。朔が迷い込んだのは住宅街のようで、時間の関係もあつてか周囲はひっそりとしていた。

「…………はあ、はあ」

「大丈夫か？」

「！」

耳元でいきなり囁かれ、朔は驚きに文字通り飛び上がった。

その様を、青年が笑う。

「悪い、びつくりした？」

足が速いのか、もう追いついたのだろうか。

朔がドキドキしながら青年の顔を窺うと、彼は悪戯を見つかってしまった子どものような顔になって、

「実は俺も朔君が逃げ出したあと、すぐに逃げたんだよ。だから朔君の本当にちよつと後ろを走ってたんだ。でも朔君って結構足が速いんだね」

「は、はあ」

つまりは朔に絡んできた男たちを一人一人丁寧に倒してきた、というわけではないのだろう。

「…………で、君って笹汰のマンションにいた子だよな？」

「っ！！」

触れられるだろうことは理解していたつもりだったのに、朔は全くと言っていいほど心の準備が出来ていなかった。

朔は青年から目を逸らし、項垂れる。

「その君があんなところで一人、何してたの。笙汰は一緒じゃなかったの？」

「そ、それは」

「……斗賀野さんや鳴海さんをこれ以上傷付けたり悲しませたりするのが嫌なので、逃げてきました。

素直にそう言えばいいのだろうか。

「それは？」

「……」

項垂れたまま、堪えきれなくなつて朔は涙を零した。

「え、ちょ、ちよつと!？」

自分が尋問したせいで泣き出したのかと不安になつたのか、青年が慌てる。

「お、俺、何か拙いこと言つた？」

「ち、違います。そうじゃなくて、違ひんです……」

「……もしかして笙汰に変なことされた？」

その言葉にギョツとし、朔は顔を上げると、慌てて首を左右に振つた。

笙汰に変なことをされただなんて、とんでもない。あの人には感謝してもしきれない。

こんな素性のわからない傷だらけの自分を拾い、衣食住まで面倒を見てもらつて。

「違ひ、違ひんです、」

それしか言えず、朔はまた俯く。

「……斗賀野さんには、とってもよくしてもらつて、」

朔の横で青年が一度だけ溜息をつき、ついで力チャ、という小さな音がした。

「え、」

朔が彼を窺えば、彼は折畳式のシルバーの携帯電話を開いたところだった。ボタンを操作する音がカチカチと響く。

「あ、あの・・・何して、」

「笙汰に電話。君が今俺と一緒にいるって、」

「や、止めて下さい。斗賀野さんには連絡しないで・・・！！」

朔の切羽詰ったような叫びに、青年がギョツとする。

「・・・や、やっぱり笙汰と何かあったんじゃないの？」

「そんなんじゃない、そんなじゃなくて、僕が勝手に、」

「え？」

青年が不思議そうに首を傾げた瞬間、朔の耳に微かに・・・だが青年が持つ携帯からある人物の声が届いた。

『何の用だ、宝生』

どうやら青年は通話のボタンを押してしまっていたらしい。彼も気付いていなかったようで、耳に聞こえて来た声にどう反応すべきなのか惑っている。

『おい、ただの悪戯なら切るぞ・・・俺は忙しいんだから』

斗賀野笙汰が不機嫌さながらの声音で話している。

「笙汰？おはよう」

『・・・おはようじゃねえ。用件は何だ』

青年はちらりと自分を大きな瞳で見上げてくる少年を見て、

「来栖朔君、今俺と一緒にいるんだよ」

「！！」

朔が目を見開いてそれ以上の会話を阻止しようと伸ばしてくる細い腕を軽々と往なしながら、黙ってしまった笙汰に向けて言葉を重ねる。

「朔君ははっきり言ってくれないんだけど、お前ら何かあったの？喧嘩でもした？」

『・・・お前には関係ないだろう。朔は、本当にそこにいるのか？』

「居るよ。不良に絡まれてたのを俺が助けてあげたの」

『！？朔、怪我でもしたのか？』

微かに不安な調子が声に交じるのを青年・・・宝生は敏感に感じ取った。

「いや。それは問題ないけど」

『・・・そうか。なら良い』

「この子、お前の知り合いなんだろう？一人でうろつろさせて大丈夫なのかよ。金も持っていないって言っし、」

「止めて、早く切って、」

よほど朔は笙汰と関わることに抵抗があるのか、か細い声で宝生に電話を切るように嘆願する。宝生が心底怪訝そうな瞳で朔を見る。

「おい、笙汰」

『あ？何だよ』

「お前、この子に何かしたんじゃないんだろうな？」

『は？』

「お前と電話が繋がってるのを、すげえ嫌がってるから」

「っ！」

余計なことを、と朔は思わず宝生を睨む。涙の溜まった、大きくて丸い瞳だから宝生には怖くともなんともないが。

『……………』

「どうする。お前んちに送り届けようか？」

宝生の提案に、朔は妙な気持ちになる。

笙汰は何と言ってくれるだろう。

ああ頼む、か、俺が迎えに行く、か、もしくは。

（きつと、斗賀野さんは……）

期待はするな、と朔は自分に言い聞かせる。

自分から逃げ出したくせに、今更のこのこと戻ることを是とするのか？

「おい、笙汰、」

『…………俺には関係ない』

「！」

宝生もだが、朔も息を呑んだ。体を固くする。

「おい、」

『お前もそいつに下手な情けを掛けるなよ。野垂れ死にしようがどうなるうが、それはそいつが決めたことなんだからな』

「待て、」

『放つとけ。そのほうが朔のために、』

「待てよ笙汰っ！」

いきなり立ち上がり、宝生は携帯に向けて怒鳴った。朔は瞠目して、宝生を見上げる。

「何があつたか知らねえが、笙汰らしくねえぞっ！確かにお前は変わった奴だけど、そんなに冷たいこと言ったりしないだろ！」

「も、もう良いです……もう、大丈夫だから、」

「大丈夫なわけあるかっ！そんなに泣きそうな顔してっ！」

「……………っ、」

宝生は携帯を朔の耳に突き付け、

「喋ろ。何か話すことがあるんだろ」

硬直する朔に告げる。

「話さないと、何も変わらないぞ」

「……………」

電話の向こうも沈黙しているが、回線が切れていないのは分かる。

「あ、あのっ」

何を言えいいのかも纏まっていけないのに、朔は声を上げてしまった。

だが向こうは沈黙したまま。

「と、斗賀野さん、」

『……………どうやって宝生に取り入った？』

聞こえてきた声は、低く冷たかった。

「あ、」

『お前、何がしたいわけ？』

徐々に苛立ちがこもって来る、笙汰の声。

「とが、」

『……怪我は、してないんだな？』

「えっ？」

『痛い所はないんだろ？』

「は、はいっ」

もしかして心配してくれているのだろうか、と朔は嬉しさに鼓動が早くなるのを感じた。

『なら、良い』

途端に素っ気なくなる笙汰。

朔は再び萎縮する。

『宝生がぎゃあぎゃあ喚いてるみたいだが……俺はお前がどうなるうが興味はない』

気持ち良いくらいにハッキリと言われる。

『お前がとった行動は、つまりはそういうことなんだろ？』

笙汰の気を失わせてまで、姿を消した朔。自分の生に口出しをするな。朔はそう言ったのに等しい、と笙汰は言っているのだ。

『……俺は何度もお前のせいじゃないって、言っただよな？信じられなかったんだろ？俺の言葉が』

「ち、違います……斗賀野さんの言葉が信じられなかったんじゃないかって、」

朔が声を震わせながらも必死に否定するが、笙汰は非情な言葉を告げる。

『もう良いよ。朔の好きにしたら良いさ』

「！とがっ」

『じゃ、切るぞ』

「斗賀野さん、待って……っ」

しかし無情にも通話を終えられてしまった。

「斗賀野さん、斗賀野さんっ」

なんて未練がましいのだろう、と朔は溢れる涙を止めることが出来ず、笙汰の名を呼んだ。

（自分から離れたのに、自分から姿を消したのに、突き放されるの

は嫌だなんて、僕は………)

あとからあとから涙が溢れ、止まらない。

携帯を耳に当てたまま、朔は何度も笙汰の名を連呼し続ける。

「朔君、」

宝生が朔の前にしゃがみこみ、そつと頭を撫でた。

「っ、」

「とにかく、俺んちにおいで。ひどい顔だよ」

「で、でも、」

今度は宝生に迷惑が掛かる。朔が首を左右に振ると、

「大丈夫。親、俺のことは放任主義だから」

宝生は戸惑う朔の腕を取ると、そつと立ち上がらせた。

「ね、おいで」

欲しいのは、人の温もり。でも、それに甘えたら必ずその人に迷惑が掛かる。

『お前は必ず人を不幸にする』

兄である陸の呪詛が今も耳から離れない。

「だ、だけど僕といたら、」

確かに宝生は鳴海と違って特別な力はない。だから“異能者”という理由で陸に狙われることはないだろう。だからと言って安全とは限らない。いつ春樹たちが朔を連れ戻しに来るか分からない。宝生という時にそんなことになれば、必ず彼に多大な迷惑を掛けることになる。笙汰や鳴海だけでなく、他の人にまで迷惑を掛けたくない。

「やつぱり、僕は……」

「いいから。腹減ってないか？ご馳走するぞ」

そう言うとき宝生は、朔の返事も聞かずに携帯を手にしてさつさと去ろうとする。朔はどうしたら良いのか、惑う。

(一緒にいったら駄目だ)

絶対に迷惑がかかる。なのに、行きたいという想いもある。

それはきつと、笙汰と縁のある人といれば彼と接点を持ってもらえるから。

（僕は、どうしたら良いの？）

「ほら、行くよ」

その呼び掛けが、決め手になった。

「は、はいっ！」

しつかりと返事をして、朔は慌てて宝生を追った。

これで良かったのか、と俺は閉じた携帯を見下ろしたまま、ずっと考えている。宝生から電話だと気付いたときは無視しようかと思っただのに、何かに惹かれたかのように電話に出ていた。……まさか朔が宝生と一緒にいるなんて。

別に宝生にどうこうされるという心配は持っていないが、偶然の巡り合わせに驚いた。

そして朔が絡まれた、と聞いたときは何かに心臓を鷲掴みにされたような気がした。何故か、動揺している俺がいたのだ。

何でだ？何で自分が動揺しているのか、分からなかった。

「俺は、」

結果的に朔を突き放す形で電話を切ったが、もやもやとした形のな
い支えが……消えない。

本当に、これで良かったのか？

「斗賀野君、ここにいたのか」

「あ、章介さん……」

「和晃の病室にいなかったから、どうしたんだろうと思ってね」

「……………」

「やっぱり、一度家に帰りなさい」

章介さんが、少し強めの口調で言ってくる。

「でも、」

「君が倒れたらあの子が悲しむ。だから、君もちゃんと体を休めて俺は残る、と言おうとしたが章介さんが何処か悲しげな顔をしているのに気付いて開きかけていた口を閉ざした。

「和晃を心配してくれてるのは痛いほど分かるし、有難いとも思うよ。でも、和晃を重荷にして欲しくない」

「！重荷なんか、」

「君はそう思っただけでも、君の顔を見たら思ってしまうよ」

俺は、黙り込む。

鳴海を重荷に思っただけじゃない。

「ちゃんと一眠りして体を休めて、良かったらまた来てくれると和晃も私も嬉しい」

俺は、帰るべきなのかも知れない。俺が居続けることで章介さんの負担になるのなら。

「分かりました……一度帰ります」

「それが良いよ」

俺は章介さんに頷いて、荷物を取りに鳴海の病室に向かった。

温かい。

僕は自分の右手に感じる温かいものに気付いた。何だろうと思い、

僕はゆっくりと目を開いた。

……先輩？

発した筈の声は、先輩には届かない。きつと実際には声になっていないんだろう。そう思うと、少し悲しくなった。

先輩は、俯いて僕の手を握っていた。どんな顔をしてるのか、分からない。

「俺、帰るな」

先輩の言葉が聞こえた瞬間、一抹の寂しさが胸に込み上げて来た。

先輩、帰るの？

嫌だ、と言いたかった。我儘だけど、先輩にそばに居て欲しかった。先輩がそばに居てくれるだけで、安心出来るのに。嬉しい、のに。

「ゆっくり休め」

先輩は僕の手を放すと、椅子から立ち上がった。

先輩、待つて。

「じゃあ、な」

嫌だ、待つて！

「？」

先輩が足を止めて、怪訝そうに僕を……見る。

「鳴海？」

何だろう、心の声が聞こえたのかな。

「鳴海」

先輩の優しい声がして、僕の手をシャツから放させる。それで僕は、自分が咄嗟に先輩のシャツを掴み先輩を引き留めていたことに気付いた。なんだか小さな子どもになったみたいで、僕は恥ずかしくなる。

「どうした」

先輩の声は、優しい。

「い……」

「ん？」

僕の口に耳を近付けて、僕が大きな声を出さなくてもよくしてくれ

る。

「い……や、」

「何がだ？」

優し過ぎて、何故か涙が出て来る。泣きたくなんか、ないのに。

「何泣いてんだよ」

「か……らない、で……」

先輩を困らせたくない、困らせたら駄目だと分かっているのに、僕は我儘になる。

「も……少し、いてくださ……い、」

「鳴海……」

先輩が何かを言いかけた瞬間、ガラリとドアがスライドされる音が響いた。

お義父さん、だろうか。でもカツ、カツ、という音でお義父さんではないと分かる。お義父さんはスニーカーを好み、基本的にスニーカーを履いているから。

「あんだ、」

先輩から優しさが一気に消えた。どうしたんだろう。今入って来たのは、誰なんだろう。それになにより……先輩から優しさが消えたことが、僕は本当に嫌だったんだ。

「なんであんだが、此处に……」

「この子が、鳴海和晃君か？」

「なんであんだが此处に居るって訊いてるんだっ……」

俺は、知らぬ間に怒鳴っていた。鳴海がビクツと体を震わせる。

「君でも怒鳴るんだね」

そいつ……朔の兄である陸を迎えに来た、春樹という男は穏やかな声でそう言った。

「安心して。別に鳴海君を殺しに来た訳ではないから」

「……だったら、」

「君と朔が離れたみたいだから、どうしたんだろうと思ってね」

「……………」

「朔と何があつたんだい？」

「あんたには……関係ないだろ、」

「朔は一応うちの“ペット”だからね……飼い主の私はその動向を逐一把握しておかなければならないんだよ」

「ペット……？」

「おや？その顔は怒ったね？良いのか？大事な大事な後輩の前で、醜い姿を晒しても……」

俺は、拳を握り締めて胸の奥底から浮かび上がってくる、よく分からない感情を抑えた。「朔のことで怒るんだ……ふうん、俺は関係ないみたいな顔してるくせに、何気なくあの子のことが気に入ってたんだ？」

わざとなのか無意識なのか、春樹という男の口調が何故か嫌味らしい。

「あんた、何が言いたい？」

優男風の男をじつと見詰める。男もじつと俺を見返して来る。朔との間に何があつたのかを推し量るかのよう。

「別に……そうか、君と朔は袂を別つたのか」

袂も何も、朔と俺の関係そんなに深いものではない。数日前の仕事帰り、雨の中布一枚だけを纏いぐったりと倒れこんでいる少年を、何となく拾っただけだ。

ただ、それだけ。それだけの筈……なのに。

どうしてこんなに苛立っているんだ。

「……苛立つ？」

「そうだ、どうして朔のことで俺が苛つかなきゃならない？」

「じゃあ君は朔に何があるうが、どうでも良いと言うことで良いんだな？」

「……当たり前だろ？どうせ俺と朔は拾った・拾われっという関係でしかないんだから。それに、あんた曰く袂を別ったわけだから、」

「それを聞けて安心したよ」

春樹が、やけにすっきりしたような顔で言う。

「は？」

「陸が大分荒れててね。あれは朔に何をするか分かったもんじゃない」

「……」

「そこに君も加わったら面倒だと思ったけど、君がそう言うなら問題は無い。陸が朔を思い切り蹴って終わりだ」

俺の脳裡に、病院前のバス停から陸に連れ去られ、廃墟に連れ込まれたときの朔のことが浮かんた。俺が飛び込んだとき、朔は大きな瞳からぼろぼろと大粒の涙を零しながら陸に抱き抱えられていた。

俺を捉えた顔が安堵を描いたことにも、気付いた。

「あんたら、一体何なんだ」

朔も、陸も、目の前の男も。一体どういう“存在”なのか俺には分からない。

朔の、あの体の傷は……

俺がじっと春樹を見詰めていると、鳴海がまた俺のシャツの裾を掴んだ。

心配させていると俺は臍を噛む。場所を変えた方がいいかも知れない。……俺がそう思った瞬間、

「……世界を壊したい、そして実際に壊す者たちの集まりだよ」

声のトーンが半分ほど下がった春樹の言葉が静かな病室に凜、と響

いた。

22、逃避と混乱（後書き）

朔に対する“感情”に戸惑う主人公。

鳴海はそんな主人公を慕い、まだ病院に留まって欲しいと訴えますが……。

23、迷子と不穏と涙と（前書き）

朔は宝生の家へ行きます。

一方、笙汰は春樹と鳴海の病室で再会し・・・。

23、迷子と不穏と涙と

「お、お邪魔します……」

「そんなにビビらなくて良いから。ほら、上がって上がって」

「は、はい……」

宝生家は一軒家だった。しかも庭付きで車種は分からないものの、黒塗りの車がとまっていた。

「この時間は誰も居ないし、自由に寛いで良いよ」

そうは言われても自由に出来ないのが、朔だ。宝生がキッチンに歩いて行く後ろをぴたりくっついて行く。

「良いから、座ってて」

「で、でも」

「……分かった分かった。じゃあ、冷蔵庫に牛乳があるから出してくれる？朔君は珈琲、飲める？」

初めて耳にする単語に、朔はおうむ返しのように反応する。

「こーひー？」

「え、朔君は珈琲知らないの？」

何故か自分がひどく愚かな気がして、朔はサッと頬を赤らめた。

「す、すみません」

「あ、謝らなくて良いけど……じゃあ試しに飲んでみようか」

そう言くと、宝生は戸棚からインスタント珈琲を取り出して明らかに来客用だと分かる、白銀を基調とした、品の良い小花模様があしらわれているカップに匙で掬い取った珈琲の粒を入れる。

「朔君、牛乳」

「！はい」

ぼんやりと宝生の様子を観察していた朔は、牛乳のことをすっかり忘れていた。慌てて冷蔵庫に手を伸ばし、牛乳パックを取って宝生に渡す。

「うちの珈琲、少し苦いから俺も牛乳がないと飲めなくてね」

電気ポットから湯を注ぎ、さらに牛乳を入れ、銀のティースプーンで茶色い液体をカチャカチャとかき混ぜる。

「はい。珈琲ていうか、殆んどカフェオレだけど」

「あ、ありがとうございます……」

「じゃ、こつち」

宝生について、朔はキッチンを出た。

「朔君、犬は平気？」

「いぬ？」

「え、犬も知らない？」

きょとした表情の宝生を見ると、朔は自分が小さな子供になったみたいで恥ずかしくなる。カップをギュッと握り締め、朔は真っ赤になった顔を俯かせると言い訳をするように口をもごもごさせる。

「み、見たら……きつと分かります……」

「わ、悪い。別にからかったわけじゃないんだぜ？」

「は、はい」

宝生は内心でやれやれと思いながら、自室のドアを開けた。

「わんっ！」

「っ！」

部屋から何かが飛び出して来て、しかもいきなり声を上げたものだから朔はビクツとして思わずカップを落としてしまった。

ガシャンッ！と激しい音を立てて割れ、薄茶色をした液体が綺麗なフローリングの床を流れる。

「あ、あ」

「朔君、大丈夫？熱くなかった？」

宝生は自分のカップを部屋の机に置き、朔を下がらせると洗面所に走った。雑巾を手にして戻ると、涙目になった朔が自分の服を脱いで溢れた珈琲を拭いており思わず瞠目した。

「さ、朔君、何やってんの！」

「ひぐっ、」

怒っているつもりはないのだが、宝生が大声を出すと朔は喉を鳴らして体を硬直させた。

「ご、ごめ……なさ、」

それでも尚、床を拭こうとする朔を止めようとしたとき、ようやく宝生は気付いた。

（なんだ、あの傷……）

朔は今上半身、裸なわけだが……その裸身に縦横無尽に走る傷痕を見て絶句する。恐らくナイフのような刃物で出来た傷なのだと予想出来た。

虐待、なのだろうか。

「う、ひつく、うつ……」

「朔君、もう良いから！止めなさいっ」

宝生が朔の手から珈琲で濡れてしまった服を奪い取る。朔が手を伸ばしてくるが、宝生は服を自分の後ろに隠した。

「大丈夫だから」

「だ、だけど」

「怒っていないから、そんなに泣きそうな顔をしないで」

宝生が朔の頭を撫でると、彼はホッとしたように顔を綻ばせた。

「服は洗濯するとして……問題はそれが乾くまで、か」

宝生は朔を部屋のベッドに座らせると、クローゼットを開け整理整頓されているとは言い難い洋服入れを掻き回す。朔の体型に合うような服などあっただろうか。

「あ、あの……」

「ん？」

「あの……お布団、お借りしてもいい、ですか？」
遠慮がちな問いかけ。

（そうか……あんな傷痕、他人に見られたくはないだろうか）
宝生は朔に背を向けたままで良いよ、と頷く。

「あ、りがとうございます」

ずる、という衣擦れの音がする中、宝生は服を探す。だが朔に合い

そんなサイズの服は見当たらない。当たり前と言えば当たり前か。宝生は悩む。

（さっさと洗濯して乾燥させるか……んで乾くまでは布団をかぶつ
といってもらうか）

朔にそう尋ねると、朔は小さく頷いた。

「ごめんね。すぐに洗濯して来るから、ゆっくりしてて」

宝生が部屋を出て行き、朔は一人になった。

「斗賀野さん……」

布団を掴み、心細さに思わず笙汰の名前を呼んでしまう。

「わん！」

「ひあつ」

いきなり自分の真横に何かが乗ってきたかと思うと、大声で鳴かれて朔は悲鳴を上げた。

「な、なに……」

カップを割ったこととコーヒーを溢してしまったシヨックに陥っていた朔は、“それ”の存在を完全に忘れていた。小さくてこげ茶色で、真つ赤な舌をべろりと出し、ハッハッハと息をしている”それ”。

背後ではたと左右に揺れているものは何だろう、と朔は不思議に思う。首周りに赤色の輪がついているが苦しくないのだろうか。

「朔君どうした……って、ユウタか」

「ゆ、ゆうた？」

「そ。そいつの名前」

戻って来た宝生が“それ”に指を差して言うと、ユウタという名らしい“それ”はベッドから降りるといそいそと宝生の足元へ移動する。宝生はユウタを抱えると、

「ただいま」

と頭を撫でてやる。

「朔君を驚かせたのはこいつだな。悪かったね」
「い、いえ」

まだドキドキしている心臓を宥めながら、朔は宝生の腕の中のユウタを見る。どうやら彼が宝生の言っていた“犬”のようだ。やはり見たことがなかった。

「多分、俺の部屋にはじめて見る人が来たから、気持ち弾んじゃったんだろうな」

「は、はあ」

弾まないで欲しい、と思ったことは内緒にしておこうと朔は思った。「やっぱりサイズが大きくても良いから、服を着てもらおうか」宝生は小さく呟くと、クローゼットから薄墨色のシャツを出して朔に渡した。

「ないよりはマシだと思うから」

朔はおずおずとシャツを受け取ると、自分の体に走る傷痕は見えないようにそれを羽織った。やはりぶかぶかで、ボタンをしても肩幅が合っておらずずりりと下がりそうになる。

「眠そうだね。少し寝る？」

「え、でも……」

「遠慮しなくて良いよ。すごく疲れた顔してるし、無理は体に良くないからね」

ユウタが宝生の言葉に追従するかのように鳴いた。

「……じゃ、じゃあ少しだけ、」

「好きなだけ良いよ。どうせこの部屋には誰も来やしないから」

一瞬宝生がひどく儂い笑みを浮かべたように見え、朔は息を呑んだ。「それじゃお休み。俺は出てるから、ゆっくり休んで」

宝生はそう言い、朔のそばにいたそうなユウタを抱いたまま、静かに部屋を出た。

一人残った朔は、ごろりと横になった。クローゼットの中はチラ見するだけで整理されていないと分かったが、室内は比較的綺麗で整っている。

（……本当だ、眠い）

ぼんやりとした目で部屋を眺めていると、急激な睡魔が体を襲って

きた。

昨晩は公園のベンチという場所で寝たけれど、やはりそれでは眠ったとは言えなかったのだろう。

（とが……さ、）

笙汰の顔を思い浮かべながら、朔は深い眠りに落ちて行つた。

「世界を、壊す……?」

思わず言葉に、俺は完全に虚を突かれていた。

「そうだよ。世界を壊したいんだよ、俺たちは。この腐りきつた世界からの解放を願っているんだ」

歌うような口調とは裏腹に、奴の顔はどこか寂しげな色を浮かべている。

「朔も……そうだって言うのか?」

そうは訊きながらも、朔の細い体に縦横に走っていた傷痕を俺は思い出していた。そして、眼帯の下、眼球のない空っぽの眼窩……。

朔は自分の体と心を傷付けたこの“世界”を憎んでいる? 壊したがっている?

「朔は……正直俺にもよく分からないな」

「え?」

「朔は昔からあまり自分の意志を言わない子でね、大抵は陸に従うんだ。それは別に陸が脅すからじゃなくあくまで自分の意志で、だ。

最近はそうじゃないけど」

「・・・・・・・・」

「最近の陸は“力”で朔を支配するようになっていた。だから朔は陸に従う。従わざるを得ない。だから朔自身がこの世界をどう思いどうしたいのか、正直なところを俺は知らない」

俺は何も言えず、黙って奴の話を聞くしかできない。俺の緊張を察した鳴海が、更に強く俺のシャツの裾を握りこんでくる。

「だが陸は、心からこの“世界”と“異能者”を憎み、壊したがっている」

奴の目が、無防備に横になる鳴海に向けられる。

「あんだ、」

「違うよ。彼には何もしない、約束する」

信用出来ない。

俺はじつと奴を睨み付ける。

「彼には・・・・鳴海和晃君には申し訳ないことをしたと思っている」
「・・・・・・・・」

「だが何も鳴海君だけではないんだよ。相手が誰だろうと、陸は“異能者”であれば殺す。殺そうとする。好きも嫌いもない。“異能者”は残らず叩き潰す・・・・これが陸の信念だから」

信念？はた迷惑な信念だと俺は思う。そんなもんに巻き込まれた鳴海はどうなるのだ。

「そんな信念で、鳴海を殺そうとしたってのか」

何だ、胸の奥がざわざわする。

今までに感じたことのない不安定さを感じ、俺は少しだけ驚いた。

「・・・・俺は君はあまり人や物に執着するようには見えなかったが、見当違いだったかな」

「あ？」

「どうやらその子のことが大切に大切に仕方ないらしいね」

「だったらどうだってんだ。“奪う”ってか？」

こいつは一体何をしに来たんだ。俺をからかいに来たのか？と勘繰

る。

そのとき、

「めて、」

「鳴海？」

鳴海が急に声を出したから、俺は驚いた。奴も不思議そうな顔で鳴海を見る。

「鳴海、どうした。気分でも悪いかな？」

口元に耳を近づけ、問い掛ける。

だが鳴海は俺の問いには応えずに、こんなことを言い出した。

「や・・・めて、せん、ぱいをこまら・・・せる、のは。せ、ぱ・・・を、苛め、る、のは、めて・・・ください、」

切れ切れながらも、鳴海が俺をかばうような、守るような言葉を口にする。

「鳴海、良いから。あまり喋るな」

「で、も」

「あんた、用事が済んだらさっさと出て行ってくれよ。あんたのことも陸のことも、」

涙に濡れた大きな瞳が脳裡を過ぎるが、

「・・・朔のことも、俺には関係ないから」

俺は奴にそう言い放った。

奴がそうか、と軽く微笑む。

「それを聞けて安心したよ。ではそろそろお暇するよ、邪魔みたいだしね」

革靴が音を立ててスライド式のドアの前に移動し、そこでぴたりと止まった。

「もう二度と会わないで済むことを願っているよ」

そんな言葉を最後に、奴は病室を出て行った。

「俺だって会いたくねえよ」

後輩を傷付けるような奴に会って何が楽しいと言っただ。

「・・・世界を、壊す。」

どうやって？と考える俺は、どうなのだろう。

俺は、どうして生きているのだろう。こんな“欠陥”だらけの癖して。

本当に俺はこの世界にいたいと思っているのか？この世界を大切だと思っているのか？本当は俺も奴らみたく、世界を壊したいと思っているのではないのか？

「せ・・・はい、」

鳴海の声で、俺はハッと我に返った。鳴海の不安げな眼差しが、俺を映し出している。

「サンキュな。お前、俺を守ろうとしてくれたんだろ？」

「え、・・・と、」

「やっぱりもう少し傍にいるよ」

「ほ・・・んと、に？」

「ああ。だから、お休み」

鳴海は従順な様子で一つ頷くと、俺の手を握って来た。包帯でぐるぐる巻きにされた痛々しいその手を、俺はそっと握り返した。

「ありがとうな、鳴海」

守っているつもりで守られていたのかも知れない。そう思うとおかしくて、おかしくて。

とうに枯れ果てたと思っていた涙というものが、静かに俺の頬を伝って行った。

24、本当の気持ちと、嵐の前の静けさ

「良いから僕を此処から出せよ!!」

来栖陸は、ドンドントと鉄扉を力任せに叩き続けていた。皮膚が裂け、血が滲む。

「お前ら、あとでどうなるか分かってんだろ? ぶっ殺してやる!!」

整った小さな顔で、あらゆる罵詈雑言を刻み続ける。

「朔を動けなくしたあと、お前らも同じ目に遭わせてやる!!」

陸は手を止めると、一切物が無いがらんとする部屋で座り込んだ。

「くそっ! どいつもこいつも僕を虚仮にしゃがって……!!」

大きな目を怒りに燃やし、陸はごろんと床になった。

「朔の奴、もう絶対許さない」

泣きながら必死に斗賀野笙汰の名前を呼び、彼を求める姿。思い出すだけで腸が煮えくりかえりそうだった。

朔の涙も怯えた顔も震える体も、全て自分のものだ。誰にも渡さない。

「斗賀野笙汰も許せない。僕の朔を奪いやがって、腹が立つ、腹が立つ、腹が立つ。」

「朔、次に会ったら覚えておいでよ。絶対に後悔させてやるから」
陸は小さく呟き、うふふふと不気味な声で笑った。

・・・恥ずかしい話、良い匂いで目が覚めた。ぐるる、と抱えた腹が現金な音を立てる。

朔は真っ赤になって熱い顔を、布団で隠す・・・と殆ど同時に遠慮がちにドアのノックされる音がした。

「朔君。宝生だけど、起きてる？」

「！あ、大丈夫です。起きてます」

朔が返事をする、ユウタをかかえた宝生がヒョイツと顔を覗かせた。

「良かったら昼飯どう？家政婦さんのメシだから、美味しいよ？」

「た、食べたいです」

「じゃあ俺の分も持ってくるから、待つて。ここで食べよう」

宝生は部屋に入ってくると、朔に向けてユウタを差し出した。キョトン、とする朔をユウタの黒い団栗眼が見詰めている。

「こいつ、抱っこしてて。どうも朔君のこと心配で、あのドアの前ですっと待つてたっばいんだよね」

「え！」

思わずユウタを凝視すると、ユウタは一つ嬉しげにワンツと吼えた。朔は戸惑いながらも、手を伸ばしてユウタを受け取る。

「じゃあ、すぐ戻ってくる」

そう言つて宝生は部屋を出て行く。

「ぼ、僕・・・のこと、心配してくれた、の？」

「ワンツ！はっはっは、」

真っ赤なベロを出し、ユウタは無心に朔を見つめている。

「ありがとう・・・でいいのかな、」

犬って温かいんだ、と朔は思った。生きている、からか。

（生きてるって、どういうことなんだろう）

呼吸をし、目を開き、食事を摂り、テレビを観たり話をしたりする。それで“生きてる”ということになるのだろうか。心臓が動いていれば、“生きている”ことになるんだろうか。

（・・・何を考えてるんだ、僕は）

「お待たせ」

宝生が戻って来た。彼は硝子テーブルの上に幾つかの料理を並べていく。

「美味しそう、」

並んだ料理は、和食だった。

炊き込み御飯で作られた御結び、ほうれん草の白和え、出汁巻き卵、鮭の塩焼き、豆腐と若芽のお吸い物。まるで朝食みたいだ、と朔は思った。

「ちよつと薄味かも知れないけど、美佳子さん・・・あ、家政婦さんの名前だけど、美佳子さんの作る料理はまじで美味いから。朔君もきつと気に入ってくれると思うよ」

宝生が照れたように言う。

「ほら、食べなよ」

「い、いただきます」

笙汰のご飯も美味しかったが、男の料理というイメージがあった。だが今並んでいる料理は何処か気品のようなものが漂っている。

朔は箸を手にとると、まずは出汁巻き卵にその先を伸ばした。そつと口にし、ゆっくり咀嚼する。

（何だろう……優しい味、がする）

「美味いだろ？」

「はい、」

すべての品に一度ずつ箸をつける。

……美味しい。体に、心に染み渡る気がする。

「良かった。気に入って貰えたようだな」

「はい。とても、美味しいです」

そう、美味しい。

自分にはもつたないくらい、美味しい。
なのに、なのにどうして。

「くうん？」

「あ、ごめ……んね、ユウタ。冷たいね、」

膝の上にのっているユウタの鼻先に涙が落ちて、朔は慌てて彼の鼻を拭いてやる。

「泣きたいんだな」

「……！」

宝生が、優しく微笑んでいる。朔は真っ赤になった目で、彼を見る。「泣きたいなら、泣けば良い。飯が泣く程美味いから、って思ってる」

どうしてこの人はこんなに優しいのだろう。

会ったのだって、笙汰の部屋での一度きりで、その時だって大した触れ合いなどなかったのに。

「ユウタも、きっと俺と同じように思ってくれてるからさ。きっと」
「わん！わんっ」

宝生の言葉が分かるのか、彼に追従するようにユウタが吠えた。

「……………」

朔は箸を握ったまま、並べられた料理に再度目を落とす。

綺麗な色合いで、美味しくて疲れた体と心に染み渡るくらいに優しい味で。

何故かその一方で悲しくて。

『たくさん食えよ』

何処か気恥ずかしげに言ってくれた、拗ねたような顔を思い出す。現金な朔の腹に呆れつつも、美味しいご飯を作ってくれて。

……鳴海があんな目に遭ったのに、朔は悪くないと言ってくれて。大きく温かい手で、頭を撫でてくれて。

「と、がっ」

ひくっ、としゃくりあげ朔は箸を取り落とす。

「……斗賀野さ……っ、」

どうして、こんなに苦しいのだろう。どうして、こんなに悲しいのだろう。自分から逃げて来たのに。

もう笙汰や鳴海を傷付けたくないからと自分が望んで彼らから遠ざ

かったのに。公園での笙汰との電話のやり取りを思い出す。

それだけで、涙腺が決壊したかのように朔は涙を溢す。

「そうだ。悲しいなら、泣きたいなら、泣けば良い。………何で、結羽は泣かなかったんだ」

結羽とは誰だろう、と宝生の呟きを聞いて思ったが朔は自分の中で込み上げる苦しい想いを消化するのに精一杯で宝生の辛そうな表情には全く気付けなかった。

「斗賀野さん、」

会いたい。勝手だけど。自分から遠ざけたけれど。

彼に、斗賀野笙汰に会いたいと思う気持ちは本物だと朔は思った。

そうだ、と宝生は俯いて泣き続ける少年を見守りながら、気付いた。少年は、似ているのだ。死んでしまった宝生の、妹に。

朔は男で妹は当然女だが、性別など関係ない。

顔立ちも、今にも消え入りそうな儚い雰囲気も。妹に重なってしまふ。

（どうしてだ？）

単なる気のせいだろうか。……きっとそうなのだろうが、

（笙汰のやろう、こんな良い子を泣かしやがって）

友人に内心で毒づくと同時に、一体笙汰と朔に何があったのかが気になった。

そして、一応は笙汰の“親戚”と認識している朔は、本当に笙汰の

親戚なのか、と。

「ユウタ、おいで。一人にしてあげよう」

大人しく自分の元にやって来た愛犬を抱き上げ、宝生は部屋を出た。朔の、聞くものの心も痛くしそうな嗚咽を耳にしながら。

「おやおや」

和晃の病室に行くと、笙汰が頭を和晃の胸のあたりにつけて眠りに落ちていた。

本当に帰ったのだろうかと思っていたが、和晃と一緒に寝ていたとは、と鳴海章介は苦笑する。

「和晃、良い先輩を・・・いや、良い友人を持ったな」

出会った頃の和晃からは考えられないほど、最近の彼はよく笑うようになった。

特に笙汰の話をする時はいきいきとして円らかな瞳をきらきらと輝かせていた。

（和晃、お前を殺そうとしたのは、一体誰なんだ？お前を哀しい目に遭わせようとしたのは、何処の誰なんだ？）

もう少しで喪われていた、愛しい者の命。

事故に遭ったと聞いただけで決られそうだった肺腑は、命が喪われていたら肺腑は粉微塵だったに違いない。

（・・・お前の“力”に、関係しているのか？）

そう。章介は知っている。鳴海和晃という人間の持つ、不思議な“力”を。

ふとした機会に、章介は見たのだ。部屋にあった、花瓶に差さった花が萎れていることに気付いた和晃が、そっとそれに指を伸ばしたと思うや否や、

「……萎れて下を向いていた花が、まるでビデオの巻き戻しでも見ているように綺麗に咲き誇ったんだね。どんな手品かと思ったよ」

だがそのことを不気味だと思うことは、章介はしなかった。笙汰と同じように。

「お前にピッタリだと、思った」

なあ、と章介は甥っ子を慈愛に満ちた視線で見下ろす。

「優しいお前に、ピッタリだって」

「ん、」

笙汰が小さく声を上げて、身動きをする。起きるだろうか、と思ったが彼は目覚めなかった。

「なる……み、」

彼の身を案じて帰るようにと言ったが、それは間違いだったかと章介は思った。

「ありがとう、斗賀野君」

微笑み、もう少し二人きりにしてあげようと章介は静かに病室を後にした。

25、狙われた朔（前書き）

お久しぶりな上に短いです。
でも事態は急展開を迎える・・・筈です。

25、狙われた朔

「ご馳走様でした」

「あらあらご丁寧にどうもありがとうございます」

宝生家の家政婦さんに挨拶をした後、朔は宝生とともに外へ出た。

「途中まで送る」

という宝生の言葉に甘えることにしたのだ。宝生家の周囲の土地鑑など一切無いからだ。

それに、一人で歩くのは流石にまだ恐かった。いつ陸に見つかるとも知れない。

「ていうか先に笙汰に連絡しとくわ」

「は、はい。お願いします」

笙汰は自分を受け入れてくれるのだろうか。こんな、身勝手な自分を。

「……そんなに不安そうな顔しないでよ。笙汰なら、分かってくれるから」

宝生の気遣いが嬉しくて、また涙腺が緩んで来る。

「頼むから、笑ってろ」

「はい。ありがとうございます」

宝生が携帯を掛ける横で、朔はまんじりともせず立っていた。宝生には励まされても、やっぱり怖い。笙汰に拒絶されるのではないかと、不安で仕方ない。

（やっぱり僕は勝手だ。我が儘だ）

不安になればなるほど自分への嫌悪感も膨れ上がる。

「ダメだ、笙汰の奴出ない」

「え？」

「電波の届かない所にいるのかもな」

「あ……………」

それを聞いて、すぐに笙汰は鳴海の病室にいるのだらうと気付いた。

きつと鳴海に付きつきりで居るのだろ。ならば鳴海のもとへ行けば会える。

「タクシーを拾えそうなところに連れて行ってもらえますか？」

「タクシー？それは構わないけど、笙汰の居場所が分かるの？」

朔がコクリ、と頷くと宝生も頷き返して歩き出した。

「・・・また、ユウタに会いに来てやってよ」

不意に発された宝生の言葉に、朔は

「え？」

と思わず問い返した。

「ユウタに？」

「あいつ、大分前からオレ以外の人間に懐かなくてさ。そのユウタが朔君にはあんなに懐いてさ。だから、ね」

「は、はい。僕でよければ」

「サンキュ。よし、じゃあタクシー探そうか」

「はい！」

二人は笑い合った。

「対象を発見。一般男性と一緒にのようですが、どうしますか？」

『しばらく様子を見る。対象は恐らく先ほど添付した資料にある病院に行く筈だ。それまでに確保しろ』

「・・・できなかった場合は？」

『お前の明日はないと思ってくれて良い』

「了解。最善を尽くします」

『健闘を祈る』

自分たちのすぐ傍で、そんな不穏な会話が成されていることも知らずに。

・・・大分眠ってしまったようだ。

「・・・む、」

俺は眠い目を抉じ開け、上体を起こした。鳴海は穏やかな寝息を立てて眠っている。

もう大丈夫かと、俺は安堵の息をついた。これで明日から心置きなく仕事へ行ける。

そう、行けるはずだ。

・・・そう思うのに、何かが気がかりだった。その正体は分かっているのに、俺はそれを正視することが出来ないらしかった。

「斗賀野さん」

「!？」

その“正体”が声を発したような気がして、俺は思わず背後を振り返った。だがそこには誰もおらず、病室と廊下を隔てるドアがあるだけだ。

気のせい・・・だろうな。

俺はそう結論付けて、軋む体を捻りながら椅子から立ち上がった。少し食欲も出てきたし、一階の売店で何か買って来ようと思ったからだ。

俺は知らなかった。

このたった今、朔と朔に付き添っている宝生がどんな目に遭っている

るのかを。

宝生の父親は刑事だ。それがどれだけ凄いことで、大変なことで、危険が伴うことかは分かっているつもりだ。

だが、幾ら刑事の息子だからと言っても生で拳銃を見たことがあるとは限らない。

「な、」

訳が分からず、間抜けな声を出すことしか出来ない。

・・・表通りでタクシーを拾い、病院名を告げた。

緊張している朔の横に座ってぼんやりと窓の外を見ていただけだ。

だが、いきなりタクシーは路肩に寄って停車してしまい宝生も朔もどうしたのだろうと怪訝に思った、その、瞬間だった。

運転手が身を捻って顔をこちらに向けたかと思うと、黒光りする拳銃を二人に向けたのだ。

朔がヒツとか細い悲鳴を上げ、宝生のシャツの裾を握った。

「お前」

宝生を顎で差し、運転手は暗くて低い声で彼に命令した。

「その餓鬼を置いて、外へ出る・・・死にたくなければな」

朔がぶるぶると震え、その顔は蒼白になっている。

「あんだ、」

外を歩く人間は車内の異変には気付かないらしく、誰もこちらには気を配っていない。

「あんだ誰だ。朔君の知り合いか？」

「良いから黙って出る。血を見たいのか」

それが威しでもなんでもないことは、運転手の血走った目を見れば分かる。宝生が下手な動きをすれば、恐らく発砲するだろう。

「ほしよ・・・さ、逃げ・・・て、」

朔は運転手の素性に検討がついているのか、じっと彼を見詰めたまままで宝生に言う。

「でも！」

「僕は・・・平気、きつと、殺されることは・・・ないから」

その根拠は一体何処から来るのか。

そう問い詰めようとした宝生だったが、ごりつと米神に銃口を突きつけられて体を硬直させた。

「早くしろ」

こうなったら、自分が外へ出るときに朔を無理矢理にでも引つ張って連れ出すしかない。

だがそんな宝生の考えを見抜いたのか、不自由な体勢にも関わらずいきなり運転手が銃の柄で朔の側頭部を殴りつけた。

「あうっ！！」

「朔君っ」

朔が背にしていたドアに後頭部を強打してしまい、ズルツと崩れ落ちた。

「言う通りに、大人しく出る。じゃないと・・・」

その先を聞くのは恐かった。

「分かったから、朔君にそれ以上手を出すなっ！」

宝生は自分でドアを開け、外へ出た。運転手はそれを見届けると、ドアを自動で閉めて車を急発進させた。

ぐったりとした朔を乗せたまま。

「くそ！」

宝生はタクシーのナンバーを必死に頭に叩き込むと、携帯で笙汰にコールした。

（朔君・・・っ！）

25、狙われた朔（後書き）

いかがでしたか？

次回は出来るだけ早く投稿できるよう頑張ります！

26、囚われた朔（前書き）

暴力表現が後半に入ります。

微々たるものですが、ご注意ください。

そしてお久しぶりです……。

26、囚われた朔

「……俺がその電話に気付いた時、売店で店員からつり銭を貰っていた。」

「ありがとうございますー」

俺は店員の挨拶を聞きながら、売店を出ると一度正面玄関から外へ出た。携帯を出し、誰からだろうかとディスプレイを見れば、“宝生”の文字。

「もしもし？」

朔に何かあったのだろうかと思っただけで、そんな大事ではないだろうと高を括っていた。だが、

「しょ、笙汰、大変だっ！！」

聞こえて来たのは、今までにないくらの宝生の切羽詰った声で。

俺は一気に嫌な予感が膨れ上がるのを感じた。

「……何があった」

「朔君……朔君がタクシーの運転手に攫われたんだ！」

タクシーの運転手、だと？

俺はてっきり朔の兄貴か、あの春樹とかいういけ好かない優男かと思っただけだ。

何故にタクシーの運転手なのだろう。

「普通にタクシーに乗ってたなら、その運転手がいきなり銃を出してきて、朔君を置いて俺だけ外へ出るって！」

「……」

「朔君、運転手がどんな奴か知ってるような感じだった。自分は良から、俺だけ逃げろって」

「……世界を壊す、といった春樹たちの仲間なのだろうか。」

それなら朔が知っているのも頷けるが。

「それで、場所は」

宝生が矢継ぎ早に言った地名は、俺がいる病院のすぐ近くだった。

『笙汰どうしたら良い！？』

俺に言われても困る。闇雲に探したところで、そのタクシーを発見できる可能性は限りなく低い。

朔の泣き顔が一瞬脳裏を過ぎる。

「何処のタクシーだ？ナンバーは覚えてないのか？」

『そ、そうだ！ナンバーは覚えてる！』

駄目元で訊いてみたところ、思わぬ返事が来た。

『どうしよう！警察に言うべきだよなっ！？』

宝生の勢いにつられて頷きかけた俺だったが、朔の出自の不明瞭さに気付いてすぐに返答が出来なかった。

『笙汰？』

「・・・警察は、駄目だ」

思わずそう言っていた。宝生が電話の向こうで素っ頓狂な声を上げる。

『それ、どういうことだよ！お前、朔君が心配じゃねえのかよ！？』

「兎に角、警察は駄目だ」

『だから何で！？』

「・・・そのタクシーの会社と、ナンバーを教えてください」

警察が駄目なら・・・

『お前、どうする気だ？』

「良いから教えろ！！」

思わず怒鳴ってしまい、近くにいた通行人の注目を集めてしまった。だが今はそれどころではない。

「宝生！」

『わ、分かったよ』

俺の気迫に呑まれたのか、宝生が不承不承といった感じながらも、タクシー会社とナンバーを教えてくれる。

俺はそれらを頭に叩き込むと、何も言わずに電話を切った。電話をジーンズのポケットにねじ込み、鳴海がいる病院を見上げる。

（鳴海、ごめんな・・・）

もう少し一緒にいると約束したのに、破ることになるのが苦しかった。だが、

（また後で、来るから）

心の中で新たな約束をして、俺は駆け出した。

頭が痛い。

「う、ひぐっ・・・」

宝生には殺されることはないと言ったものの、然したる自信がある訳ではなかった。

だけど、そうとでも思わないと心細さと不安に支配され何も出来なくなってしまういそうだから。

「こうもうまく行くとはな」

宝生を降ろして暫く走った後、運転手は若い男を拾った。

そいつはひよろりとした長身の男で、朔の横に座ってからずっと、細い目の奥の粘着質な視線を、朔に送りつつけている。

朔は蛇に睨まれた蛙よろしく、その視線に絡め取られたまま身動きできずにいる。

不意に、男が朔の顎を掴むと、無理矢理顔を上げさせた。

「んっ・・・」

「おやおや、色っぽい声を出すじゃないか」

男の手は生温く、気持ち悪かった。

「それに可愛い顔をお持ちで。女なら大した上玉だが、」

グツと、顕わになった朔の咽仏を空いている方の親指で押した。

「ぐっ・・・、」

「これがついているから、男なんだよなあ。残念」

ひひひ、と不気味な笑い声を上げて、朔から手を離す。

「う、げほ、げほっ・・・、」

身を守るように体を縮こまらせ、朔は必死に息を整える。

「なあ、餓鬼」

男に呼ばれて、朔はビクツと身を竦ませた。

「その眼帯の下にあるもの、“出せ”よ」

（え？）

全く予想もしていなかった事を言われ、朔は一瞬恐怖を忘れた。

「お前の眼帯の下に、穴が開いてるだろ？その中に入れた・・・いや、“入れられた”もんがあるだろ？そいつを出せって言ってるんだよ」

男が何を言っているのか、朔には本当に分からなかった。

空っぽの眼窩に、入れられたもの？

「そ、そんなの・・・僕は、知らない、」

掠れた声ながらも、必死に朔は言うが、男と真正面から視線がぶつかってしまったと、蛇に睨まれる蛙に戻ってしまう。

「・・・もう一度チャンスをやろ。四の五の言わず、出せ」

朔は首を左右に振ることで男に応えるが、

「っ・・・!!」

思い切り拳で頬を殴られた。ついで腕をグイッと引つ張られ、抵抗する間もなく男の腕の中に体を捕らえられてしまう。

「は、放して・・・っ、」

どうにかして逃れようとするが、首元に男の腕が巻きついてきて、息をすること自体苦しくなる。

「んっ・・・、」

「俺はな、御覧の通り短気なんだよ・・・あまり怒らせんなよ」

「ほんっ、本当に・・・知らないっ、ひいっ・・・!」

手と同じように生温い舌で、首筋を一舐めされ、ぞくりと身が震える。

「さっきは女なら上玉とは言っただし、俺はノーマルな人間だ・・・」

でもな、」

「・・・・・・・・!!」

男の手が、朔の前を掴んだ。

朔が体を硬直させるのをせせら笑いながら、男が言葉を続ける。

「・・・・・・・・男でも出来ないことはねえんだぜ？」

「・・・・・・・・」

「どうだ？それでも、素直に言うことを聞くことは出来ねえか？」

「・・・・そんなことを言われても、朔にはどうすることも出来ない。

本当に知らないのだから。

だがこのままでは、確実に朔は男の慰み者にされるだろう。

（斗賀野・・・さん、どうしたら・・・どうしたら良いの？）

「どうしても、嫌みたいだな」

男が呆れたような、怒っているような、微妙な溜息を吐き出す。

前を掴む手に更なる力を込められ、朔は痛み顔に顔を歪めた。

「・・・・仕方ねえな。“あそこ”に着いたら、うんと可愛がつてや

る・・・・体に聞いてやるから、そのつもりで」

首元に巻き付いていた腕と前を掴んでいた手を外され、朔はまた体

を縮こまらせた。

涙を浮かべ、ぶるぶると体を震わせながら、ありもしないであろう

“助け”を、必死に願った。

（斗賀野さん、助けて、助けて・・・・・・・・っ!!）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9295f/>

希薄な恐怖心

2010年10月8日22時52分発行